

柏崎市の遺跡 IX

—柏崎市内遺跡第IX期発掘調査報告書—

2000

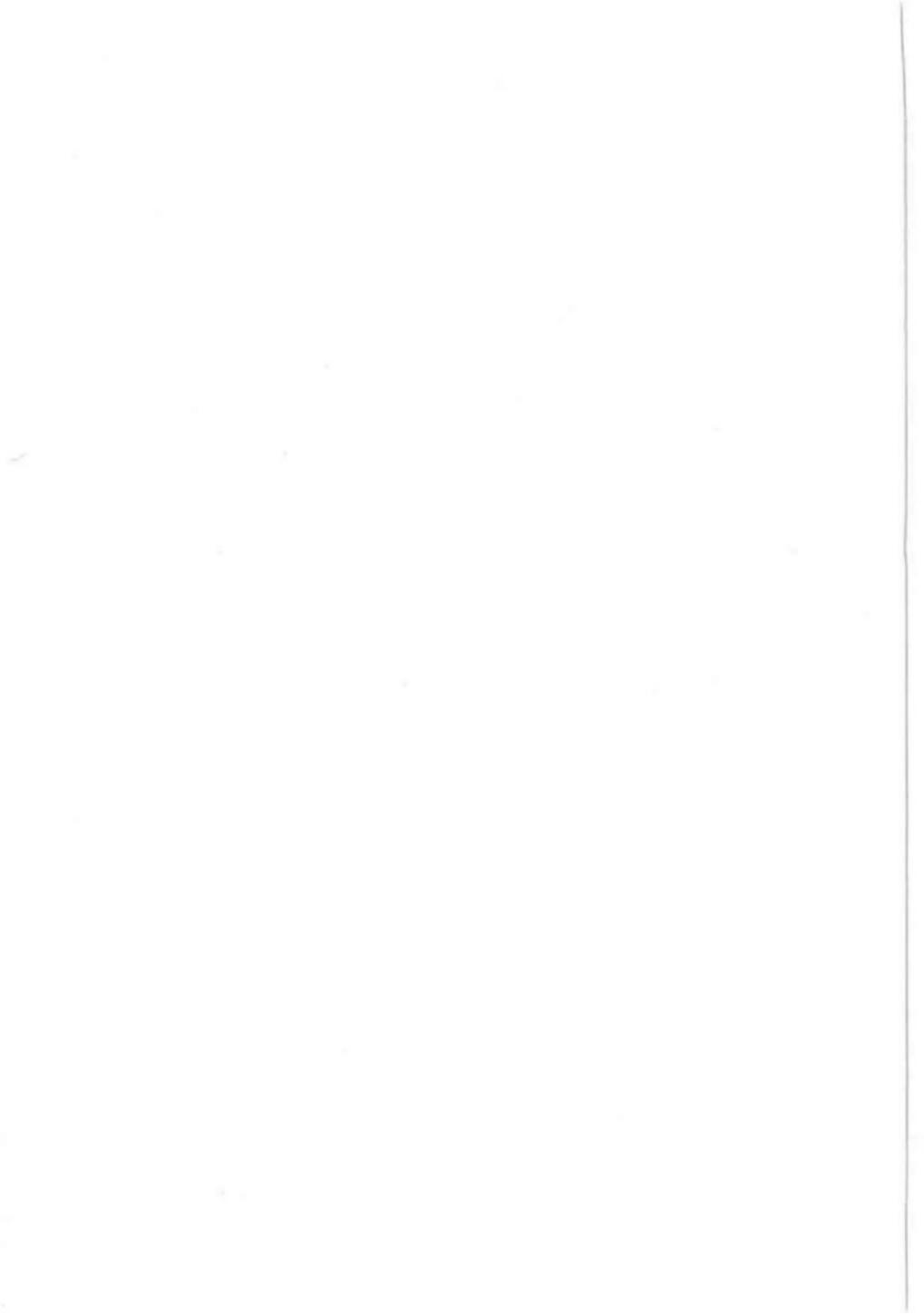
柏崎市教育委員会

柏崎市の遺跡Ⅸ

——柏崎市内遺跡第Ⅸ期発掘調査報告書——

2000

柏崎市教育委員会



序

埋蔵文化財が埋もれている場所、つまり遺跡は、一度破壊されてしまうと回復することが極めて困難なことから、自然に例えられることがあります。しかし、遺跡は人のさまざまな暮らしの跡であるため、それだけ身近な存在ということになります。そして、暮らしの利便性など、生活しやすい環境づくりを進めていく上では、時として開発され、結果的に損なわれてしまう機会も多くなっています。遺跡の発掘調査とは、ほとんどがこのような場面において、壊れてしまう部分に対して実施され、記録として残されるわけです。

柏崎市教育委員会では、開発に伴う事前調査として国・県の補助金を得て柏崎市内遺跡発掘調査を実施しています。本年度は、第IX期調査として柏崎町遺跡と藤井城跡、そして小峯遺跡の3カ所の遺跡を調査しました。事業の内容は、開発区域内における遺跡の有無、あるいは遺構・遺物の密度や規模などを把握し、遺跡保存や本発掘調査の要否判断等のデータを得る試掘や確認調査となっています。このため、発掘された調査面積は狭く、遺跡全体を見極めるには不充分であり、得られたデータも多くありません。

しかし、遺跡の時代や規模、性格などの大まかな内容を推し量ることはできます。遺跡は、私たちの祖先が営々と築いてきた文化遺産であるとともに、地域の歴史的資源です。また、ここで発見された事実とは、各地区の歴史を探る貴重なデータに違いなく、幾百年かそれ以上の時を隔て、今に知らされた初めての事実でもあります。確かに、資料としてはささやかでありますが、この報告書が地域の歴史理解の一助となり、地域づくりや遺跡保護のため活用されるとすれば幸いに思います。

最後に、調査に参加された調査員各位、本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会、ならびに調査にご協力いただいた事業者及び工事関係者に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成12年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市における各種開発にともない実施した試掘・確認調査の記録である。
2. 本事業は、柏崎市教育委員会が主体となり、国・県の補助金を得て平成3年度から実施している「柏崎市内遺跡発掘調査事業」である。平成11年度は第9年次となる第IX期調査であることから、本書は『柏崎市の遺跡IX』とした。
3. 第IX期調査では、3遺跡に対し4件の試掘確認調査を実施した。本書では、この調査結果を報告するものであるが、平成10年度末に実施した柏崎町遺跡に対する第2次試掘確認調査報告が含まれている。
4. 試掘確認調査の現場作業は、文化振興課職員及び遺跡調査室スタッフを調査員として実施した。整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目番地内文化振興課遺跡調査室において、職員（学芸員）を中心、遺跡調査室のスタッフで行った。
5. 発掘調査によって出土した遺物の注記は、柏崎町遺跡：「東本町」・「柏崎町」、藤井城跡：「藤井城カクニン」、小峯遺跡：「コミネ」とし、地区やグリッド名および遺構名および層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
8. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、調査担当の品田が編集もあわせて行った。

第Ⅰ章……………中野　純

第Ⅱ章第1節・第Ⅳ章第1節・第2節・第3節第2項

第V章・第VI章・写真図版……………品田高志

第Ⅱ章第2節～第4節・第III章・写真図版……………伊藤啓雄

第Ⅳ章第3節第1項……………猪爪一郎

9. 本書掲載の図面類の方針は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

10. 発掘調査から本書作成まで、それぞれの事業主体者および工事関係者等からさまざまご協力とご理解を賜った。またこのほかには、近世陶磁器関係について見附市教育委員会安藤正美氏から多くのご教示を受けるとともに、多くの方々からもさまざまご助力とご協力等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

遠藤宣男・大関武彦・大橋康二・川又昌延・北村　亮・沢田　敦・鶴巻康志・水澤幸一・宮田進一・村上伸之

伊原組・伊山組・柏崎市立博物館・柏崎市立図書館・新潟県教育庁文化行政課

(五十音順・敬称略)

調　　査　　体　　制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一

総　　括 小林清輔（文化振興課長）

監理・庶務 猪爪一郎（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長）

調査担当 品田高志（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係主査・学芸員）

中野　純（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

平吹　靖（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

横田忠義（文化振興課埋蔵文化財係工務員）

帆刈敏子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

渡辺富夫（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

黒崎和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

高橋恵美（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

整理作業スタッフ

徳間香代子・村山幸子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

竹井　一・黒崎和子・萩野しげ子・吉浦啓子・片山和子・大野博子・月橋香奈子
(文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)

目 次

I 序 説	1
1 柏崎市内遺跡発掘調査等事業の意義	1
2 平成11年度事業の概要	2
3 遺跡の位置と環境	3
II 柏崎町遺跡(第2次試掘確認調査)	5
1 調査に至る経緯	5
2 遺跡の立地と調査	6
3 調査の概要	9
4 調査のまとめ	25
III 柏崎町遺跡(第3次確認調査)	26
1 調査に至る経緯	26
2 調査の概要	26
3 調査のまとめ	30
IV 藤井城跡	31
1 確認調査に至る経緯	31
2 確認調査	34
3 調査の成果とまとめ	43
1) 藤井城の沿革と現状	43
2) 藤井城跡A地点における築城状況とその後の展開	59
V 小峯遺跡	64
1 確認調査に至る経緯	64
2 確認調査	64
3 遺構と遺物	69
4 調査のまとめ	72
VI 総 括	74
<引用参考文献>	74
<抄 錄>	卷末

図 版 目 次

- 図版1 柏崎町遺跡（第2次）1 柏崎町遺跡周辺航空写真（1947）
- 図版2 柏崎町遺跡（第2次）2 a・b. 調査区近景
- 図版3 柏崎町遺跡（第2次）3 a～h. 調査区近景
- 図版4 柏崎町遺跡（第2次）4 a～h. 調査風景
- 図版5 柏崎町遺跡（第2次）5 a～h. トレンチ全景・層序・遺構
- 図版6 柏崎町遺跡（第2次）6 a～h. トレンチ全景・層序・遺構
- 図版7 柏崎町遺跡（第2次）7 a～h. トレンチ全景・層序・遺構
- 図版8 柏崎町遺跡（第2次）8 a～h. トレンチ全景・層序・遺構
- 図版9 柏崎町遺跡（第2次）9 a～h. トレンチ全景・層序・遺構
- 図版10 柏崎町遺跡（第2次）10 a～h. トレンチ全景・層序・遺構
- 図版11 柏崎町遺跡（第2次）11 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版12 柏崎町遺跡（第2次）12 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版13 柏崎町遺跡（第2次）13 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版14 柏崎町遺跡（第2次）14 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版15 柏崎町遺跡（第2次）15 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版16 柏崎町遺跡（第2次）16 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版17 柏崎町遺跡（第2次）17 a～d. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版18 柏崎町遺跡（第2次）18 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版19 柏崎町遺跡（第2次）19 a～c. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版20 柏崎町遺跡（第2次）20 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 C地点）
- 図版21 柏崎町遺跡（第2次）21 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 C地点）
- 図版22 柏崎町遺跡（第2次）22 a. 出土遺物（土器・陶磁器 C地点）
b. 出土遺物（土器・陶磁器 D地点）
- 図版23 柏崎町遺跡（第2次）23 a. b. 出土遺物（土器・陶磁器 D地点）
- 図版24 柏崎町遺跡（第2次）24 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 D地点）
- 図版25 柏崎町遺跡（第2次）25 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 E地点）
- 図版26 柏崎町遺跡（第2次）26 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 E地点）
- 図版27 柏崎町遺跡（第2次）27 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 F地点）
- 図版28 柏崎町遺跡（第2次）28 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 F地点）
- 図版29 柏崎町遺跡（第2次）29 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 F地点）
- 図版30 柏崎町遺跡（第2次）30 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 F地点）
- 図版31 柏崎町遺跡（第2次）31 a～c. 出土遺物（土器・陶磁器 F地点）
- 図版32 柏崎町遺跡（第2次）32 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 G地点）
- 図版33 柏崎町遺跡（第2次）33 a・b. 出土遺物（土器・陶磁器 H地点）
c. 出土遺物（土器・陶磁器 B地点）
- 図版34 柏崎町遺跡（第2次）34 出土遺物（木製品）
- 図版35 柏崎町遺跡（第2次）35 a. 出土遺物（石製品） b. 出土遺物（金属製品）

- 図版36 柏崎町遺跡（第2次）36 a・b. 出土遺物（鍛冶関連）
- 図版37 柏崎町遺跡（第2次）37 a・b. 出土遺物（鍛冶関連）
- 図版38 柏崎町遺跡（第3次）1 a・b. 調査区遠景
- 図版39 柏崎町遺跡（第3次）2 a～h. トレンチ全景・層序
- 図版40 柏崎町遺跡（第3次）3 a・b. 調査区近景 c・d. 調査風景 e. 出土遺物
- 図版41 藤井城跡1 藤井城跡周辺航空写真（1965）
- 図版42 藤井城跡2 a. 藤井城跡（本丸）近景 b. 本丸近景 c. 本丸北辺の内堀
d. 本丸西の土壠断面 e. 本丸北辺の内堀
- 図版43 藤井城跡3 a. A地点遠景 b. A地点近景 c. A地点全景
d. 第1次調査スナップ e・f. TP-1試掘坑 g・h. TP-2試掘坑
- 図版44 藤井城跡4 a・b. TP-2試掘坑 c・d. TP-3試掘坑 e～g. TP-5試掘坑
h. TP-4試掘坑
- 図版45 藤井城跡5 a・b. 遺構確認状況
- 図版46 藤井城跡6 a・b. 遺構確認状況
- 図版47 藤井城跡7 a. 表土剥ぎと遺構確認 b. 遺構の発掘
c. 遺構発掘と測量 d. SK-7土坑 e. SK-12土坑
f. SK-15土坑 g. SK-16土坑 h. SK-17土坑
- 図版48 藤井城跡8 a. SD-23廻状遺構と五輪塔（火輪） b. SX-26道路と側溝
c. SD-19溝 d. SD-22・27溝 e. SD-23廻状遺構の落ち込み
- 図版49 藤井城跡9 a・b. 出土遺物
- 図版50 藤井城跡10 a・b. 出土遺物
- 図版51 小峯遺跡1 a. 調査区域近景と発掘作業 b. 試掘坑の調査 c・d. TP-1試掘坑
e・f. TP-2試掘坑 g・h. TP-3試掘坑
- 図版52 小峯遺跡2 a・b. TP-4試掘坑 c・d. TP-5試掘坑 e・f. TP-6試掘坑
g・h. TP-7試掘坑
- 図版53 小峯遺跡3 a・b. 出土遺物
- 図版54 小峯遺跡4 出土遺物

挿 図 目 次

第1図 平成11年度 柏崎市の発掘調査（現場作業）工程表	2
第2図 第IX期発掘調査対象遺跡位置図	4
第3図 柏崎町遺跡位置図	7
第4図 柏崎町遺跡試掘確認調査地点	7
第5図 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査トレンチ配置図	11
第6図 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査基本層序柱状模式図	15
第7図 柏崎町遺跡第3次確認調査対象区域	27
第8図 柏崎町遺跡第3次確認調査トレンチ配置図	27
第9図 柏崎町遺跡第3次確認調査基本層序柱状模式図	29

第10図	藤井城跡現況とA地点の位置	33
第11図	藤井城跡A地点試掘坑層序	35
第12図	藤井城跡A地点の調査区	37
第13図	第2次調査断面図	38
第14図	藤井城跡A地点遺構平面図	39
第15図	藤井城跡A地点出土遺物	42
第16図	稻垣氏（清和源氏支流）略系図	48
第17図	明治26年調整の地籍図	49
第18図	藤井城跡の地形と地名	50
第19図	藤井城跡主要部の土塁と内堀	51
第20図	藤井城復元図（試案）	55
第21図	藤井城跡A地点基本層序概念模式図	60
第22図	藤井城跡A地点遺構配置概念図	62
第23図	小峯遺跡の位置と周辺の地形	65
第24図	小峯遺跡調査区と試掘坑の位置	67
第25図	小峯遺跡確認調査土層柱状図	68
第26図	小峯遺跡確認調査出土土器（1）	70
第27図	小峯遺跡確認調査出土土器（2）	71
第28図	小峯遺跡周辺の地形と遺跡推定範囲	73

挿 表 目 次

第1表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査主要遺構一覧表	16
第2表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（1）	18
第3表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（2）	19
第4表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（3）	20
第5表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（4）	21
第6表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（5）	22
第7表	柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（6）	23
第8表	柏崎町遺跡第3次確認調査出土遺物観察表	30

挿 写 真 目 次

写真1	藤井城の主要部	45
写真2	内堀跡の水田	47
写真3	藤井城跡主要部航空写真	52
写真4	主要部と墓地	53

I 序 説

1 柏崎市内遺跡発掘調査等事業の意義

柏崎市内遺跡発掘調査等事業は、国・県からの補助金を得て、平成3年度から実施している。本年度まで9年次にわたって継続してきたが、その内容は主に開発行為等がおよぶ区域内の埋蔵文化財包蔵地について、その有無や性格、遺構・遺物等の密度や分布範囲等を事前に把握するため、試掘調査や確認調査を実施する事業である。そして、これらの調査で得られた情報を根拠にして、本発掘調査実施の可否や、調査範囲及び経費や期間等の積算等が行われ、開発業者との協議に際しての資料としても活用してきた。特に本発掘調査は、埋蔵文化財に対する様々な調査の中でも、最も期間及び費用がかかることから、調査期間の短縮化・効率化の検討や調査費用を策定する際の基礎的データとして、事前に情報が得られていることは極めて重要である。本事業はそのような役割の大半を担ってきたのであり、その有効性は今日までの実績が示していよう。

現在、規制緩和という大きな潮流に伴い、発掘調査に係る様々な基準の標準化が、文化庁や県教委を中心として推進されている。埋蔵文化財行政とそれに関する制度のあり方に対して、国民的な認識・評価が変化したことによるものと考えられるが、明確な法的あるいは準法的な根拠に基づく新たな枠組みを築くため、その具体的な方向づけを行うことが強く求められているのである。本県においても、本発掘調査の可否判断基準や、調査費用及び調査期間の基準等が、標準化に向けての主要な骨子として検討が重ねられており、明文化されつつある。埋蔵文化財の取り扱い判断や、調査費用および期間等の不統一性や不透明さには、従前より大きな疑義が投げかけられており、埋蔵文化財行政に対する不信感の主要な要因になっていると推測される。基準の標準化・明文化は、そのような不信感を払拭するためには、最低不可欠なものといえよう。

このような情勢に際して、本事業で実施している試掘調査や確認調査は、一層重要な意義をもってくることになると思われる。今後、様々な基準が標準化されたとしても、その基準に照合するための基礎的データの大半は、試掘・確認調査によって得た情報に基づくことになろう。どんなに体系化された法的・準法的な根拠が策定されたとしても、それを運用するための基礎的データが正確さを欠いたら、より大きな不信感を募らせるにつながるのではないか。本発掘調査に比べると成果に乏しく、住民へのアピールもほとんどできない地味な調査ではあるが、埋蔵文化財行政という観点からは、試掘・確認調査の重要性は、本発掘調査以上に高い。とかく安易に考えられがちな試掘・確認調査に対して、今後も開発事業者や住民の充分な理解や協力が得られるよう、文化財保護サイドは明確な説明の責任を全うするとともに、より正確かつ多くのデータを抽出する努力が求められることになるのである。

さらに、文化財保護サイドには、遺跡の調査における緊急的な対応をも迫られており、試掘・確認調査によって迅速かつ正確なデータを得ることが要求されることになる。このような要求に答えるためには、まず埋蔵文化財行政の体制強化が必須条件であるとともに、開発と保護の両サイドが、それぞれの知識や知恵を出し合えるような対等な協議の場や環境を整備することが、課せられた命題といえよう。

2 平成11年度事業の概要

平成11年度に実施した発掘調査（現場作業）は、本発掘調査2件と、本事業として実施した確認調査3遺跡4件である。また、この他に工事中における立会調査と大規模開発等に伴う現地踏査も行った。

本発掘調査は、昨年度に引き続いて県営中山間地域総合整備事業に係る圃場整備に伴って実施した1遺跡と、市街地再開発事業に伴い実施した1遺跡である。宮之下遺跡群の宮田遺跡は、圃場整備に伴って本発掘調査を実施したが、調査の対象面積が比較的広大であることから、当初は春先から積雪前まで通年の期間を予定していた。しかし、過去の耕地整理等の影響で、遺構密度が稀薄となっている部分が想定以上に多く、現場測量の委託化等による効率化を図ったことも幸いして、予定を大幅に短縮する期間で終了することができた。一方、柏崎町遺跡は宮田遺跡と並行して、春先からの着手を予定していたが、市街地再開発事業の進捗状況等の事情により、計画よりも遅れての調査開始となった。また、開発事業の再検討等により、本発掘調査面積が当初予定よりも大幅に増加する等、発掘調査の早期終了という観点からは、宮田遺跡とは対照的に悪条件が重なった。そのため、宮田遺跡の調査を行っていた調査員や作業員らが、その終了直後から柏崎町遺跡の発掘調査に加わったが、遺構面の重層が想定以上に多いこともあり、極めて厳しい状態での調査が続いた。最終的には、事業主から提示された期間的限界直前には調査を終了することができたが、それは当初予定よりも一ヶ月近く遅れての終了であった。

このような本発掘調査の実情は、試掘・確認調査にも影響を及ぼすこととなり、優先度等の見直しにより、当初予定していた4遺跡のうち3遺跡を次年度以降に先送りすることとなった。しかし、早急に対応する必要のある計画外の確認調査が、年度中において2遺跡発生したため、本発掘調査の厳しい状況の中、並行しての対応を余儀なくされた。したがって、結果的には本年度は3遺跡4件に対して確認調査を実施したこととなるが、そのうち1遺跡1件は開発の進捗状況等による事情から、2回にわたる調査となつたため、実質的には当初予定の件数に等しい内容となった。

本年度の事業概要は以上のとおりであるが、例年同様に大半が1~2日程度の極短期間での確認調査になったことが、憂慮される問題点として挙げられる。このことは、往々にして調査精度の低下を招く恐れがあり、調査データの絶対的不足へと直結しかねない。充分な体制整備等が、今後の重要な課題であろう。

調査遺跡の名称	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
確認調査												
柏崎町遺跡	■				■							
藤井城跡			■					■				
小谷遺跡								■				
本発掘調査												
宮之下遺跡群 宮田遺跡			■	■	■							
柏崎町遺跡				■	■	■	■	■	■			

第1図 平成11年度 柏崎市の発掘調査（現場作業）工程表

3 遺跡の位置と環境

平成11年度に柏崎市内遺跡第Ⅸ期発掘調査等の対象となった遺跡は、3遺跡（4件）である。いずれも平野部に所在しているが、地理的環境には若干の差異が認められるため、柏崎平野の概観後、地理的な環境等をある程度まとめておきたい。

柏崎平野概観 柏崎平野は、新潟県の日本海沿岸部のほぼ中央に位置する臨海沖積平野で、行政的な地域区分では中越に属している。中越地方は南部の魚沼郡域と、信濃川中流域から柏崎平野を含む北部と大きく分けられるが、柏崎平野は北部でも北西に相当する。新潟県には、信濃川や阿賀野川等の全国的にも有数の大河によって形成された新潟平野（越後平野もしくは蒲原平野）や、関川水系に属する高田平野（頸城平野）等、比較的大規模な平野がみられる。柏崎平野はこれら二大平野の間に挟まれ、山塊や丘陵等の分水嶺に囲まれた小規模な独立平野である。

柏崎平野は、鶴川と鰐石川を主要河川として形成されている。河川流路によって南あるいは北東へ広がり、流路に沿った自然堤防の発達が顕著である。また、平野を取り巻く山塊・丘陵は、西侧から派生する東頸城丘陵の一部に相当し、刈羽三山と総称される米山・黒姫山・八石山が連なっている。

北流する鶴川・鰐石川は、それぞれ独立した水系を有しているため、河川によって平野を取り巻く丘陵は地形的に西部・中央部・東部の三区分で考えることができるが、刈羽三山はその個々の頂点にあたる。

西部は米山を頂点とした険しい山塊によって高田平野と隔離されるが、その山塊は海岸部にまで張り出して断崖を形成している。そのため、低位・中位・高位段丘の発達が著しく認められる一方で、沖積地の形成が不顕著で、砂丘地が少ない。米山は火山ではないが、現在でもわずかに隆起し続けているといわれており、中央部や東部とは異なる地形的景観を有している。鶴川と鰐石川に挟まれた中央部には、黒姫山を頂点とした丘陵が、なだらかに裾野を北側へと伸ばしている。沖積地に近い丘陵の北辺では、広い中位段丘がみられるが、鶴川水系あるいは鰐石川水系による浸蝕が著しく、島状を呈する独立丘も形成されている。東部は、南西-北東方向へ伸びた八石山丘陵・曾地丘陵・西山丘陵が規則的に並び、向斜軸に沿って長鳥川・別山川といった鰐石川の支流が南西方向へ流れている。また、中央部から東部にみられる沖積地の北西辺は、日本海によって洗われているが、海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が横たわり、南西では米山山系の丘陵に、北東では西山丘陵に接している。平野部における大部分の沖積地は、現在では水田化されているが、本来は砂丘後背地として、極めて湿地性が強い低地となり、鶴川や鰐石川等の河川による自然堤防の形成が顕著である。

鶴川下流域 鶴川地区を源流として北流してきた鶴川は、野田地区を抜けた上条地区的山口近辺から中流域となる。下流域については、高田地区の下方地内を抜けた付近から河口までと捉えておきたい。この一帯は、かつては「鏡ヶ沖」と称せられた沼澤があったとされており、柏崎砂丘の後背地をなすとともに、半田から枇杷島に至る一帯は、砂丘形成に阻まれた鰐石川も古い時期には流入していた可能性のある低地帯が形成されている。

柏崎町遺跡は、現在の柏崎市街地が広がる柏崎砂丘上に営まれていた遺跡である。柏崎砂丘は、鶴川及び鰐石川の河口の間に形成された高さ10m程の低平な砂丘で、北東の荒浜砂丘とは鰐石川により分断され、砂丘構造も異にしている。柏崎町遺跡では、15世紀後半以降16世紀までの中世と、それに連続した17世紀以降の遺構面の重層が確認されているが、町の形成過程にあたっては、砂丘地形の制約や変遷の影響は大

きかったと思われる。柏崎砂丘は東部に数条の砂丘列が認められることから、新潟砂丘との類似性が推測されているが、その構造といった実態については未解明な部分が多く、究明が待たれている。

小峯遺跡は、砂丘の後背地をなす「鏡ヶ沖」の沿岸に立地する。周辺には河川の浸蝕によって島状に残された小規模な独立丘が点在し、これら段丘付近の微高地を中心に幾つかの遺跡が分布している。本遺跡は、平成10年度から国道8号線柏崎バイパスに伴う発掘調査が行われ、古代を主体とする遺跡であることが把握された。地域的な政治的有力者の存在を示唆する遺物も発見され、郡衙的施設が想定可能な箕輪遺跡に近接していることから、郡や郷等との関連も視野に入れた検討が待たれている。

鰐石川下流域 鰐石川は安田地区以北で蛇行が著しくなり、広い扇状地状の地形を形成する。それ以南とは大きく様相が変化し、本地区において長鳥川が合流することから、長鳥川合流点付近以北が鰐石川下流域として捉えられよう。このように、鰐石川は下流域で蛇行しながら北上するのであるが、西中通地区付近に至ると、砂丘を回避するように更に著しく蛇行し、暴れ川的な様相を呈するまでになる。この付近において、それまで北流していた鰐石川は一旦流路を西にとり、松波地内で更に南下した後、再び反転して北上し、日本海へと流れ出るのである。現在の鰐石川には、このような蛇行部分を改修した地点が多いが、地形を概観すると、旧河道に沿うようにして、各所に斐筋もの自然堤防を形成させていることが看取される。

本年度に柏崎市内遺跡発掘調査等事業として確認調査を実施した藤井城跡は、鰐石川左岸に形成された自然堤防上に立地し、当該地には城ノ山という小字名も残っている。元和年間に稻垣摂津守重種が築城したとされており、未完成の平城で、繩張りだけに終わったと考えられている。



第2図 第Ⅸ期発掘調査対象遺跡位置図

II 柏崎町遺跡

—第2次試掘確認調査—

1 調査に至る経緯

「九日。入柏崎。々々市場之面三千余家。其外深巷凡五六千戸。」

『梅花無尽藏』に記された長享2年(1488)10月現在における柏崎の町並である〔柏崎市史編さん委1987(Na114文書)〕。当時の柏崎町を正確に伝えたと言うより、かなりの誇張を考慮せざるを得ないが、町並が旅人に与えた印象が強く表れたものと考えられる。そして、後に謙信と名を変える上杉輝虎が出したとされる永禄7年(1564)の制札(写)には、確かに「柏崎町」の字句が見える〔柏崎市史編さん委1987(Na257文書)〕。事例は少ないが、中世後期——特に戦国期の旧柏崎市街地は、かなり多くの家が立ち並び、それ相応の人口を有する町に発展していたことが、これら記録類からはうかがわれるのである。

ところが、中世において大きく発展し、町を形成していたとされる柏崎の町跡は、考古学的な遺跡としてこれまで認識されることなく、また実際に旧市街地から中世の遺物・遺構が発見されたという報告例もなかった。このような状況の中、市街地の中心に位置する東本町一丁目地内において、延べおよそ4万m²にもおよぶ東本町まちづくり事業がスタート、平成8年度から本格的に着工されることとなった。中世の柏崎町を探索する考古学的な調査は、この再開発事業が端緒となったのである。

東本町まちづくり事業は、東本町を東西に貫く本町通り沿いの延長約400mを事業区域とし、西側からA・B・Cの3ブロックに区分されている。最も東側に位置するCブロックについては、平成9年度に部分的な試掘調査を実施している〔柏崎市教委1998〕。この時の調査では、戦国期の中世土器飾片数枚が地表において検出されたが、中世の遺構や遺物包含層の発見には至らなかった。柏崎の市街地は、もともと鶴川河口付近における津泊を中心に発展してきたとされ、近世における町並の展開も西本町から順次東側へ拡大したとされていた。このため、Cブロック付近は、中世集落域の周辺等と理解せざるを得ず、中世の町跡はさらに西側の地に求ることとなった。

平成10年10月22日、東本町まちづくり事業のうち、最も西側に位置するAブロックの着工が決定したことに伴い、事業主体となる柏崎東本町A地区市街地再開発組合と施行業者、および行政側の窓口である柏崎市建設部中央まちづくり事業推進室、そして文化財保護担当として市教委文化振興課の各担当が出席し、試掘調査等実施の協議が初めて行われた。Aブロックの事業は、A1・A2・A3の3工区に分けて実施され、各ブロックそれぞれが、既存建物の解体、整地、そして基礎工事から建物の建設へと順次工事が進められる。試掘調査の時期については、建物の解体・整地後となるが、各工区内において一定のスペースが確保され次第、試掘調査を実施することになった。具体的な時期については、A2・3ブロックは早ければ今冬、またA1ブロックは新年度早々となるとの見通しが明らかにされた。

Aブロック地内は、当該事業用地では最も西側に位置することから、中世の町並が発見される可能性が最も高い。しかし、これまで中世遺物の発見がなされたことがなく、中世の町並が鶴川河口から1km離れた東本町地内までの広がりを持つことには、若干の疑義もある。期待と不安の中、第2次試掘調査初日が平成11年1月12日に決定した。

2 遺跡の立地と調査

1) 遺跡の立地

現在の柏崎市街地は、柏崎砂丘上に位置している。柏崎砂丘は、鶴石川および鶴川の河口の間において、海岸に沿って形成された、標高10mほどの低平な砂丘である。柏崎町遺跡を含めた「柏崎町」は、この砂丘の内陸側緩斜面に位置しており、今回の調査でも、北東側から南西側への傾斜が観察された。

柏崎砂丘は、北東側に位置する荒浜砂丘とは鶴石川によって分断され、砂丘構造も異にしている。この砂丘上には、周知化されている遺跡を散見できるが、それらの内容については不明な状態である。中世の「柏崎町」はもちろん、現市街地の形成過程にあたっては、砂丘地形による制約や変更といった影響が大きかったと思われる。柏崎砂丘の構造といった実態については未解明な部分が多く、地学分野からの研究成果が待たれる。ただし、東部に数条の砂丘列があることから、新潟砂丘との類似性が推測されている。

2) 調査の方法

調査の実施にあたっては、0.4m²のバック・ホウを使用し、原則として任意のトレーナーを発掘することで進めていった。調査は、当該事業の第1段階である既存建物の解体工事が終了した部分から順次着手していったが、現道部分などの調査は不可能であり、地下室を有した建物跡地については、遺跡の遺存度はかなり低いと考えられたので、これらは実際の調査対象から除外することとした。ただし、期間中の協議により、工事内容を新たに知らされたこともある、トレーナーの配置を固定的なものにした場合もあるが、具体的には、次項で述べることとする。

なお、調査地点には町割りをもとにした便宜的な区画を設定し、第1次調査に引き続いてB・C・D…とアルファベット大文字にて地点名を表記し、トレーナー番号にも冠して「B-1トレーナー」と呼称することとした。

3) 調査の経過

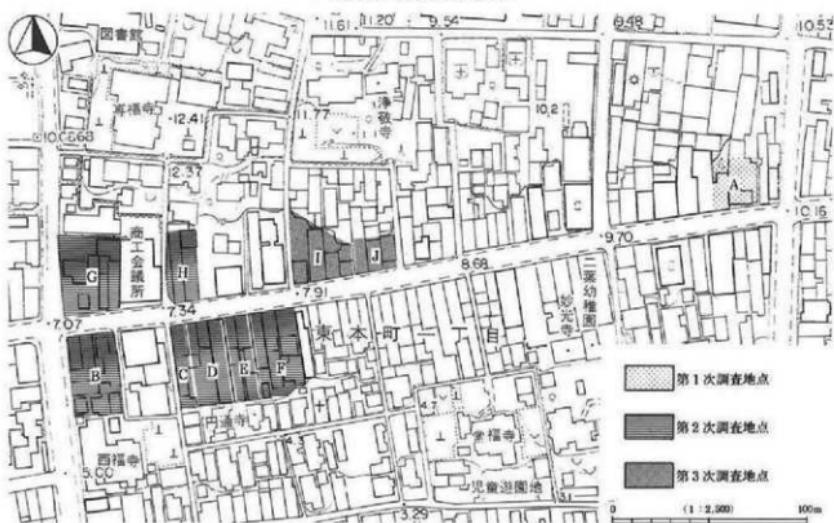
現場作業は、平成11年1月から、年度を跨いだ同年4月まで実施した。調査にあたっては、工事中の立会調査（延1日間、調査員4人）を加えると延6日間、調査員は延29人を費やした。また、調査対象となる事業地の面積は、A 1～3 ブロック合計で約1万m²である。全25本に及ぶ調査トレーナーの調査実面積は合計約170m²であり、事業地の約0.02%となる。

1月12日（B・C地点） 降雪の中ではあったが、試掘調査の初日を迎えた。既存建物の除去が終了して着手可能となったA 2ブロックおよびA 3ブロックの一部について、合計4カ所のトレーナーを発掘した。B地点では出土する近世陶磁器の量が比較的多かったものの、深度約1.5m以下で湧水が激しくなり、調査を断念せざるを得なくなつたので、主目的とした中世の痕跡については不明となった。しかし、午後から着手したC地点では、約1.5mの深度から中世の遺物が出土した。ここで初めて当該地点で「中世柏崎町」の痕跡をうかがうことができたので、「柏崎町遺跡」が周知化されることとなった。しかし、中世の遺物包含層はなおも地下に続いているが、やはり湧水のために発掘を断念せざるを得なかつた。

2月5日（D・F地点） 天候は曇りであったが、事業地内には薄く積雪がみられた。本日は、既存建物の解体工事が終了したA 3ブロックに取り掛かり、D・F地点に着手した。午前にD-1トレーナーを発



第3図 柏崎町遺跡位置図



第4図 柏崎町遺跡試掘・確認調査地点

掘した。D地点はC地点に隣接するため、トレーニングの層序も近似するものと予想していたが、結果的にはやや異なっており、個々の町屋による相違が想定された。午後は当該事業地の東端付近にF-1トレーニングを発掘した。近世の所産と思われる炉跡からは、比較的大きな鋳造鉄片が出土した。さらに、その下層である深度約0.7m付近からは、中国染付など中世の遺物が検出された。

2月9日（D～F地点） 8日夕方、事業者との協議により、9日にA2ブロック（B地点ほか）、10日にA3ブロック（C～F地点）を対象に土壤改良工事を実施し、深度0.6mまでを搅拌することが伝えられた。また、造成する建物の基礎として梁の部分が幅1m、深度1mほど掘削されるという。さらに、B地点の南部に25m×8mの範囲で地下室を造成し、深度約6.5mを掘削する計画もあるとのことであった。この地下室部分の調査については、関連工事との兼合い等から3月下旬に実施することとし、ひとまず梁部分を含む土壤改良範囲について調査することとした。

B地点の調査結果により、A2ブロックの工事によって、中世の文化層が影響を受けることはないと考えられた。また、5日に調査したD-1・F-1トレーニング付近は、比較的浅い深度から中世の文化層が確認されたので、土壤改良工事の範囲からは除外したことである。しかし、10日の工事範囲内は未発掘であり、地下の状況は依然として不明なままであったため、急きょ翌9日にD～F地点の梁部分にトレーニングを設定することで調査することとした。

当日は、天候に恵まれたこともあって、作業は比較的順調に進んだ。事業地は、砂丘の南側斜面に位置しているため、D-1・F-1トレーニングよりも南側を対象としたトレーニングでは、1mの深度で中世の層を検出することはできず、特にE・F地点では既存建物に伴う搅乱が目立った。しかし、F-2トレーニングでは、出土した近世陶磁器について、おおむね層位的に検出することができた。

3月30日（B地点） 8日の協議で連絡されたB地点の地下室部分について着手した。1月12日の調査で、激しい湧水のために中世の文化層を確認できなかったB-1トレーニングの周辺に位置している。事業地内には、杭打ち機やクレーンなどをはじめとする大型重機が稼動しており、その足場を保つためもあって、あまり広範囲のトレーニング掘削は不可能な状態であった。B-3～5トレーニングを発掘したが、B-4・5トレーニングでは搅乱が目立った上に、やはり著しい湧水に見舞われた。しかし、B-3トレーニングでは近世陶磁器を層位的に検出させることができた。

4月8日（G・H地点） 本日は、「上町」と称されているA1ブロックにおいて、解体工事が終了し、一定のスペースを確保できた部分ができたため、G地点に6本、H地点に1本のトレーニングを発掘した。G地点では、本町通り沿いにあたる南側に4本のトレーニングを設定したが、現表土からの搅乱が著しかったことでもあって土層が判然としない部分が多くあった。しかし、深度約0.6m付近で中世の遺物が出土した土坑を検出することができた。また、これまでの「下町」よりも砂丘中腹の上位に位置しているため、本町通りから北へ約25～30mの地点で、砂丘の掘削・削平の痕跡を確認することができた。これにより遺跡（町屋）の範囲をおよそ把握できるようになった。

4月30日（B地点） 3月30日はB地点の地下室部分を対象とした調査を実施したものの、湧水のために第一の目的とした中世の文化層の詳細が不明なまま中断となった。この問題を克服するために、中世の文化層に影響を与えない深度（約1m）をあらかじめ掘削・土取してもらい、その段階で工事中の立会調査をすることとした。しかし、それでも1mほど深度を下げると、やはり激しい湧水に見舞われ、トレーニングの壁が崩落するに至った。また、既存建物の基礎やその解体に伴う搅乱も顕著であるため、3月30日の調査結果とも合わせると、地下室部分の大半における遺跡の遺存度が低いことが予想されたのであった。

3 調査の概要

1) トレンチの概要

今回の調査におけるトレンチの配置等は、前節で述べたとおり工事内容に規制された点が多く、結果として各地点別に順序立てて進めることができなかった。調査のおおまかな経過については、前述のとおりであるが、ここでは地点別にトレンチの概要を説明したい。

B 地点 当該事業では A 2 ブロックの西半部に該当し、下町側の事業地では最も西側に位置する。A 2 ブロックの東半部については、既存の大型建物に伴う基礎などがあり、遺跡の遺存度の低さが予想されたので、A 2 ブロックについては、B 地点のみが実際の調査対象範囲となった。B 地点は、南側に造成される地下室のため、3 回にわたる調査を実施し、結果的に重複した部分もあるが、合計 9 本のトレンチを発掘した。

B 地点の北半部には、B-2 トレンチを発掘した。瓦礫を含む表土の第 0 層下には、層厚 60~70cm の焼土層が確認されたが、これを除くと、暗黒褐色粘質砂層（第 IV a 層）が検出された。第 IV a 層は、3 層に細分できたものの、層厚が 1m 以上となり、掘削の限界となった深度約 2m（標高約 4.1m）になってもこの層がまだ維続していた。出土した近世陶磁器の年代から、第 IV a 層の所属時期は、17世紀頃と思われる。また、第 IV a 層の上層部分から S X-1 炉跡が検出された。

南半部には、地下室部分も含まれている。南西部には B-1・3・5~8 の 6 トレンチ、南東側には B-4・9 の 2 トレンチを発掘した。B-1 トレンチでは、第 0 層を除くと、黄褐色粘土を主体とする第 I b 層が検出された。おそらく近~現代に属すると思われるが、当該事業によってではなく、それ以前の搅乱と考えられる。その下層からは、（暗）黒褐色粘質砂層（第 IV a 層）が検出された。出土遺物により、17世紀後半（～18世紀前半）の年代が想定される。一部重機によって深掘りしたところ、黒色粘質砂層（第 V b 層）がみられた。B-3 も第 IV a 層まではおおむね B-1 トレンチと同様の状況である。ただし、第 IV a 層と第 V b 層との間には第 IV a 層よりも暗色の粘質砂層（第 IV c 層）がみられた。深度 2m 以下の調査に重点をおいた B-5~8 トレンチでは、第 IV a 層と第 IV c 層の間に黒灰褐色粘質砂層（第 IV b 層）がさらに挟まれていた。遺物は各層毎に取り上げたが、B-6 トレンチでは比較的まとまった量の近世陶磁器を得ることができたので、各層の時期を把握できるようになった。すなわち、第 IV a 層の上層は17世紀後半～18世紀前半、第 IV a 層の下層は17世紀中葉～後葉と考えられる。第 IV b 層を除くと、B-1 トレンチでもみられた第 V b 層が検出された。B-1 トレンチでは不明瞭であったが、B-6 トレンチで出土した中世土師器片により、第 V b 層は15世紀に属すと考えられる。ほとんどのトレンチでは、第 V b 層を発掘している段階で湧水が激しくなったほか、かなりの深度等に至ったことによってトレンチ調査の限界となってしまった。ただし、B-7 トレンチでは下層から黄褐色砂層（第 VII 層）を確認することができた。しかし、第 VII 層がみられたのはトレンチの西半部のみであり、東半部では同じ標高でも依然として第 V b 層が広がっていた。これは、全体的に北東から南西に傾斜している当該地の地形には反するものである。第 V b 層は水分を多く含んでいるため、これを覆土とする溝跡なども想定された。

なお、南東部に対して B-4・9 トレンチを発掘し、掘削が可能な深度まで調査した。しかし、いずれも建物や道路の造成などによって地下は搅拌されていることがわかった。したがって、南東部については、遺跡の遺存度は非常に低いと考えられた。

C 地点 A 3 ブロックの西辺に位置する。現況では宅地 1 区画となっている幅約 8 m の区画を C 地点として設定し、南北に 2 カ所にトレンチを発掘した。

本町通りから約 3 m ほど南側に設定した C-1 トレンチでは、表土を除去すると黒褐色粘質砂層が検出された。この層は約 1.5 m ほどの層厚であり、色調によっておおよそ上・下の 2 層に区分し、上層はさらにそれを上・下層に細分した。また、下層の上位には褐色を呈する層（中層）がみられた。上層から出土した陶磁器は、おむね 17 世紀前葉～後葉に属するものであり、下層からは中世土器や唐津焼が出土している。さらにその下層を掘り下げた、深度約 1.7 m 付近では、粘性および縮まりのない、水分を多量に含んだ黒色砂層となった。この層からは、完形の中世土器小皿や珠洲焼片が出土し、確実に中世の遺物包含層を確認することができた。しかし、すでにトレンチの深度は 2 m 以上となり、調査が可能だったのはこの層までとなった。

C-2 トレンチは、C-1 トレンチの南側約 10 m の地点に設定した。表土層下には、B-1 トレンチでもみられたような、暗黄褐色粘土層（第 I b 層）が確認された。おそらく、これも過去の搅乱による層と思われる。第 I b 層を除去すると、やはり黒褐色粘質砂層が検出された。中位ほどでやや褐色化している層を中層とすると、上・中・下層と細分することが可能で、C-1 トレンチに対応させることができた。さらに掘り下げると、縮まりのない黒色砂がみられ、中世土器器片や珠洲焼片が出土した。黒色砂層を約 40 cm ほど掘り下げると、褐色を呈する砂層が検出された。

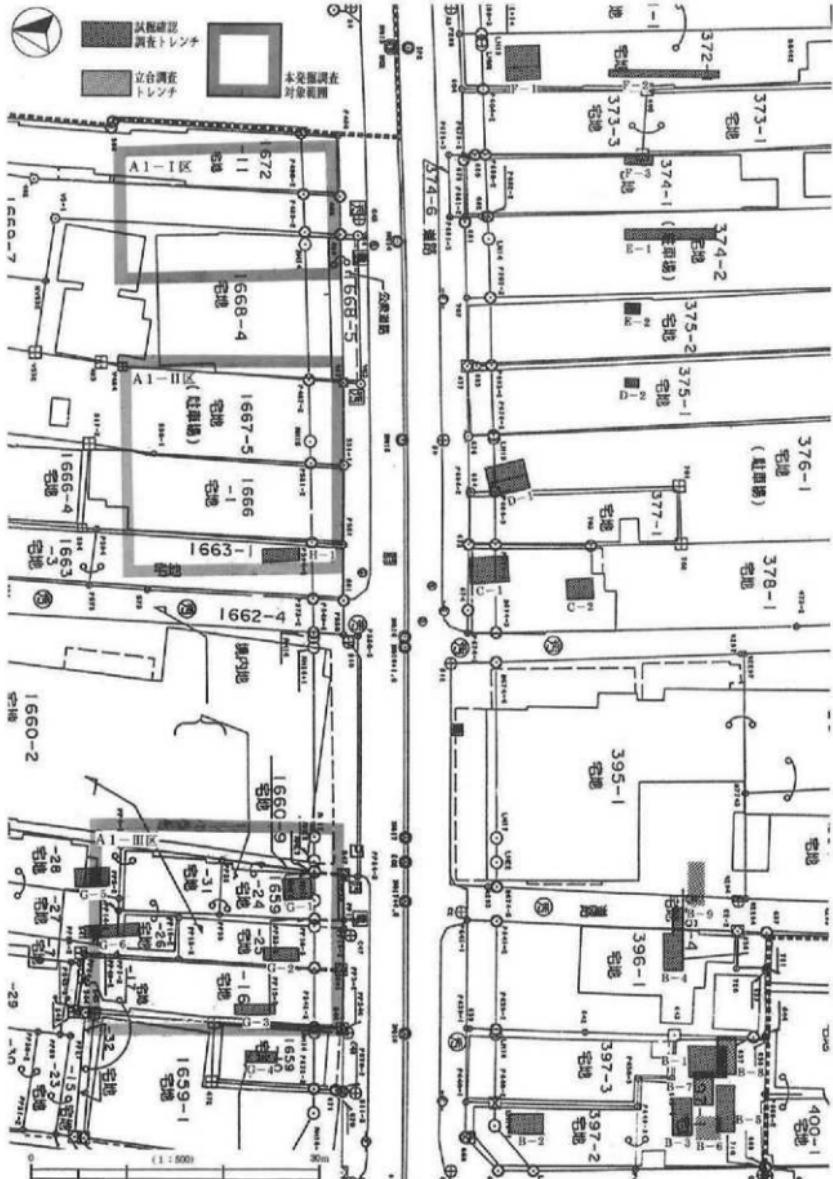
C 地点では、深度約 1.5 ～ 2.0 m において中世の遺物包含層を確認できた。中～近世に該当する層序を B 地点と比較すると、黒褐色粘質砂層の上層は第 IV a 層、中層は第 IV b 層、下層は第 IV c 層に対比でき、第 IV 層の時期は 16 世紀末～18 世紀前半頃の年代が考えられよう。そして、中世の遺物包含層と思われる黒色砂層は第 V b 層とみなすことができる。B 地点で土層観察した地点とは 40 ～ 50 m ほどの距離を隔てているため、この対比が妥当なものは即断できない。しかし、B 地点と C 地点の標高 4 m 付近でみられた黒色砂層の性質が非常に近似しているという点は、当該地における中世の層序を確認する上で、念頭に置くべき事項と思われる。

D 地点 C 地点の東側、幅約 18 m の範囲とし、2 本のトレンチを発掘した。当該事業着手前までは宅地もしくは駐車場となっていた部分である。

D-1 トレンチは、本町通りから南へ約 5 m の位置に設定したが、C-1 トレンチとは約 7 m ほどの距離である。表土層は焼土が主体となっていた。焼土層を掘り下げると、褐色粘土層（第 I a 層）がみられた。近世陶磁器が出土したものの、17 世紀や 18 世紀などと時期的に混在する内容であったので、搅乱層と思われる。深度 0.2 m になると、やや粘性の弱い褐色砂層（第 II 層）が検出された。層厚は 20 cm ほどであるが、B・C 地点では未確認の層である。その下層には暗褐色粘質砂層がみられたが、以下の層序はおむね B・C 地点の第 IV 層に近い状況であった。この層が第 IV 層に対比することが可能であれば、上位に位置する褐色砂層は 18 世紀後半以降の所産と考えられる。また、第 IV a 層において新旧関係のある 2 基の炉跡が検出された。そして、深度 1 m 付近から、中世の遺物を包含する第 V b 層が検出された。

D-2 トレンチは、当該事業で造成する建物の梁部となる位置である。本町通りから約 15 m ほどに位置し、D-1 トレンチからは南東方向にある。近～現代の所産と目される炉跡や列状に配置された巨礫群などが検出されたが、搅乱も著しく、延長 1 m ほどでトレンチ発掘を中断することとした。

D 地点は C 地点に近接するため、層序が類似する部分もあるが、対比のできない土層もある。この層序の違いが、境界を隔てた町屋の違いなどを示していると考えられる。



第5図 柏崎町遺跡第2次試掘・確認調査トレンチ配置図

E 地点 D地点の東側、幅約15mの範囲をE地点とした。当該事業着手前は3区画分の宅地となっていた。2本のトレンチを発掘したが、いずれもD-2トレンチのように造成建物の梁として施工される部分を調査したものであるため、トレンチの幅は1mである。本町通りより約20m南側の位置から発掘し、北側から南側へと拡張していくが、延長については遺跡の遺存状況などをもとに判断した。

E-1トレンチは、施工範囲である延長約10mを掘削した。やはり表土層（第0層）は瓦礫が多く混入する搅乱層である。表土層以下の層序は、地形に沿った北から南への傾斜があり、全体的に6~10%ほど斜位の堆積状況が観察された。現地表が水平になるように意図していたと思われ、表土の搅乱層は標高の高い北側を分断するように堆積していた。表土層以下は、茶褐色もしくは灰褐色（粘質）砂層であり、D地点の第Ia層に類似していた。さらに（明）褐色砂層が以下に続くが、この層についてもD地点の第II層に対比される可能性が高い。トレンチの北側では、第II層の下に灰褐色粘質砂層（第III層）がみられた。第III層は、D地点以西ではみられなかつた層である。色調によって細分が可能であったが、ひとまず一括することとした。さらに第III層の下には黒色粘質砂層（第Va層）がみられた。第III層と同様にD地点以西では未確認の層である。トレンチの北側では第Va層、南側では第III層を発掘中に、工事掘削深度に達したため、調査はここまでとした。E-1トレンチでは、出土遺物がさほど多くはなく、各層の形成時期についての判断材料が乏しい。ただし、トレンチ南側において、第II層と第III層の間に焼土層が確認されたが、焼土層出土の陶磁器（図版25b）が17世紀末~18世紀前葉を下限としていることから、おおむね第II層は18世紀以降、第III層は18世紀前半以前と考えることができよう。

引き続き、西側に約7m離れた梁部分にE-2トレンチを発掘したが、搅乱が著しいため、調査を中止することとした。

F 地点 A3ブロックの東端、幅約24mの範囲をF地点とした。本町通り沿いにF-1トレンチ、梁部分にF-2・3トレンチを設定し、合計3カ所において調査した。

F-1トレンチは、本町通りから南へ約7m、A3ブロックの東端から約8mに位置する。表土を除去すると、粘性があまりない褐色砂層が検出された。おそらく、D・E地点の第II層に対比が可能であろう。F-1トレンチでは、第II層は3層に細分されたが、それぞれが整地に関わって形成されたものと考えられる。また、第II層の下位には第IVa層に類似する暗（黒）褐色砂層がみられた。第IVa層は、一部に堆積している黄褐色砂層によって細分されており、土層堆積上の画期をなすと考えられるが、現段階ではこれ以上の追求ができなかつたので、ひとまず一括することとした。この第II層および第IVa層としてまとめられた各層からは、合計5基の炉跡が検出された。特に第IVa層から確認されたS X-4（第4号炉）は、覆土下層から鍛造剝片が出土しており、鍛冶炉跡であることがわかった。鍛造剝片は最大で約1cmを計り、比較的大きい。炉跡はできるだけ保存させることとし、第IVa層より下の状況については、発掘地点をやや西にずらして調査することとした。第IVa層の下には大きな落ち込みもみられたが、大半は黒灰色粘質砂層によって占められていた。黒灰色粘質砂層に対比可能な層は、E-1トレンチでも検出されているが、色調は第Vb層に近いものの、縮まりがややあり、砂粒も比較的緻密であった。また、出土遺物は15世紀後半~16世紀前半に比定できる中国染付や青磁などであり、第Vb層とも異なる状況である。そこで、ひとまず第Vb層とし、第Vb層よりも時期的に新しい段階の所産として位置づけることとした。第Vb層は60~70cmの層厚を有していたが、その下位には褐色を呈する粘質砂層がみられた。C地点でも類似する色調の層があったが、その関係や所属時期は不明である。この段階でトレンチ深度も1.5m以上となったため、安全を考慮して調査を中断した。

F-2トレンチもE-1トレンチと同様に第0層下の層序は、北から南へ10~13%ほどの傾斜がみられた。トレンチの幅が1mほどであったため、遺構の検出は困難であったが、近世陶磁器を中心とした遺物をおおむね層位的に検出させることができた。また、9mほど西側にF-3トレンチを設定したが、搅乱が著しかったため、延長3mほどで調査を中断することとした。

G 地点 G地点は、上町側であるA1ブロックの西端にあたり、本町通りを挟んだB地点の北側に位置する。幅は約30mほどで、本町通りに面しては5区画の宅地があり、以前には建物があった。本町通りから5~10m付近に4カ所、25m付近に2カ所の計6カ所にトレンチを設定した。発掘着手前にも、表面採集によって多くの遺物を得ることができた。しかし、これまでの下町と異なるのは、中世土師器片もこの段階で検出されたことである。現表土は、当該事業に先立つ解体工事による搅乱層と考えられるのであり、搅乱を受けた中世の遺物包含層が比較的浅い深度に存在する可能性が生じたのである。

G-1トレンチは、G地点でも東端に近い位置にある。当該事業前に、G地点の東側には地下室を伴う大型の建物が存在した。そのため、当初の発掘位置はこの建物の造成に関わると思われる搅乱がトレンチの東半を占めていた。そこで発掘位置をやや西側にずらした。表土は、全体的に深度60cmほどまで搅乱層に覆われていた。搅乱層を除去すると、黒灰色粘質砂層となったが、SK-1~3とした3基の遺構が確認された。SK-1および3はあまり明瞭ではなかったが、一部トレンチ西壁に重複するSK-2の覆土から、珠洲の擂鉢片や中世土師器片が出土した。SK-2は中世の遺構である可能性が生じ、同時期の遺物包含層は部分的に搅乱を受けていると考えられた。搅乱を免れた遺物包含層の最高点は、標高約5.76mである。

次に、このレベルにおいて中世に属すと思われる遺構・遺物包含層の広がりを確認するため、G-2~4トレンチを発掘した。いずれも表土の搅乱層を除去した段階で遺構を確認した。G-4トレンチは深度1m以上にも及んだ。しかし、明確に中世の遺構・遺物を検出することはできなかった。

最後に、これらよりも北側に、G-5・6トレンチを発掘した。G-5トレンチは、搅乱やゴミ溜め用と思われる大きな掘り込みがあって、中世の痕跡を得ることはできなかった。しかし、地山砂と思われる褐色砂層(第V層)が標高6.2~6.3mで検出され、当該地点における旧地形の傾斜が確認された。さらに、G-6トレンチでは第V層の急な斜面が観察された。斜面の内側(南側)には、幾分か南側へ傾斜した暗褐色粘質砂層がみられ、中~近世の土器片を少量含んでいた。おそらく、中~近世における削平・整地が行われたのは、この斜面より南側と考えられる。すなわち、当該地点における町屋については、本町通りから約25mの範囲と想定できるのである。

以上により、上町側であるG地点においても中世の痕跡を確認することができた。

H 地点 H地点は、G地点よりも約30m西側に位置し、C地点の向かい側にある。幅約5mほどで、前述した既存大型建物の東側に隣接する。確認調査着手前に現地踏査を行ったが、多くの近世陶磁器が表面採集できた。トレンチの設定が可能となったのはわずかな範囲であったため、H-1トレンチの1カ所のみを発掘するにとどめた。

H-1トレンチは、本町通りから約5m北側に位置する。搅乱層の厚さ約70cmに及んだが、その下位には、黒褐色砂層・暗褐色砂層と続いた。色調に若干の差異があるが、出土遺物などから判断すれば、それぞれ下町の第II層・第IVa層に対応すると思われる。また、標高約4.9m付近から黒褐色粘質砂層がみられるようになった。この層は比較的厚く、中世土師器片も出土することから、おそらく下町の第Vb層に比定できよう。G地点と同様に中世の痕跡を確認することができた。

2) 基本層序

各トレンチからそれぞれの層序データを得ることができたが、その内容は整地層などによって町屋毎に異なったものであり、事業地内全体の土層堆積パターンを見出すことはできなかった。ここでは、まず調査対象区域を下町（B～F地点）と上町（G・H地点）に分け、おおまかにではあるが各層序を把握し、出土遺物を手掛りとしてその所属時期等を考えることとする。

下町（B～F地点） 各層序を第0～Ⅶ層に大分類し、それらをまた10層に区分した。ただし、各地点で散見された焼土層はこの分類からは除外したが、何らかの参考とした。

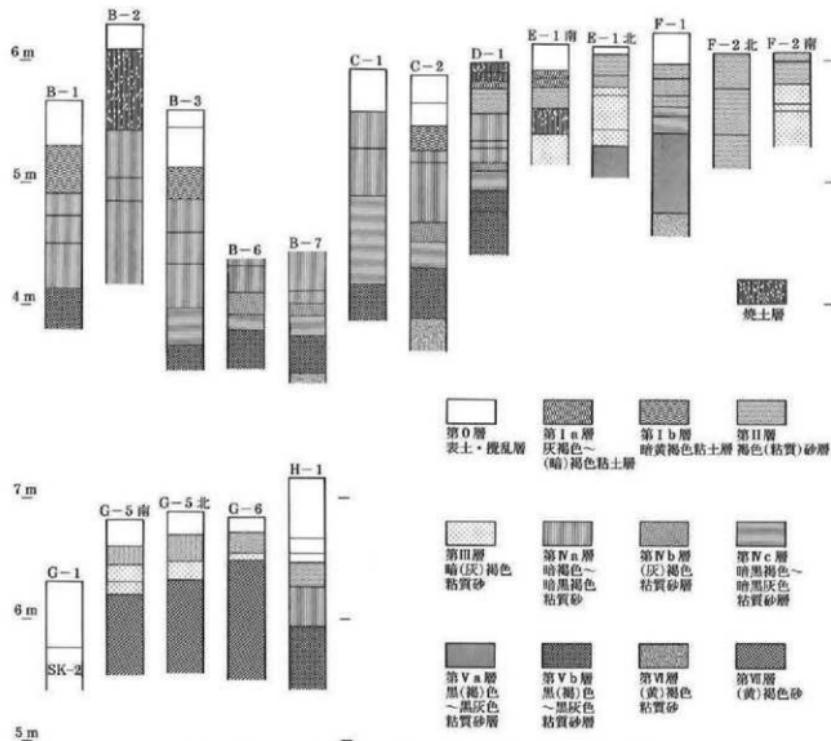
第0層は、調査段階で表土となっている層で、下層が露出していたF-2トレンチ付近以外では全域で確認された。既存建物の解体作業に伴い、コンクリート片や現代産の瓦片などが多く混入していた。第I層は、灰褐色～（暗）褐色粘土層（第I a層）と暗黄褐色粘土層（第I b層）を一括したものである。第I a層はD～F地点、第I b層はB・C地点でみられた。ともに黒色粘土などの混入物が多く、搅乱の可能性もある。ただし、第0層のように解体作業に伴うとはみなし難く、時期不明ながら陶磁器もやや出土している。

第II層は、D～F地点で確認される層で、出土遺物は17世紀後半～18世紀前半に属する陶磁器が多くみられた。おおむね褐色を呈する砂層であるが、E地点付近では茶褐色に近い。全体的に粘性や締まりはあるまい。第III層もB・C地点では検出されず、E・F地点で確認できた層である。明（灰）褐色を呈し、粘性・締まりがある。近世陶磁器の小片はあるものの、年代の明らかな遺物が出土しなかったため、この層の所属時期は判然としない。ただし、E-1トレンチの南側において、第II層と第III層の間に焼土層が挟まれていたが、この焼土層から出土した近世陶磁器の生産時期は17世紀末葉～18世紀前葉が中心であったことから、第III層の時期は、おおむね17世紀の範囲内で考えることができる。

第IV層は、粘性・締まりのある暗褐色粘質砂層である。ただし、やや明色の層が間層としてあるため、上位より第IV a層（暗褐色～暗黒褐色）、第IV b層（褐色～灰褐色）、第IV c層（暗黒褐色～暗黒灰色）に細分した。B-5・6トレンチにおいて、出土した遺物の年代観と対比すると、第IV a層の上層が18世紀前半を含む可能性のある17世紀後半、下層が17世紀前半～後半、第IV b層は17世紀初頭～前半となる。第IV c層は、C-1トレンチの出土遺物から16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

第V層は、黒（褐）色もしくは黒灰色を呈する、締まりのない粘質砂層である。B～D地点のほか、やや距離を隔てたF-1トレンチで確認できる。中間にあるE地点のトレンチは、あまり深く掘り下げなかつたため、両者の関係はあまり明瞭ではないが、F地点は第V a層、B～D地点は第V b層と細分した。土層の違いとしては第V a層の方がやや締まりがあること、第V b層は湧水が著しかったことなどが観察できた程度であるが、出土遺物において、第V a層は15世紀後半（～16世紀前半）、第V b層は15世紀後半が中心と考えられる。第V層の下層は、褐色を呈する粘質砂層となり、第VI層とした。出土遺物は得られなかつたが、依然として中世の遺物包含層が続いていると思われる。ただし、B-7トレンチでは黄（褐）色砂層が確認されたので、これを第VII層とした。前項でも述べたように、第VII層はトレンチの東半でみられ、西半には第V b層が広がっていた。水量が豊富である点などから、およそ南北に流れ、第V b層を覆土とする流路などを想定したが、推測の域を出ない。

上町（G・H地点） 上町の層序は、下町とは深度・堆積状況などの点で異なっており、下町での土層区分をそのまま適用することは困難と思われるが、概要を把握するために試みることとした。



第6図 柏崎町道路第2次試掘確認調査基本層序柱状模式図 (1 : 40)

表土はやはり全体が擾乱を主体とする第0層となっており、上町と同様にコンクリート片などが多くみられた。ただし、下町と相違する点として、第0層に近世陶磁器のほか中世の遺物も散見できることが指摘され、擾乱が中世の遺物包含層にも至っていることが予想された。また、H地点では深度約70cmにまでこの層が続いていた。

第0層の下層には、褐色を呈する第II層がみられた。また、その下層にはG地点では第IVa層、さらにH地点では第IVb層が検出された。上町から得られる遺物はいずれも小片であるため、遺物の年代観から下町との土層の対比を確実にすることはできなかった。しかし、色調や土質からみた堆積パターンはさほど矛盾しないと考えられる。

中世の遺物包含層とした第V層は、本町通りに近いH-1トレンチの標高約6m付近で黒褐色粘質砂層として確認された。16世紀とした第Va層に近いが、遺物は細片であり、検討を要する。また、G地点の北半部では標高6.2~6.5m付近で黄褐色砂層が検出された。これは地山の砂層と考えられ、この層の掘削程度により、中~近世の町屋の範囲を推定することが可能と考えられた。

3) 検出遺構

今回の調査では、調査面積が少ないながらも、炉跡や性格不明の土坑といった遺構が検出された。しかし、すべての平面観察から遺構を確認できたわけではなく、トレンチ壁における断面観察によって確認された遺構も多い。また、時間的な制約などもあったため、それらの遺構も写真撮影のみで止め、実測することはできなかった。主要な遺構については第2表にまとめたので参照されたい。ただし、検出された遺構の時期は、大半が近世に集中している。これは、ほとんどのトレンチで、中世層付近の深度がかなり深くなったり、湧水が激しくなったために調査を断念したためである。

今回の調査で特に多く検出された遺構は、炉跡である。炉跡はおおむね隅丸方形を呈しており、壁・床を白色もしくは黄色の粘土によって作られている。そして、覆土には焼土が多く含まれている。特に、F-1トレンチでは層厚約50cmにわたる数枚の整地層から、合計5基の炉跡が検出された。トレンチ壁やほかの遺構と重複するなどして全体の形態を把握できるものは少なかった。しかし、それらのうちSX-2・4については、出土した遺物からそれぞれ18世紀前半、17世紀後半に属すると考えられる。特に、SX-2は出土した鍛造剝片により、鍛冶炉跡と考えることができる。

この他、土坑やピットが検出されている。出土遺物を必ずしも確に取り上げられなかつたこともあって、所属時期や性格などについては不明なものが多い。しかし、トレンチ周辺からもピットなどが検出される可能性があり、その場合は何らかの建物跡が存在したことが想定されよう。

トレンチ	層位	遺構名	種別	平面形	覆土	時期	遺物	備考
B-2	Wn	SX-1	炉跡	隅丸方形	燒土(壁・床:白色粘土)			
B-5	Ia	SK-1	落ち込み				近世陶器	
B-6	Wn	SK-1	土坑				近世陶器	
C-2	Wn	SK-1	土坑					
D-1	Wn	SX-1 (1号炉)	炉跡	隅丸方形	黒褐色粘質砂 (壁・床:黄色粘土)			SX-2より新
D-1	Wn	SX-2 (2号炉)	炉跡	隅丸方形	黒褐色粘質砂 (壁・床:黄色粘土)			SX-1より古
D-2		SX-1	炉跡					
F-1	II	SX-1 (1号炉)	炉跡				鉄薄	
F-1	II	SX-2 (2号炉) 冶炉跡	炉跡			18世紀前半 ～後半	鉄薄・鍛造剝片	
F-1	II	SX-3 (3号炉)	炉跡	隅丸方形			近世陶器・鉄薄・ 炉石	
F-1	Wn	SX-4 (4号炉)	炉跡			17世紀後半	金属(下層)・鉄薄	
F-1	Wn	SX-5	落ち込み		暗灰褐色粘質砂			
F-1	Wn	SX-6	落ち込み		暗灰褐色粘質砂			
F-1	Wn	SX-7	井跡		黒灰色粘質砂			
F-1	Wn	SX-8 (5号炉)	炉跡				金属	
F-1	Vn	SX-9						
F-2	II	SE-1	井戸跡			17世紀後半	近世陶器	
G-1		SK-1	土坑					
G-1		SK-2	土坑					
G-1		SK-3	土坑					
G-2		SX-1	土坑					
G-2		SX-2	炉跡		燒土			
G-3		SX-1	落ち込み	不定形				
G-3		SX-2	落ち込み	円形				
G-3		SX-3	落ち込み	不定形				
G-4		SK-1	土坑					
G-4		SK-2	土坑					
H-1		SKp-1	ピット			17世紀後半	近世陶器・鉄薄	

第1表 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査主要遺構一覧表

4) 出土遺物

今回の調査で得られた遺物は、中・近世から近・現代に至るもので、テンパコにおよそ20箱分の量である。また、その内容も土器・陶磁器のほか、木製品・石製品・金属製品と多岐にわたっている。ここでは、中世および近世の所産とする遺物に限定して報告することとしたい。なお、報告作業における時間的な制約から、実測図は割愛させていただいた。

a 土器・陶磁器

出土遺物の中心である土器・陶磁器は全体の約8割を占める。ほとんどが15世紀～18世紀に生産時期を求める。中世の遺物包含層は、検出された場合でもすべてを発掘できたトレンチはわずかであるため、必然的に中世の遺物の量は少ない。主要な土器・陶磁器はトレンチ、さらに検出層位別に観察表（第2～7表）にまとめたので参照されたい。ただし、前述したように、必ずしも平面上で遺構を確認できたわけではないので、遺構出土と包含層出土とが混在してしまった。そこで、本報告書ではおおまかな土器・陶磁器の状況を把握するに努め、中世と近世についてその概要を述べるにとどめておきたい。

中世 中世に属す土器・陶磁器としては、中国染付・青磁・珠洲・中世土師器などのほか、16世紀末の唐津がある。

中国染付の319は、口縁部に端反形態を有する皿の口縁部～体部で、15世紀後半～16世紀前半と考えられる〔小野1982〕。青磁の320は、蓮弁文碗の口縁部～体部で、蓮弁文の形態から、15世紀中葉～16世紀にわたる時期と思われる〔上田1982〕。珠洲は、壺・甕類の小片が多い。体部片のみであるため、時期は特定できないが、タタキ目の粗さからいざれもⅣ期（14世紀）以降の所産と思われる。この他に擂鉢があるが、口縁部が残存しているものについてみれば、その形態からⅥ期（15世紀前半）と考えられる〔以上、吉岡1994〕。中世土師器は、3点のロクロ成形の皿を除けば、ほかは京都系の手づくね成形による製品である。ロクロ成形の製品は、いざれも底部片であり、外面には回転糸切り痕を残す。てづくね成形の製品は、皿と小皿がある。体部外面に指頭圧痕があり、口縁部は外表面とともに横ナデがしっかりと施されている。全体的に薄手で、口縁部が外反した器厚の低い器形が想定される。焼成が良好であるものが多く、にぶい（黄）橙色を呈している。今回得られた中世土師器の時期は、おおむね15世紀と考えられる。

近世 陶磁器が主体である¹¹。産地別にみると、圧倒的に肥前系によって占められるが、一部に中国の漳州窯や閩西系、瀬戸系、さらに越中瀬戸¹²なども含まれている。器種としては、碗類・皿類が主体となっている。時期的には、16世紀末の唐津から18世紀まで連続として継続しており、この間における断絶はみられない。また、18世紀以降の遺物の多くは、近年の工事等で遺存し得なかったものと思われる。

近世陶磁器の分類にあたっては、先行研究〔おもに大橋1993・新宿区四ツ谷三丁目遺跡調査団ほか1991など〕に依拠して分類することとした。産地については、陶器は肥前系・瀬戸美濃系など、磁器は肥前系・瀬戸美濃系（越中瀬戸を含む）・閩西系・中国系などである。器種についてはおおまかな分類にとどめたが、碗類・皿類・鉢類の場合は口径に基づいた細分を試みた。すなわち、小杯：50mm未満・小碗50～94mm・中碗91～145mm・大碗145～170・小皿：76～136mm・五寸皿：136～167mm・中皿：167～258mm・大皿：258mm以上・小鉢：136mm未満・中鉢：136～258mm・大鉢：258mm以上である。また、製作年代については諸研究により具体的な年代が提示されているが、消費地遺跡であることも加味し、幅を持たせた年代で示すこととした。

番号	出土場所	部位・道管等	種類	器種	地色の色調	文様・技法	胎土色	製作地	製作年代	備考
11a	1 B-1	N-a型(中+下)	短筒	瓶	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
11a	2 B-1	N-a型(中+下)	短筒	器物	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀後半	
11a	3 B-1	N-a型(中+下)	短筒	香炉	明黄		灰白	肥前系	17世紀後半	
11a	4 B-1	N-a型(中+下)	短筒	瓶	五寸瓶		灰白	肥前系	初期伊万里	
11a	5 B-1	N-a型(中+下)	短筒	中筒	オリーブ	京焼風	淡黄	肥前系	17世紀後半～18世紀初半	
11a	6 B-1	N-a型(中+下)	短筒	小瓶	明黄	-垂胴目文	灰白	肥前系	17世紀後半	
11a	7 B-1	N-a型(中+下)	短筒	五寸瓶	灰白	唐草文(横打ち)	灰白	肥前系		
11a	8 B-1	N-a型(中+下)	短筒	瓶	黄褐	三鳥文	灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀初半	
11a	9 B-1	N-a型(中+下)	短筒	大瓶	明黄	鶴の目四型高台 ヘビ彫り	灰白	肥前系	17世紀後半	
11a	10 B-1	N-a型(中+下)	短筒	瓶	淡黄		淡黄	肥前系	17世紀後半	
11b	11 B-1	1. b型	短筒	中筒	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
11b	12 B-1	1. b型	短筒	蝶紋	黑褐		暗灰	肥前系	17世紀後半	
11b	13 B-1	1. b型	短筒	蝶紋	白	に似一鶴	灰白	肥前系	17世紀後半	
11b	14 B-1	1. b型	短筒	蝶紋	黑褐		明黄	肥前系	17世紀後半	
11b	15 B-1	1. b型	短筒	蝶紋	黑褐		明黄	肥前系	17世紀後半	
11b	16 B-1	庵土	短筒	五寸瓶	明黄		に似一黄鶴	肥前系	17世紀後半	初期伊万里
11b	17 B-1	庵土	短筒	中筒	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
11b	18 B-1	庵土	短筒	口片	灰黄	小鳥	灰白	肥前系	17世紀後半	
11b	19 B-1	庵土	短筒	大持(浅丸型)	白	に似一鶴	桃毛目	肥前系	17世紀後半	
11b	20 B-1	庵土	短筒	水注	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
11c	21 B-1	庵土	短筒	罐	米色		白	肥前系	17世紀後半	
11a	22 B-2	N-a型(中)	短筒	小瓶	オリーブ	貝目	灰	(肥前系)	16世紀末～17世紀初頭 (房津)	
11a	23 B-2	N-a型(中)	短筒	口片	明黄		灰白	肥前系	17世紀後半	
11a	24 B-2	N-a型(中)	短筒	小瓶	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
11a	25 B-2	N-a型(中)	短筒	小瓶	明黄		灰白	肥前系	17世紀中～後半	
12a	26 B-3	N-a+c型	向筒	小瓶	オリーブ	酒溝・砂目	灰	肥前系	17世紀後半	
12a	27 B-3	N-a+c型	短筒	中瓶	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
12a	28 B-3	N-a+c型	短筒	中瓶	灰白	-垂胴目文	灰白	肥前系	17世紀後半	
12a	29 B-3	N-a+c型	短筒	中瓶	灰白	明オーリーブ	青磁	肥前系	17世紀後半～中葉	
12a	30 B-3	N-a+c型	短筒	中瓶	白	に似一黄	灰白	肥前系	17世紀後半	
12a	31 B-3	N-a+c型	短筒	中瓶	灰白	青磁	灰白	肥前系	17世紀後半	
12a	32 B-3	N-a+c型	短筒	大瓶	灰白	オーリーブ	桃毛目	肥前系	17世紀後半	
12a	33 B-3	N-a+c型	短筒	罐	赤茶		灰白	肥前系	17世紀後半	
12a	34 B-3	田耕(上)	短筒	中瓶	白	酒溝・砂目	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	35 B-3	田耕(上)	短筒	罐	白	に似一鶴	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	36 B-3	田耕(上)	短筒	罐	白	灰白	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	37 B-3	庵土	中筒上部器	里	白	に似一青磁	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	38 B-3	庵土	中筒上部器	里	白	に似一青磁	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	39 B-3	庵土	口片	壁・窓	灰		灰	肥前系	17世紀後半	
12b	40 B-3	庵土	口片	中体	灰	に似一赤褐	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	41 B-3	庵土	口片	中筒	灰白	青磁	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	42 B-3	庵土	短筒	小瓶	灰	見足記／目跡割	灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀初半	
12b	43 B-3	庵土	短筒	小瓶	灰白	見足記／目跡割	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	44 B-3	庵土	短筒	小瓶	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	底部外側にツール行存
12b	45 B-3	庵土	短筒	中瓶	オーリーブ		灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	46 B-3	庵土	短筒	中瓶	明オーリーブ		灰白	肥前系	17世紀末～18世紀	
12b	47 B-3	庵土	短筒	蓋	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	48 B-3	庵土	短筒	中筒(丸型)	灰白	-垂胴目文	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	49 B-3	庵土	短筒	中筒(平底型)	明黄		灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	50 B-3	庵土	短筒	中筒	明黄	京燒風	淡黄	肥前系	17世紀後半～(18世紀初半)	
12b	51 B-3	庵土	短筒	瓶	灰白		灰白	肥前系		
12b	52 B-3	庵土	短筒	瓶	灰白		灰白	肥前系		
12b	53 B-3	庵土	短筒	口片	黑褐		灰白	肥前系	17世紀末～18世紀初半	
12b	54 B-3	庵土	短筒	口片	明黄		灰白	肥前系	17世紀末～18世紀初半	
12b	55 B-3	庵土	短筒	瓶	灰白		灰白	肥前系	17世紀末～18世紀初半	
12b	56 B-3	庵土	短筒	大持(浅丸型)	に似一黄鶴	二手目	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	57 B-3	庵土	短筒	罐	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	58 B-3	庵土	短筒	五寸瓶	灰白	墨脱	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	59 B-3	庵土	短筒	中体	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	60 B-3	庵土	短筒	罐	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
13a	61 B-4	N-a型(下)	短筒	大瓶(折腰型)	に似一赤褐	酒溝	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	62 B-4	N-a型(中)	短筒	口片	灰白	に似一赤褐	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	63 B-4	N-a型(中)	短筒	小瓶	明黄		灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	64 B-4	N-a型(中)	短筒	小瓶	灰白	四方淨文	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	65 B-4	N-a型(中)	短筒	中筒	明黄		灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	66 B-4	N-a型(中)	短筒	中筒	明黄	オーリーブ	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	67 B-4	N-a型(中)	短筒	中筒	灰白	灰白	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	68 B-4	N-a型(中)	短筒	瓶	灰白	青磁	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	69 B-4	N-a型(中)	短筒	瓶	明黄	酒溝	明赤褐	肥前系	17世紀後半～18世紀初半	
14b	70 B-4	N-a型(中)	短筒	小瓶	灰白	四方淨文	灰白	肥前系	17世紀後半	
14b	71 B-4	N-a型(上)	短筒	口片	黑褐	子目文当と具組	黑褐	肥前系	17世紀末～18世紀初半	
14b	72 B-4	N-a型(上)	短筒	灯明台	黒	明赤褐	肥前系	17世紀後半		
14b	73 B-4	N-a型(上)	短筒	火丸	に似一赤褐	淡黄	肥前系			
14b	74 B-4	N-a型(上)	短筒	火丸	火丸	灰白	肥前系			
12b	75 B-4	庵土	短筒	瓶	灰白	オーリーブ	灰白	肥前系	17世紀後半	
12b	76 B-4	庵土	短筒	罐	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	「太明年號」
12b	77 B-4	庵土	短筒	罐	灰白		灰白	肥前系		

第2表 柏原町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器類収表(1)

器種	出土地点	解説・遺物等	種別	古文	陶器の色調	文様・技法	胎土色	製作地	製作年代	備考
15a	78 B - 4 地上	磁器	小皿	灰黄			灰	肥前系	17世紀前半	
15b	79 B - 4 地上	磁器	伝子窯	灰オリーブ			灰白	肥前系		
15c	80 B - 4 地上	磁器	磁体	灰青			灰灰	肥前系	17世紀後半	
15d	81 B - 4 地上	磁器	瓶	黒			黑	肥前系	17世紀後半	
15e	82 B - 4 地上	磁器	小鉢(丸型)	にぶい黄			灰黄	肥前系		
15f	83 B - 4 地上	磁器	大鉢	にぶい黄	網目目	明治期	灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀前半	
15g	84 B - 4 地上	磁器	盤・盤	黒褐		予目文當て其類	にぶい赤褐	肥前系	17世紀末～18世紀中葉	
15h	85 B - 3 地上(下)	陶器	小鉢(丸型)	(外)灰白・ (内)黒			にぶい黄	肥前系		
16a	86 B - 5 地上(下)	陶器	大鉢	灰黄			灰黄	肥前系 (吉田)	17世紀中葉	
16b	87 B - 5 地上(下)	陶器	大盤	灰オリーブ			灰黄	肥前系		
16c	88 B - 5 地上(下)	磁器	五寸盤	灰白	柳葉文(壓打)		灰白	肥前系	17世紀後半	
16d	89 B - 5 地上(下)	陶器	磁体	にぶい赤褐			暗灰	肥前系	17世紀中葉～後半	
16e	90 B - 5 地上(下)	陶器	中鉢(丸型)	灰黄			にぶい褐	肥前系		
16f	91 B - 5 地上(下)	陶器	人形	灰白			灰白	肥前系		
16g	92 B - 5 地上(中)	陶器	大盤	褐褐			灰褐	肥前系	17世紀後半～18世紀後半	
16h	93 B - 5 地上(中)	陶器	大盤	褐褐			褐灰	肥前系	17世紀後半～18世紀後半	
16i	94 B - 5 地上(中)	磁器	小碗	網目灰	見込蛇ノ目輪割が ・高行無脚、口環 に付く =	反曲	灰白	肥前系		
16j	96 B - 5 地上(中)	磁器	小皿(丸型)	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半	
16k	97 B - 5 地上(中)	磁器	盤	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半～後葉	
16l	98 B - 5 地上(中)	磁器	小碗	灰白			灰白	肥前系	18世紀後葉～後葉	
16m	99 B - 5 地上(中)	磁器	五寸盤	網目灰			灰白	肥前系		
16n	100 B - 5 地上(上)	陶器	磁体	にぶい			赤	肥前系		
16o	101 B - 5 地上(上)	陶器	大鉢(丸型)	にぶい赤褐	網目目	灰白	肥前系	18世紀		
16p	102 B - 5 地上(上)	陶器	大鉢(丸型)	灰オリーブ			灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀前半	
16q	103 B - 5 地上	中世土器	盤					手づく成形	17世紀後半	
16r	104 B - 5 地上	陶器	大盤(丸型)	灰白			灰白	肥前系	15世紀	
16s	105 B - 5 地上	陶器	大盤(丸型)	灰白	灰オリーブ		肥前系 (内野山)			
16t	106 B - 5 地上	磁器	小皿(丸型)	網目灰			灰白	肥前系		
16u	107 B - 5 地上	磁器	中鉢	灰白			灰白	肥前系		
16v	108 B - 5 地上	磁器	中鉢(丸型)	灰白			灰白	肥前系		
16w	109 B - 5 地上	磁器	中鉢(丸型)	灰白			灰白	肥前系		
16x	110 B - 5 地上	磁器	中鉢(丸型)	灰白			灰白	肥前系		
16y	110 B - 5 地上	磁器	中鉢(丸型)	灰白			灰白	肥前系		
16z	111 B - 5 地上	陶器	中世土器	網目			灰白	肥前系		
16aa	112 B - 5 地上	陶器	口引鉢	暗赤灰			にぶい赤褐	肥前系		
16ab	113 B - 5 地上	陶器	磁体	網目			にぶい褐	肥前系		
16ac	114 B - 5 地上	陶器	口引	網目赤褐			にぶい赤褐	肥前系		
16ad	115 B - 5 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ae	116 B - 5 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16af	117 B - 5 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ag	118 B - 5 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ah	119 B - 5 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ai	120 B - 5 V字形	中世土器	盤	ロクの底			ロクの底	15世紀		
16aj	121 B - 5 地上	土器	耳	口引			口引	口引		
16ak	122 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16al	123 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16am	124 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16an	125 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ao	126 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ap	127 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16aq	128 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ar	129 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16as	130 B - 6 SK - I	磁器	大皿	灰青			灰青	肥前系		
16at	131 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16au	132 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16av	132 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16aw	133 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ax	134 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ay	135 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16az	136 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16ba	137 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bb	138 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bc	139 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bd	140 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16be	141 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bf	142 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bg	143 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bh	144 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bi	145 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bj	146 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bk	147 B - 6 V字形	中世土器	盤	手づくね成形			手づくね成形	15世紀		
16bl	148 B - 7 V字形	中世土器	磁体	灰			灰	肥前系	15世紀	
16bm	149 B - 7 V字形	中世土器	磁体	灰			灰	肥前系	15世紀	
16bn	150 B - 7 V字形	中世土器	磁体	灰			灰	肥前系	15世紀	

第3表 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土器・陶器観察表（2）

高 号	出 土 地 点	解 位・道 撲 等	種 别	器 形	色 装 の 色 調	文 样・技 法	胎 土 色	製 作 地	製 作 年 代	備 考
16b	151 B-7 N-a带	細部	中壺	灰白			灰白	肥前系		
16b	152 B-7 N-a带	細部	中壺	明オーリーブ灰	見込蛇ノ目地斜彎	灰白	肥前系	17世紀後半		
16b	153 B-7 N-a带	細部	中壺	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半	
16b	154 B-7 N-a带	細部	大壺	明緑灰			灰白	肥前系	17世紀後半	
16b	155 B-7 N-a带	細部	五寸壺	灰			灰白	肥前系	17世紀後半	初期伊万里
16b	156 B-7 N-a带	細部	五寸壺	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半	初期伊万里
16b	157 B-7 N-a带	細部	小瓶	灰			灰白	肥前系	16世紀後半	
16b	158 B-7 N-a带	細部	中壺(側削形)	灰白			灰白	肥前系		
16b	159 B-7 N-a带	細部	中壺	灰白			灰白	肥前系		
16b	160 B-7 N-a带	細部	細部	赤			赤	肥前系	17世紀後半	
17d	161 B-7 N-a带	細部	細部	赤			赤	肥前系	17世紀後半	
17d	162 B-7 N-a带	細部	大壺	暗紅黃			暗紅黃	肥前系		
17d	163 B-7 N-a带	細部	壺	暗赤褐	猪子目文タマ口にぶい赤尾	肥前系	17世紀末葉～18世紀中葉			
18a	164 B-7 座土	細部	中壺	灰黄	調輪・砂口	淡黄褐色	肥前系	17世紀後半	高台内面黒唐「十」	
18a	165 B-7 座土	細部	中壺	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半	津波紋
18a	166 B-7 座土	細部	五寸壺	オーリーブ青	調輪	淡灰	肥前系			
18a	167 B-7 座土	細部	小壺	明オーリーブ	見込蛇ノ目地斜彎	灰白	肥前系	17世紀後半		
18a	168 B-7 座土	細部	小壺	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半	
18a	169 B-7 座土	細部	小壺(丸形)	明オーリーブ灰			灰白	肥前系	17世紀後半	
18a	170 B-7 座土	細部	小壺	灰白			灰白	肥前系	16世紀後半	
18a	171 B-7 座土	細部	細部	灰白			にぶい黄褐	砂口横耳		
18a	172 B-7 座土	細部	壺	灰			暗紅褐	肥前系	18世紀初頭	津波紋
18a	173 B-7 座土	細部	五寸壺	灰白			淡黄	肥前系	17世紀後半	初期伊万里
18a	174 B-7 座土	細部	小瓶	にぶい黄	菊文	灰白	肥前系	17世紀後半		
18a	175 B-7 座土	細部	瓶	淡黄			にぶい黄	肥前系	18世紀	
18a	176 B-7 座土	細部	小杯(端反形)	明緑灰			灰白	肥前系		
18a	177 B-7 座土	細部	中壺	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半(～後半)	
18b	178 B-7 座土	細部	中壺(端反形)	にぶい青黄	京焼風灰墨手彌	灰黄	肥前系	17世紀後半		
18b	179 B-7 座土	細部	細部	黑褐			黑褐	肥前系	17世紀後半	
18b	180 B-7 地区	細部	細部	灰白			灰白	17世紀後半～中葉		
18b	181 B-7 地区	細部	細部	灰白			赤	肥前系	17世紀後半	
18b	182 B-7 地区	細部	五寸壺(端削形)	明青灰			灰白	肥前系	17世紀後葉～中葉	
18b	183 B-7 地区	細部	小瓶	明オーリーブ灰			灰白	肥前系	17世紀後葉～中葉	
18b	184 B-7 地区	細部	小瓶	灰白			灰白	肥前系	17世紀後半	高台内面無鉢「小瓶」
18b	185 B-7 地区	表面	中壺	明オーリーブ灰	青磁染付	灰白	肥前系	16世紀中葉～後半		
18b	186 B-7 地区	表面	大壺	明緑灰			灰白	肥前系	17世紀後半	
18b	187 B-7 地区	表面	瓶	黄褐			灰白	肥前系	17世紀後半	
18b	188 B-7 地区	表面	細部	暗赤	暗赤		赤	肥前系	(削鉢)	
20a	189 C-1 V-b带	中壺陶器	壺	灰			灰	珠列		
20a	190 C-1 V-b带	中壺土陶器	壺	手づくね成形			手づくね成形			
20a	191 C-1 V-b带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄褐		手づくね成形		15世紀	
20a	192 C-1 V-b带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄		手づくね成形		15世紀	
20a	193 C-1 V-b带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄		手づくね成形	穂	15世紀	
20a	194 C-1 V-b带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	穂		手づくね成形	穂	15世紀	
20a	195 C-1 V-b带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄褐		手づくね成形	にぶい黄褐	15世紀	
20a	196 C-1 N-c带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄		手づくね成形	にぶい黄		
20a	197 C-1 N-c带	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄		手づくね成形	にぶい黄		
20a	198 C-1 N-c带	阿型	壺	オーリーブ灰	鉄輪・輪	灰白	肥前系(削鉢)			
20a	199 C-1 N-c带	阿型	小瓶(後削形)	灰褐	鉄土口	穂	肥前系(削鉢)			
20b	200 C-1 N-a带	中壺陶器	壺	灰			灰	珠列	15世紀	
20b	201 C-1 N-a带	中壺陶器	小瓶(丸形)	明オーリーブ			赤	肥前系	17世紀中葉	
20b	202 C-1 N-a带	中壺	小瓶	灰白	調輪・爽淡鶴	穂	肥前系(削鉢)			
20b	203 C-1 N-a带	中壺	小瓶	灰白	明オーリーブ	灰白	肥前系			
20b	204 C-1 N-a带	中壺	小瓶(丸形)	灰白	口紅装飾	灰白	肥前系	17世紀後半		
20b	205 C-1 N-a带	中壺	中壺(丸形)	にぶい黄		浅黄	肥戸系	17世紀中葉		
20b	206 C-1 N-a带	中壺	細部	灰白			にぶい黄褐	肥前系	16世紀末～17世紀初葉	
20b	207 C-1 N-a带	中壺	瓶	にぶい黄	爽淡鶴	灰白	肥前系(削鉢)	16世紀後葉		
21a	208 C-1 座土	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄褐		手づくね成形		15世紀	
21a	209 C-1 座土	中壺土陶器	壺	手づくね成形	にぶい黄		手づくね成形		15世紀	
21a	210 C-1 座土	壺口	皮黄				皮黄	肥前系	15世紀	
21a	211 C-1 座土	陶器	皮黄	爽淡鶴	穂	穂	肥前系(削鉢)	16世紀後葉～17世紀初頭		
20a	212 C-1 座土	細部	小瓶	明オーリーブ灰	見込蛇ノ目地斜彎	灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀前半		
20a	213 C-1 座土	細部	壺	にぶい黄			浅黄	肥前系		
21a	214 C-1 座土	細部	細部	皮黄			晴淡鶴			
21a	215 C-1 座土	細部	細部	黑褐			穂			
21b	216 C-2 V-b带	中壺土陶器	壺	ロクロ腹形	にぶい穂		にぶい穂	珠列	15世紀	
21b	217 C-2 V-b带	中壺陶器	壺	ロクロ腹形	にぶい穂		にぶい穂	珠列	15世紀	
21b	218 C-2 V-b带	中壺	壺	明オーリーブ灰			にぶい穂	肥前系		
21b	219 C-2 V-b带	中壺	壺	明オーリーブ灰			にぶい穂	肥戸系		
21b	220 C-2 N-a带(下)	中壺	壺	灰			灰白	肥前系	珠列	
21b	221 C-2 S-k-1	中壺	小瓶(丸形)	明オーリーブ灰			灰白	肥前系	珠列	

第4表 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器觀察表(3)

品目	番号	出土地点	種類・遺構等	種別	基 備	舞素の色調	文様・技法	胎土色	作 地	製 作 年 代	備 考
21b	222	C-2	1b層	陶器	中綱(丸形)	(外)灰モリーブ、(内)灰白	見达蛇ノ目輪割ぎ +かけわけ	灰白	肥前系 (内野山)	17世紀後半	
21b	223	C-2	1b層	陶器	中綱(丸形)	(外)エクラルド+白、(内)灰白	かけわけ	灰白	肥前系 (内野山)	17世紀後半	
21b	224	C-2	1b層	陶器	鉢	灰白	網目	明治系	肥前系	17世紀後半~18世紀前半	
21b	225	C-2	1b層	陶器	大鉢	灰	網目	淡黄	肥前系	17世紀後半~18世紀前半	
21b	226	C-2	1b層	陶器	鉢	浅黄		綠	肥前系	17世紀後半	
21b	227	C-2	1b層	陶器	鉢	にじい縞		灰黃褐	肥前系		
21b	228	C-2	1b層	陶器	中綱(乳頭手形)	網目	京焼風乳頭手形	オリーブ黒	肥前系		
22a	229	C-2	底土	陶器	鉢	灰	灰モリーブ	皮膚手	灰白	肥前系	皮膚手
22a	230	C-2	底土	陶器	鉢	灰(端反形)	灰白		灰白	肥前系	18世紀末~19世紀
22a	231	C-2	底土	陶器	鉢			綠	肥前系		
22a	232	C-2	底土	陶器	中綱(乳頭手形)	網目	京焼風乳頭手形	灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	233	C-2	底土	陶器	鉢	灰白	松葉文	灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	234	C-2	底土	陶器	鉢	網目		灰白	肥前系	16世紀末~19世紀	
22a	235	C-2	底土	陶器	鉢	灰モリーブ		灰モリーブ	肥前系		
22a	236	C-2	底土	陶器	小鉢	灰白		灰白	肥前系		
22a	237	C-2	底土	陶器	中綱(丸形)	網目	灰モリーブ	灰白	肥前系		
22a	238	C-2	底土	陶器	鉢			淡黄	神戸(御戸)		
22a	239	C-2	底土	陶器	鉢	灰白	山水文	灰白	肥前系	19世紀初頭~後期	
22a	240	C-2	底土	陶器	鉢	灰モリーブ		灰白	肥前系		
22a	241	C-2	底土	陶器	中綱	明治系					肥前
22a	242	D-1	Vb層	中野土(縫隙)	皿		手づくろ成形	綠		15世紀	円皿にすす付着
22a	243	D-1	Vb層	中野土(縫隙)	皿		手づくろ成形	綠		15世紀	
22a	244	D-1	Vb層	中野土(縫隙)	皿		ロクロ成形	にじい縞		15世紀	
22a	245	D-1	Vb層	中野土(縫隙)	器・蓋			網目			
22a	246	D-1	Vb層	陶器	小甕	灰モリーブ		灰白	肥前系 (酒井)	17世紀初期	
22a	247	D-1	Va層	陶器	小甕	オリーブ黄	見达蛇ノ目輪割ぎ	淡黄	肥前系 (内野山)		
22a	248	D-1	Va層	陶器	漆	舞素黄		灰黃褐		18世紀後半 (~19世紀)	
22a	249	D-1	造漆 a	陶器	中綱(丸形)	灰白	一重刷口目	灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	250	D-1	Va層	陶器	小甕	灰モリーブ		灰白	肥前系		
22a	251	D-1	Va層	陶器	鉢	網目		灰白	肥前系	18世紀 a	
22a	252	D-1	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	253	D-1	I-a層(下)	陶器	小鉢	灰白		灰白	肥前系		
22a	254	D-1	2層	陶器	五寸壺(丸形)	網目	見达蛇ノ目輪割ぎ	灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	255	D-1	2層	陶器	小鉢	網目	見达蛇ノ目輪割ぎ	灰白	肥前系	17世紀後半~後期	
22a	256	D-1	2層	陶器	小鉢	網目	見达蛇ノ目輪割ぎ	灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	257	D-1	2層	陶器	中綱(丸形)	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	258	D-1	2層	陶器	中綱(丸形)	灰白	四方脚足	灰白	肥前系		
22a	259	D-1	2層	陶器	小鉢	網	見达蛇ノ目輪割ぎ	仁喜・黄褐	肥前系	17世紀後半	初期伊万里
22a	260	D-2	I-a層	陶器	中綱(丸形)	灰白	コンニャク印押	灰白	肥前系	17世紀初~18世紀前半	
22a	261	D-2	I-a層	陶器	中綱(乳頭手形)	淡黄	京焼風乳頭手形	淡黄	肥前系	17世紀後半	
22a	262	D-2	I-a層	陶器	中綱(乳頭形)	網目		淡黄	肥前系	17世紀末~18世紀初期	「太明原」 (酒井見)
22a	263	D-2	I-a層	陶器	中綱(丸形)	灰白		白	開陽系	19世紀中期後	
22a	264	D-2	I-a層	陶器	小鉢	灰		灰	開陽系	18世紀中期~後期	
22a	265	D-2	I-a層(下)	陶器	小甕	にじい縞	見达蛇ノ目輪割ぎ	仁喜・黄褐	肥前系	17世紀初~18世紀中期	
22a	266	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白	コシニャク印押	灰白	肥前系	17世紀初~18世紀中期	
22a	267	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(乳頭手形)	明治系	京焼風乳頭手形	淡黄	肥前系	17世紀後半	
22a	268	D-2	I-a層(下)	陶器	網	灰白	網目	網目	肥前系	17世紀後半	
22a	269	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(乳頭手形)	にじい縞	京焼風乳頭手形	淡黄	肥前系		
22a	270	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	網目	見达蛇ノ目輪割ぎ	淡黄	肥前系	17世紀後半	
22a	271	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		網目	肥前系		
22a	272	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		網目	肥前系		
22a	273	D-2	I-a層(下)	陶器	鉢			網目	肥前系		
22a	274	D-2	I-a層(下)	陶器	小鉢			網目	肥前系		
22a	275	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		網目	肥前系		
22a	276	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		網目	肥前系		
22a	277	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		網目	肥前系		
22a	278	D-2	I-a層(下)	陶器	鉢			網目	肥前系		
22a	279	D-2	I-a層(下)	陶器	中綱(丸形)	灰白		網目	肥前系		
22a	280	D-2	底土	陶器	中綱(丸形)	灰白		灰白	肥前系		
22a	281	D-2	底土	陶器	鉢	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
22a	282	D-2	底土	陶器	鉢	灰		黑	肥前系		
22a	283	D-2	底土	陶器	鉢	網目		綠	肥前系		
22a	284	D-2	底土	陶器	中綱赤絵			淡黄	肥前系		
22a	285	D-2	底土	陶器	中綱	赤子日タキヨウ	淡黄褐	肥前系	17世紀後期~18世紀中期		
22b	286	D-2	底土	陶器	中綱	青磁地付・蛇ノ目	灰白	肥前系	17世紀後半~中葉		
22b	287	D-2	底土	陶器	中綱	黒		黑	肥前系		
22b	288	E-1	網附(下)	陶器	中綱	中綱(丸形)	灰白	灰白	肥前系		
22b	289	E-1	網附(下)	陶器	中綱	灰モリーブ	灰モリーブ	灰モリーブ	肥前系		

第5表 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土器・陶器観察表（4）

番号	上三地魚・貝類等	種別	形態	船底の色調	文様・目法	船土色	製作地	製作年代	参考
25a	E-1 日勝(下)	陶器	丸	砂目	灰	肥前系			
25a	E-1 日勝(下)	磁器	中盤	灰白	束口	肥前系			
25a	E-1 日勝(上)	磁器	中腹(浅丸型)	黄褐色	網毛目	にぶい黄緑	17世紀後半～18世紀前半		
25a	E-1 日勝(上)	陶器	中腹(底筋付)	青白	京焼銀器款手彌	銀	17世紀後半		
25a	E-1 日勝(上)	陶器	大鉢	緋		緋	肥前系		
25a	E-1 日勝(上)	磁器	中盤(丸型)	灰白		灰白	肥前系	18世紀前半	
25a	E-1 日勝(上)	磁器	青花竹	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀	
25a	E-1 日勝(上)	磁器	青花竹	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半～18世紀	
25a	E-1 日勝(上)	磁器	中盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	25b E-1 日勝(上)	磁器	小盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	300 E-1 日勝(上)	磁器	小盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	301 E-1 日勝(上)	磁器	小盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	302 E-1 日勝(上)	磁器	小盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	303 E-1 日勝(上)	磁器	小盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	304 E-1 日勝(上)	磁器	小盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀末～18世紀前半	
25b	305 E-1 日勝(上)	磁器	中盤(丸型)	灰白	五舟花(コンニッキ タ印型)	灰白	肥前系	17世紀前半	
25b	306 E-1 日勝(上)	小皿		灰白	見込みノ目輪割	灰白	肥前系		
25b	307 E-1 日勝(上)	小皿		灰白	一重網目文	灰白	肥前系	17世紀後半	
25b	308 E-1 日勝(上)	盤	オーリーブ			灰白	肥前系		
25b	309 E-1 日勝(上)	火鉢		赤茶	網毛目	赤	肥前系	17世紀後半～18世紀前半	
25b	310 E-1 日勝(上)	火鉢		赤茶	網毛目	赤	肥前系	17世紀後半～18世紀前半	
25b	311 E-1 日勝(上)	盃・羹	箱手柄		にぶい赤				
25b	312 E-1 魚土	磁器	小盤(丸型)	オーメラルド	見込みノ目輪割	淡黄	肥前系	17世紀後半	
25b	313 E-1 魚土	磁器	小盤(丸型)	灰白		灰白	肥前系		
25b	314 E-1 魚土	磁器	小研(脚附型)	灰白		灰白	肥前系		
25b	315 E-1 魚土	磁器	中盤(脚附型)	灰白		灰白	肥前系	17世紀後半	
25b	316 E-1 魚土	磁器	小研(丸型)	灰黃		灰白	肥前系		
25b	317 E-1 魚土	磁器	裏	灰白		灰白	肥前系	17世紀中後～後半	
25b	318 E-1 魚土	陶器	脚附	暗赤茶		明赤茶			
25b	319 F-1 W 春	中国傘籠	裏	灰白			参録	17世紀後半～18世紀前半	
25b	320 F-1 W 春	青呂四	碗	オーリーブ	青身文	灰白	収蔵	15世紀後半～16世紀前半	
25b	321 F-1 W 春	中世御器	串・壺			灰	踏査		
25b	322 F-1 W 春	中世御器	通		手づくね底脚	明赤茶		15世紀	
25b	323 F-1 W 春	中世御器	通		手づくね底脚	にぶい・黄褐		15世紀	
25b	324 F-1 S K-9	中世御器	通		手づくね底脚	明赤茶		15世紀	
25b	325 F-1 S K-9	中世御器	串・壺			灰	踏査		
25b	326 F-1 S K-9	陶器	小盤	灰	灰オーリーブ	灰	肥前系		
25b	327 F-1 S K-9	陶器	小盤(使脚型)	灰	明オーリーブ	灰	肥前系		
25b	328 F-1 S K-9	磁器	裏	灰	明オーリーブ	灰白	肥前系		
25b	329 F-1 W 春(?)	陶器	脚附	暗赤茶		浅黄	越中鶴戸		
25b	330 F-1 W 春(?)	陶器	小盤(丸型)	灰黃		緋			
25b	331 F-1 W 春(?)	小手土瓶	通		手づくね底脚	灰	踏査		
25b	332 F-1 S K-7	陶器	小盤	灰白	清酒・砂目	淡黄	肥前系	15世紀	
25b	333 F-1 S K-7	陶器	小盤	灰白	清酒・砂目	灰白	肥前系	17世紀前半	
25b	334 F-1 日勝	陶器	小盤	灰白	清酒・砂目	灰白	肥前系	17世紀前半	
25b	335 F-1 日勝	陶器	裏	灰白		白	肥前系		
25b	336 F-1 日勝	陶器	裏	灰白		白	肥前系		
25b	337 F-1 日勝(上)	陶器	裏	灰白	にぶい赤	砂目	肥前系	17世紀前半	
25b	338 F-1 日勝(上)	陶器	裏	灰白		灰	肥前系	17世紀前半	
27b	339 F-1 S X-2	磁器	(外)エメラルド・(内) 灰白	手付	手付	灰白	中国*	18世紀	
27b	340 F-1 S X-2	磁器	灰白		角形・付付	灰白	肥前系	18世紀後半	
27b	341 F-1 S X-2	磁器	灰	オーリーブ		灰白			
27b	342 F-1 S X-1	磁器	通	オーリーブ		灰白			
27b	343 F-1 魚土	磁器	端(端反型)	淡黄		淡黄	津川*		
27b	344 F-1 魚土	磁器	端	灰白		灰白	肥前系	18世紀末～19世紀	
27b	345 F-1 魚土	磁器	中盤	灰白	明オーリーブ	灰白	肥前系		
27b	346 F-1 魚土	磁器	中盤	灰白	明オーリーブ	灰白	肥前系		
27b	347 F-1 魚土	磁器	脚	灰	輪花	にぶい黄緑	開内系*		
27b	348 F-1 魚土	磁器	脚	灰	灰	灰白	肥前系		
27b	349 F-1 魚土	磁器	脚	灰	灰	灰白	肥前系		
27b	350 F-1 魚土	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	開内系		
27b	351 F-1 魚土	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	肥前系		
27b	352 F-1 魚土	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	肥前系		
27b	353 F-1 魚土	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	肥前系		
27b	354 F-1 魚土	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	肥前系		
27b	355 F-1 魚土	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	肥前系		
27b	356 F-1 日勝(上)	磁器	小盤	灰白	灰白	灰白	肥前系	17世紀前半	
27b	357 F-1 日勝(上)	磁器	小盤	オーリーブ		黄皮	肥前系	17世紀前半	
27b	358 F-1 日勝(上)	磁器	脚	灰	輪	にぶい赤	肥前系		
27b	359 F-1 日勝(中～下)	磁器	脚	灰白	輪	明赤茶	肥前系		
27b	360 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	361 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	362 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	363 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	364 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	365 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	366 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	367 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	368 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	369 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	370 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	371 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	372 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	373 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	374 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	375 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	376 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	377 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	378 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	379 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	380 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	381 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	382 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	383 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	384 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	385 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	386 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	387 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	388 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	389 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	390 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	391 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	392 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	393 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	394 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	395 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	396 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	397 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	398 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	399 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	400 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	401 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	402 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	403 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	404 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	405 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	406 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	407 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	408 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	409 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	410 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	411 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	412 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	413 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	414 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	415 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	416 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	417 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	418 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	419 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	420 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	421 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	422 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	423 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	424 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	425 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	426 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	427 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	428 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	429 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	430 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	431 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	432 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	433 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	434 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	435 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	436 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	437 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前系		
27b	438 F-1 日勝(中～下)	磁器	コバルト		輪	明赤茶	肥前		

第6表 柏崎町遺跡第2次試掘確認調査出土土器・陶磁器観察表（5）

試験	番号	出土地点	層位・遺構等	種別	基 種	繪墨の色調	文様・技法	胎土色	製作地	製作年代	備 考
256	261	F - 2	日置(中 - 2)	磁器	六寸瓶(丸脚)	暗緑灰	灰白	肥前系	17世紀前半		
256	262	F - 2	日置(中 - 3)	磁器		オリーブ青	灰白	肥前系			
256	263	F - 2	日置(中 - 3)	磁器	中壇(圓底形)	暗オリーブ	灰白	肥前系			
256	264	F - 2	日置(中 - 3)	磁器	中壇(丸脚)	淡黄	京焼風・高台無脚	灰白	肥前系		
256	265	F - 2	日置(中 - 2)	磁器		淡白	反青	中白+			
256	266	F - 2	日置(中 - 2)	磁器		淡白	灰白	肥前系	17世紀後半		
256	267	F - 2	日置(中 - 2)	磁器	瓶	明よりーブ灰	灰白	肥前系	17世紀後半		
256	268	F - 2	日置(中 - 2)	磁器	中壇	淡白	灰白	肥前系	17世紀後半		
256	269	F - 2	日置(中 - 2)	磁器	瓶	淡白	灰白	肥前系	16世紀		
256	270	F - 2	日置(中 - 2)	磁器	瓶	淡黃	網毛目	難波	肥前系	17世紀後半～18世紀前半	
256	271	F - 2	日置(中 - 2)	陶器	網狀	暗赤灰		難波	肥前系	18世紀	
256	272	F - 2	日置(中 - 2)	陶器	網狀	に点い・赤	淡青	越前窯戸			
256	273	F - 2	日置(中 - 2)	陶器	網狀	赤褐色		淡青	越前窯戸		
256	274	F - 2	日置(中 - 1)	磁器	中壇(丸脚)	暗オリーブ灰	青磁染付・五花鉢 (サンニク印押)・四方攷文	灰白	肥前系	18世紀	高台内絵
256	275	F - 2	日置(中 - 1)	陶器	網狀	灰		灰	肥前系	17世紀後半	
256	276	F - 2	日置(中 - 1)	磁器	小瓶	淡白		灰白	肥前系		
256	277	F - 2	日置(中 - 1)	磁器		淡白	能ノ目四重高台	灰白	肥前系	18世紀後半	
256	278	F - 2	日置(中)	磁器	大瓶(木表形)	に点い・黄	見足付・ノ目輪脚	に点い・黄	開口+		
256	279	F - 2	日置(中)	陶器	網狀	淡青	網状付	淡青	肥前系	18世紀後半	
256	280	F - 2	日置(中)	陶器	網狀	淡青	網状付	淡青	肥前系	18世紀後半	
256	281	F - 2	日置(中)	陶器	大壺	淡青	網状付	淡青	肥前系	18世紀後半	
256	282	F - 2	日置(中)	陶器	中壇	オリーブ灰		灰白	肥前系		
256	283	F - 2	日置(中)	磁器	網狀	淡白	一重網紋文	灰白	肥前系	17世紀後半	
256	284	F - 2	日置(中)	磁器	瓶	淡白	一重網紋文	灰白	肥前系	17世紀後半	
256	285	F - 2	日置(中)	磁器	網狀	明透灰		灰白	肥前系	17世紀後半～	
256	286	F - 2	日置(中)	陶器	中壇(丸脚子持)	淡黄	京焼風筋掛手綱	淡黄	肥前系	17世紀後半	
256	287	F - 2	日置(中)	磁器	瓶	淡白		肥前系			
256	288	F - 2	日置(中)	磁器	中壇	淡白		肥前系	17世紀後半		
256	289	F - 2	SS p - 1	陶器	網狀	褐		淡青	肥前系	17世紀後半	
256	290	F - 2		磁器	五寸瓶	暗オリーブ灰	淡白	肥前系	17世紀前半	御賜伊万里	
256	291	F - 2	施上	磁器	瓶	淡白	○印コニック印	淡白	肥前系		
256	292	F - 2		磁器	小瓶	淡白		淡白	肥前系	17世紀前半	
256	293	F - 2	施上	磁器	瓶	淡白		灰白	肥前系		
256	294	F - 2	施上	陶器	網狀	明透灰		明透灰	越前窯戸		
256	295	F - 2		陶器	大瓶(浅五形)	暗透灰		淡白	肥前系	17世紀後半～18世紀前半	
256	296	F - 2	施上		さな		淡青	淡青	肥前系		
256	297	F - 2	施上	陶器	大瓶	オリーブ灰	鐵筋	褐	肥前系		
256	298	F - 3		磁器	瓶	灰白		淡白	肥前系	18世紀前半	
256	299	F - 3		磁器	中壇	淡白		淡白	肥前系	18世紀前半	
256	300	F - 3		磁器	浅盤	淡青		淡青	肥前系	18世紀前半	
256	301	F - 2	施上	磁器	中壇	に点い・黄	に点い・黄	に点い・黄	15世紀後半		
256	302	F - 2	施上	磁器	中壇	に点い・黄	海鼠	淡青	15世紀後半		
256	303	F - 2	施上	磁器	中壇	に点い・黄	海鼠	淡青	15世紀後半		
256	304	F - 2	施上	陶器	網狀	明透灰	淡白	肥前系	15世紀後半		
256	305	F - 2	施上	陶器	網狀	灰	鐵筋	淡青	開口名		
256	306	F - 2	施上	陶器	小杯	淡白	網毛目	淡白	肥前系	17世紀後半	
256	307	F - 2	施上	陶器	小杯	淡白	網毛目	淡白	肥前系	18世紀後半	
256	308	F - 2	施上	陶器	小杯	淡白	網毛目	淡白	肥前系	18世紀後半	
256	309	G - 1	S K - 2	中世土縫跡	瓶	に点い・黄	に点い・黄	に点い・黄	15世紀後半		
256	310	G - 1	S K - 2	中世土縫跡	網狀		海鼠	淡青	15世紀後半		
256	311	G - 1	S K - 2	中世土縫跡	網狀		海鼠	淡青	15世紀後半		
256	312	G - 1	0 線	磁器	小瓶	オリーブ青	淡白	肥前系	17世紀前半		
256	313	G - 1	0 線	磁器	小瓶	明透オリーブ	淡白	肥前系	17世紀前半		
256	314	G - 1	0 線	磁器	瓶	灰	鐵筋	淡青	開口名		
256	315	G - 1	0 線	磁器	小杯	淡白	網毛目	淡白	肥前系	18世紀	
256	316	G - 1	0 線	磁器	小杯	淡白	網毛目	淡白	肥前系	18世紀	
256	317	G - 1	0 線	磁器	小杯	淡白	網毛目	淡白	肥前系	17世紀後半	
256	318	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	319	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	320	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	321	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	322	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	323	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	324	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	325	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	326	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	327	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	328	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	329	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	330	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	331	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	332	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	333	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	334	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	335	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	336	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	337	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	338	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	339	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	340	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	341	G - 1	0 線	陶器	網狀	淡白	鐵筋	淡青	開口名		
256	342	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	に点い・黄	に点い・黄	15世紀後半		
256	343	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	344	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	345	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	346	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	347	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	348	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	349	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	350	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	351	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	352	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	353	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	354	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	355	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	356	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	357	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	358	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	359	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	360	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	361	G - 2	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	362	H - 1	施上	陶器	網狀	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	363	H - 1	施上	陶器	小瓶	に点い・黄	海鼠	淡青	肥前系		
256	364	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半～中葉	
256	365	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	366	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	367	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半～中葉	
256	368	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	369	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半～中葉	
256	370	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	371	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	372	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	373	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	374	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	375	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	376	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	377	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	378	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	379	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	380	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	381	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	382	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	383	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	384	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	385	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	386	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	387	H - 1	Y n p - 1	陶器	中壇	明透灰	一重網紋文	淡青	肥前系	17世紀後半	
256	388	H - 1	Y n p - 1	陶器	網狀	暗赤	暗赤	暗赤	肥前系	17世紀後半	
256	389	H - 1	Y n p -								

b 木製品

出土地点はすべてB地点であるが、これはB地点の地質が特に水分を多く含んでいたことによる。内容としては、何らかの部材と考えられる板状の木製品が大半であった。1はB-6トレンチ第IVa層、2はB-7トレンチ第Vb層、3は同第IVa層、6~8・17はB-3トレンチ第IVa層、9~14はB-5トレンチ第IVa層、15・16はB-6トレンチ第IVa層の出土である。この他、4(B-7トレンチ第IVa層出土)は曲物の蓋と考えられ、5(B-4トレンチ第IVa層出土)には加工痕が認められなかった。

c 石製品

砥石、硯などが出土しているが、用途不明なものが多く、おもなものだけを掲載した。

砥石(18) 18は、硬質砂岩製の中砥石である。中央部分より折損し、端部も欠損している。全体的には、反りや歪みを持つ形態であり、鎌研ぎ用として用いられた砥石と考えられる。4面ともに摩耗しており、細い溝状の使用痕が幾筋かみられるほか、一ヵ所に円形の浅い窪みも認められる。

硯(19) 19は、無斑品質安山岩を用いた長方硯の一部である。海のある上方と右側が折損している。F-2トレンチ第II層出土である。

その他 20は、厚さ約3mmの板状を呈している。硯などが割離したものとも思われるが、両面ともに摩耗痕がある。何らかの道具として再利用されたものであるのか、不明とせざるを得ない。D-2トレンチ第Ia層から出土した。21(B-3トレンチ廃土出土)は輝石安山岩製、22(F-1トレンチ第IVa層出土)は軽石、23(D-1トレンチ第Vb層出土)は花崗岩製である。

d 金属製品および鍛冶関連遺物

ここでは、壺形の銅製品、鉄釘、錢貨および鍛冶関連遺物を一括する。

壺形の銅製品(24) 壺形を呈した銅製品の体部下半~底部である。厚さ2mmの銅板を成形して体部とし、径5.9mm、厚さ3mmの銅版を底部として接合させている。F-2トレンチ第III層から出土した。

鉄釘(25~28) 鉄釘と考えられるものは4点であった。錆の付着が著しいものの、形態をとどめている。いずれも断面は偏平な長方形を呈しているが、25は先端部に近づくにつれて細い三角形となっていく。また、25・27はL字に折れる頭部を遺している。25・26はF-1トレンチ第IVa層出土、27はC-1トレンチ第IVa層出土、28はB-3トレンチ廃土出土である。

用途不明の鉄製品(29) 管状であり、中央部が膨らんでいる。全体の形態がわからぬため用途不明としたが、煙管の一部などが想定されよう。

錢貨(30~35) 錢貨は合計6点を検出した。錢文を解読できるのは33以外の5点で、30~32は中世の渡来銭、34・35は近世の寛永通寶である。30は元豐通寶(北宋、1078年初鋤)で、B-2トレンチ廃土出土、31は紹聖元寶(北宋、1094年初鋤)で、G-1トレンチ第0層出土、32は政和通寶(北宋、1111年初鋤)で、C-1トレンチ第IVc層出土である。34は寛永通寶でも1636年初鋤のいわゆる「古寛永」で、35は背面に11波を有する四文錢(1768年初鋤)である。

鍛冶関連遺物(図版36・37) D-1・F-1トレンチにおいて鉄滓などが出土している。特にF-1トレンチでは、第II層から第IVa層に大量の炉壁が含まれていたほか、各炉跡から鍛造剝片や粒状滓などが検出され、鍛冶工房施設の存在が明かとなった。

4 調査のまとめ

以上、今回実施した第2次試掘確認調査の概要を述べてきた。事業地全体に対する調査面積は、わずか0.02%にすぎず、当該地における地下の状況を把握できたとは言い切れない。また、各地点に堆積している土層はおおむね黒色化したものであり、トレーンチ壁などにおいて断面観察ができなければ、遺構覆土との識別ができない場合も多かった。さらに、近世の包含層は厚いため、調査目的のひとつとした中世の包含層を検出した段階では、トレーンチ深度が2mに至った場合もあり、幅1~3mのトレーンチでは作業上の制約も大きかった。しかし、このような状況の中でも中世の遺物が発見され、当該地点における中世の「柏崎町」の痕跡を確認できたことの意義は大きい。本節では、断片的ではあるが、今回得られた資料とともに若干の考察をしてまとめにかえたい。

遺跡の時期・消長 まず、出土遺物をもとに、柏崎町遺跡の時期・消長を整理してみたい。出土遺物のうち、最も古い段階に位置づけられるのは、15世紀後半の所産と考えられる中世土師器や珠洲などの破片である。一般的に16世紀に流通する越前が今回は出土していない。中世土師器についても、16世紀に属すと思われる器形のものはなく、ほぼ15世紀後半に位置づけられるものが大半を占める。16世紀の可能性があるものとしては、中国染付や青磁などの貿易陶磁器があるが、これらは15世紀後半からの形態変化が緩やかであるため、中世土師器や珠洲などから考えればやはり15世紀に属すと考えられよう。

次の段階は、胎土目のみられる唐津の製品が出現する時期に始まる。陶磁器は、ほとんどど肥前系の製品で占められ、16世紀末以降は次第に近世的な陶磁器様相を呈するようになっていく。そして、遺物をみる限り、16世紀末から18世紀までは途絶えることなく遺跡が営まれていたと考えられる。もちろん、柏崎町遺跡は今日に至る町屋・市街地を形成していたのであるが、18世紀~現代の遺物包含層は、近年の工事によって搅乱を受け、大半は遺存していないものと思われる。

今後の課題 柏崎町遺跡は、15世紀および16世紀末以降に営まれていたことがわかった。かつて、中世の「柏崎町」は西本町に所在していたと漠然と考えられていたが、今回はその範囲を示す資料が得られたことになった。また、調査上の問題点として、中世の包含層を追求しきれなかったことがあげられる。そのため、15世紀以前の状況についてはまだ明かではなく、当該地にどの段階で開発が及んで着手されたのかなどの問題が残っている。また、「柏崎町」の盛衰を物語るには、16世紀前葉~後葉に絶が認められることを見逃すことはできない。第1節でも触れた「上杉氏制札写」は「柏崎町」の「再興」を意図したものである。この制札の内容が、遺物にみられた遺跡の消長が示す「柏崎町」の盛衰と何らかの関係があることが想定できる。

B~F地点のある「下町」側の工事掘削深度は、中世の文化層に影響を与えない計画とのことであり、保存することができた。また、G・H地点を含む「上町」については、平成11年度に本発掘調査を実施した。出土遺物は、ほぼ今回の試掘確認調査の結果と同じで、15世紀後半以降からの痕跡があり、やはり16世紀には絶がみられる。遺構も柱穴・井戸・墓坑などが検出された。「上町」・「下町」を合わせた当該地点、および「柏崎町」の理解については、今後の整理作業の中で検討していきたい。

註 1) 近世陶磁器については、安藤正美氏から丁寧なご指導を賜ったほか、大橋康二氏、村上伸之氏のご教示を得た。
2) 越中瀬戸については、宮田進一氏のご教示を得た。

III 柏崎町遺跡

—第3次確認調査—

1 調査に至る経緯

これまで、中世の「柏崎町」は漠然と西本町付近と考えられていたが、実は東本町側にもその範囲が及んでいたことが、柏崎町遺跡の第2次試掘確認調査で明らかになった（第II章）。中世の遺物は、第2次調査対象区域（東本町まちづくり事業A ブロック）東端のトレンチからも出土しているので、さらに東側のB ブロックへと遺跡範囲が拡大する可能性が生じていたのである。

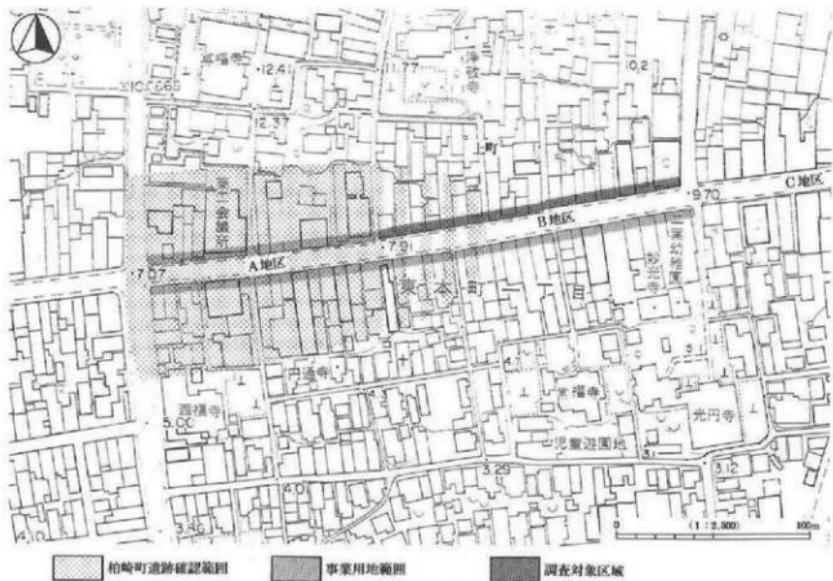
本章で報告する柏崎町遺跡第3次確認調査の発端となったのは、県道（本町通り）改良工事に伴う電線共同溝工事である。平成11年7月9日付け柏土第109号により、新潟県柏崎土木事務所長から当該工事に係る文化財保護法第57条の3第1項の規定による通知が提出され、市教委は平成11年7月28日付け教文第1079号の2で、これを県教委に通達した。当該事業の内容は、県道である既存道路の南北両側を幅4m、延長295mにわたって掘削するもので、工事面積は2,380m²である。第2次調査の結果に基づけば、「下町」と称される県道南側については、砂丘の傾斜が強く、県道自体がすでに盛土されていることから、当該事業による掘削で、遺跡が影響を受ける可能性は低いと考えられた。また、中世の「柏崎町」の範囲が確実視されるのは、当該事業地の西半部（A ブロック）であるが、「上町」と称される県道北側（A 1 ブロック）については、第2次調査の結果により本発掘調査が7月から着手されている。つまり、当該事業用地において、遺跡の存在や工事による影響が不明なのは、上町側の東半部（B ブロック、延長約170m）であり、この部分に調査対象区域を限定することができ、柏崎町遺跡の東側への広がりを把握することが、おもな目的となった。しかし、市街地が対象であるため、調査可能な地点・面積は規制されることとなつた。結果的に調査が可能とされたのはI 地点およびJ 地点であり、この2地点を対象として、平成11年8月4日に確認調査を実施することとして諸準備を行った。

なお、当該事業は、第2次調査の原因となった東本町まちづくり事業の一環にあるので、本章における地区・地点等の名称については、第II章に準じるものとした。

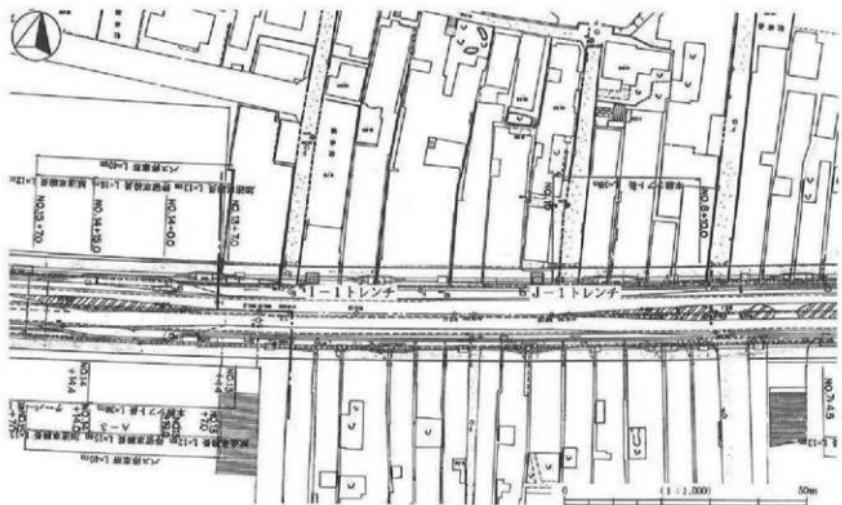
2 調査の概要

1) 調査の方法と調査面積

確認調査の実施にあたっては0.12m²のバッケ・ホウを使用し、任意のトレンチを発掘することによって調査を進めることとした。しかし、トレンチの配置等については、調査対象区域が市街地であることの制約が大きく、トレンチ発掘はI・J 地点における各1カ所に限られることとなった。いずれも人通りの多い地点であるため、調査中はもちろんのこと、トレンチの埋め戻し等には特に注意を払った。当該事業による掘削幅は4mであるが、現道沿いに既設管が存在することから南側1m分を避ける必要があったので、調査対象区域は約510m²となった。調査実面積は合計約11.7m²であり、事業用地の約0.5%となるが、実際の調査対象区域に対しては約2.3%にあたる。



第7図 柏崎町遺跡第3次確認調査調査対象区域



第8図 柏崎町遺跡第3次確認調査トレンチ配置図

2) 調査の経過とトレチの概要

今回の確認調査は、別事業に係る調査の間隙を縫って実施することとなったので、平成11年8月4日の延べ1日で終了せざるを得なかった。連日の気温が35℃を越える中で調査日当日を迎え、地層観察では日光の照り返しに悩まされながらの調査となった。現地には調査担当をはじめとする調査員計3名で赴き、重機のオペレーターと掘削する位置や埋め戻し方法などを打合せした後、ただちに調査に着手した。

I 地点 当該地点でトレチを設定した場所は仮設事務所の正面にあたり、車の乗り入れなどもあるため、現表土は非常に締まっていた。この表土は客土と思われるが、近世陶磁器が散見され、十数点の破片を表面採集することができた。I-1 トレチの表土層を20cmほど剥ぐと、焼土と木炭粒を主体とする層が検出された。この層は厚く、約60cmにも及んでおり、わずかな近世陶磁器を含んでいた。さらにその下層には褐色を呈する砂層が約30cmほど続いていたが、深度約1mの地点において、黒色砂層（第Ⅷ層）となり、中世土器片が1点のみ出土した。さらにその下層（第Ⅷ層）からも器種不明の陶器片が出土した。また、第Ⅸ層には暗褐色砂層を覆土とする落ち込みがトレチ壁面にて検出されている。

依然として調査の必要な層は下位へ続いている。トレチは安全を考慮して法面を設けて掘削していくが、第Ⅷ層上面における本トレチの幅は約1mで、深度が1.7mを越えた時点でのトレチ底部の幅は約70cmとなった。トレチが非常に深く、作業空間が狭くなつたため、調査を断念せざるを得なくなつた。そのため、第Ⅷ層以下の層や、落ち込みについても全体を把握することが不可能となつた。トレチは即埋め戻し、次の地点に移動した。

J 地点 I地点と同様に、客土と思われる表土からは比較的多くの近世陶器を採集することができた。J-1 トレチを設定して掘り下げるに至り深度20cmほどで焼土と木炭粒の層が検出された。この層は砂層を間層として2枚に区分された。さらにその下層には、層厚3~5cmの褐色・黒色を呈する砂層が互層をなしていた。さらに深度約2mでは、黒色の砂層となった。遺物は得られなかつたが、I-1 トレチの第Ⅷ層に類似していることが指摘された。

深度2m以上を掘削したが、使用したバッカ・ホウではこれ以上の掘削が不可能となつた上、トレチ壁の崩落が予想された。したがつて、この時点で調査は終了とし、埋め戻しおよび器材撤収を行つた。

3) 基本層序

今回の確認調査では、わざが2地点のトレチからの層序データに限られた。両トレチには40~50mの隔たりがあるほか、各々に形成された町家によって地下の層序が異なると考えられるので、層序の対比は難航したが、おおむね次のようにまとめることができた。

第0層は、灰色を呈する粒子の細かな砂層で、別地点からの客土と思われる。2地点とも約20cmの層厚で堆積していた。特にI地点では締まりが非常に強かつた。第0層下の第I~III層はJ地点のみで確認された層である。第I層は焼土層で、木炭粒を多く含んでいた。出土した近世陶磁器より、17世紀後半以降に形成されたと推定される。

第II層は、褐色砂層で、黒色土や木炭粒は混入していないため、砂丘砂が自然堆積したものと思われる。第III層は、黒色砂層で、木炭および焼土が多く混入している。第IV層も焼土層である。J地点における2枚の焼土層をI地点の焼土層に対比した場合、識別は困難であったが、木炭粒がやや大きめであったことや赤褐色に変色した焼土粒の状況などから、I地点の焼土層は第IV層と考えられた。第V層は、黒色土の

やや混じる暗褐色砂層である。第VI層は、褐色砂層であるが、下位で黒色土・暗褐色砂・褐色砂の各層が3~5 cmほどの層厚で堆積していたのも一括した。第II~VI層では、あまり遺物が出土しなかったので、形成時期については不明である。

第VII層は、黒色を呈する砂層である。腐植物の混入がやや認められる。I地点では15世紀と目される中世土師器片(1)が出土しているので、同時期の遺物包含層とも考えられるが、出土遺物は1点のみであるため、遺跡の中心部付近とは考えにくい。なお、J地点では、本層の上位がやや褐色砂を含んでいるが、これは漸移的な層と考えられる。そして第VIII層は、灰褐色砂層である。作業上の安全のためにJ地点では未確認の層である。遺物も出土しているが、中世の可能性があるものの、詳細は不明である。

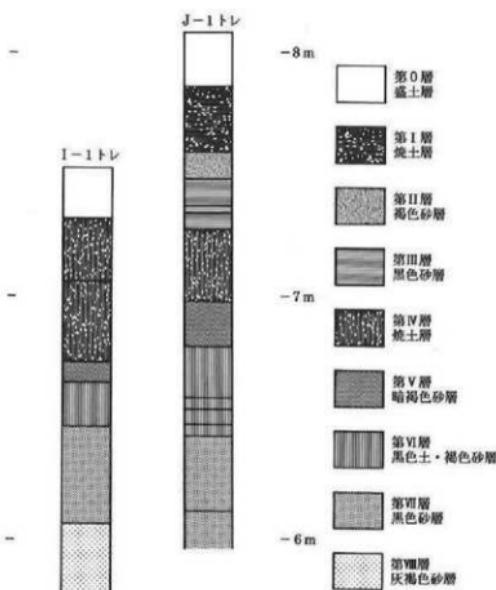
4) 出土遺物

今回の確認調査では、中世~近世の遺物を得ることができたが、掘削深度が限られたこともあって、それ以前の遺物については確認することができなかった。以下、中世および近世の遺物の概要を述べるが、写真のみを掲載し、実測図については割愛させていただいた。

中世(1・2) I地点から、中世土師器(1)および産地不明の陶器(2)が1点ずつ出土したが、J地点からは中世の遺物は出土しなかった。

1は、中世土師器のさらで、一部底部にかかる口縁部~体部片である。京都系といわれる手づくね成形の製品である。体部外面には指頭圧痕が、内面に軽い横ナデ痕がみられる。また、口縁部は内外面ともにしっかりとした横ナデ痕が施されているため、外面は軽い横線となって体部と画されている。体部の器厚は3 mmと薄いが、口縁部は5 mmとなり、端部は軽く摘み上げられる。おそらく全体的には浅身の器形であったと考えられる。色調は浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。内外面には煤が付着していることから、灯明皿として使用された可能性もある。器形からは15世紀の所産と思われる。第VII層の出土である。

2は、産地不明陶器の底部片である。外面には立上り部がわずかにみられるが、全体の器形や器種は不明である。底部外面には回転ヘラ切り痕があり、ランダムな削り痕もみられる。灰色の胎土は比較的精緻で、内面には薄い釉薬が認められる。第VIII層から出土している。



第9図 柏崎町遺跡第3次確認調査基本層序柱状模式図(1:20)

図版	番号	出土地点	層位・ 遺構等	種別	器種	部位	装飾		胎土色	製作地	製作年代	備考
							色彩	文様・技法				
40e	1	I - 1	Ⅶ層	中世土師器	皿	口縁部～体	灰白	手づくね 成形	浅黄褐色		15世紀	京都系
40e	2	I - 1	IV層	(陶器)		底部	明灰		(黄)灰	不明		
40e	3a	I - 1	IV層	近世磁器	壺	口縁部～体	灰白		(暗)灰			
40e	b	I - 1	VI層	近世磁器	壺	体部	灰白	草花文	(暗)灰			
40e	4	J - 1	I層	近世磁器	小皿	底部	灰白	菊花文	白	肥前系	17世紀後半	
40e	5	J - 1	I層	近世磁器	小皿	体部下半	灰白		白	肥前系		
40e	6	J - 1	I層	近世磁器	小皿	口縁部～底 部	灰白		灰(黄)褐 色	肥前系		
40e	7	J - 1	I層	近世磁器	中碗	体部～底部	灰白	五弁花 (コンニャ ク印判)	白	肥前系	17世紀末～ 18世紀前半	
40e	8	J - 1	I層	近世磁器	猪口	口縁部～体	灰白		白	肥前系		

第8表 柏崎町遺跡第3次確認調査出土遺物観察表

近世（3～8）ほとんどが陶磁器の破片によって占められるが、出土量はさほど多くはない。また、両地点ともに表面採集も含め、第0層からの出土が多かったが、第0層は客土であるため、ここでは省略することとした。

近世陶磁器はおもにJ-1トレンチ第I層から出土した。I-1トレンチの第IV層・第VI層出土の3(a・b)は、白色微粒を含む暗灰色を呈した精緻な胎土を有しているが、その他は肥前系に産地を求めることができる。また、肥前系と考えられる製品の中で、装飾技法などから製作時期を明らかにできる4や7からは、17世紀後半～18世紀前半を中心的な時期と考えることができる。ただし、第I層は攪拌された層であることも否定できず、ここで第I層の形成時期を特定することは避けることとした。

3 調査のまとめ

以上、今回実施した確認調査の概要を述べてきた。結果として、中世の所産と考えられる遺構は、I地点より落ち込みが1基検出されたのみで、遺物は第VII・VI層から各1点ずつ、中世もしくはその可能性のある破片資料が出土した程度である。調査面積が小さかったとはいえ、遺構・遺物とも非常に稀薄な内容といえる。Aブロックを対象とした第2次調査では、中世の遺物が一定量出土していたため、中世の「柏崎町」の存在を明らかにできた。しかし、Cブロックを対象とした第1次調査では、明確な痕跡を得ることはできなかった〔柏崎市教委1998〕。このような周辺の状況から考えると、遺構・遺物とともに稀薄なBブロックは、「中世柏崎町」の縁辺部であると推定することができよう。

当該地のような砂丘地では、深度2mにも及ぶトレンチには大きな法面が不可欠であるが、もともとの調査可能な幅や面積が小さいため、トレンチ底部付近では作業空間が非常に狭くなってしまった。今回は、このような作業上の問題により、ある程度の深度で調査を一旦中断することを余儀なくされたため、当該地点における中世の遺構やそれ以前の状況については、現段階では不明とせざるを得なくなってしまった。調査方法をも含め、中世の「柏崎町」の究明については、今後の課題とする点が多く残った。

IV 藤井城跡

—市道柏崎10-9号線・10-53号線道路改良工事に伴うA地点の確認調査—

1 確認調査に至る経緯

藤井城は、鰐石川中流域における平野部で、初めて建設が試みられた近世城郭であった。元和2年（1616）、福垣氏が上野国伊勢崎から入封後に築城が着手されたが、元和6年（1620）に三条への転封に伴い、築城途中で廃城となったと伝えられている。城郭としては時期が限定されることになるが、築城計画や家臣団の居住域等城下建設の進捗状況等は不明のままとなっている。また、これまで藤井城跡を対象とした考古学的な調査はなされたことがなく、築城途中で廃城となったとされる経緯からか、文献史学的な研究もほとんど行われていないのが実情である。

1) 第1次調査に至る経緯

確認調査実施の発端は、上藤井集落内を通る市道柏崎10-9号線および10-53号線を拡幅する改良工事である。集落内を通る道路は、屈折やT字路が多いなど城下特有の狭い道路が多く、日常生活や緊急車両の通過等にも支障をきたしていた。道路改良事業は、これらの解消と利便性を計ることを目的とし、平成10年度から数カ年にわたる事業計画としてすでに着工していたものである。

当該事業に伴う藤井城跡の取扱い協議は、平成11年度より工事が直接的に藤井城跡内に及ぶこととなつたことから、平成11年4月16日に初めて行われた。平成11年度の工事内容とは、延長およそ110mに対し、カーブを緩やかにしつつ現道幅員約3mを車道6mに拡幅し、現道面から54cmの深度まで路盤・路床の入れ替えを行うとするものである。しかし、これまで考古学的な調査がなされたことがないため情報が不足していたことから、まず現地を踏査し、確認調査の実施等について検討することとした。

現地踏査は、平成11年4月19日に実施した。当該事業予定地は、上藤井集落の中程を東西に貫く市道の東側の縁に相当する。位置的には藤井城跡とされる遺跡範囲の中に含まれるとされていた。しかし、土塁や塹跡が良好に保存され、本丸跡と伝承されている地点から南へ200mほどの距離を隔てており、周辺に城跡を示す明瞭な遺構は見当たらず、地表面の観察だけでは城内と判断することは無理であった。さらに、藤井城の範囲そのものは未確定であり、次年度以降に工事が予定されている法線内からは、底部系切りの須恵器や珠洲大甕の破片が採集され、古代・中世の遺跡が存在した可能性も高まることとなった。

現地踏査の後、平成11年4月20日付け道第18号により、柏崎市長から文化財保護法第57条の3の第1項の規定に基づく土木工事等の通知が提出された。当該通知については、平成11年4月26日付け教文第1017号の2により県教委宛に進達したが、その際の意見書には、古代・中世の遺跡が存在する可能性があるとして、確認調査により本発掘調査等の実施について要否判断をしたいとした。平成11年4月27日付け教文第118号の2により県教委から市教委宛に確認調査を実施するようにとの指示がなされた。

確認調査の時期については、予定外に生じた調査であったため調査職員の手配ができず、別事業の狹間を削くことにより6月22日に急きょ実施することとなったが、日程の調整が難しく調査期間はわずか一日間となった。

2) 第2次調査に至る経緯

第1次確認調査は日程の都合もあり、調査期間がわずか一日となった。そのため、調査対象面積に対する発掘面積は5%未満となり、検出された遺構をすべて発掘し、それぞれの所属時期を特定する作業を充分に行うまでは至らなかった。特に、古代の可能性を持つ遺構は、土師器細片が少量出土した土坑1基だけで、これに類する遺構の分布域は限定され、しかも希薄であった。また、調査で得られた出土遺物は、近世後期以降の陶磁器類が大半を占め、藤井城築城段階となる17世紀初頭の遺構・遺物は一切検出されておらず、本発掘調査の要否を判断するデータとしては充分とは言えないものであった。このため、当該調査状況等について県教委と協議を行い、調査で限定した範囲に対し、発掘調査面積を増やすとともに、遺構の所属時期等を明確にする目的で第2次確認調査を実施することとし、事業主体者等関係機関との調整を開始した。

事業主体である市・道路河川課との協議は、調査後の県教委と市教委との協議を挟みながら、調査直後の平成11年6月22日及び同月24日に行った。

第2次調査では、試掘面積を広げ、遺構を出来るだけ多く検出するとともに、それら遺構の所属時期を特定することが必要とされた。しかし、TP-5試掘坑周辺における道路の拡幅範囲は細長く、そして面積も最大40m²程度と狭いものであった。また、第2次調査の実施も直ちに可能という状況ではないこと、また新たな経費を必要とするなどの制約があった。このような実情から協議では、約2カ月ほどの工事期間の中で調査を同時併行で進めることが話し合われた。つまり、再調査が必要な工事区間は、当該工事計画のNo.9～No.10までの法線内であり、この間については現道部分を覆うコンクリート舗装の撤去までを工事で行い、その後の表土掘削から遺構の検出作業等の調査を行うこととしたものである。この方法では、交通止め等は工事期間中に限定され地元の不便が少なくなること、また現道部分の調査も可能となって調査面積が広くなること、排土処理や埋め戻し等は工事で対応可能であり、両者の共同を最大限に活用できることと経費的にも縮減が可能と判断された。

ただし、問題点として、実際の工事着工時期が地元から秋の稻刈り後とされていたことから、調査実施のタイミングがうまく取れるかという課題が残されたのである。

平成11年9月21日、実際の工事実施時期が明かとなったことから、調査の実施に伴う調整を計るために、再度道路河川課との協議が行われた。道路改良工事は、来る9月27日から側溝の伏設・路床・路盤工事に着手するとのことであった。しかし、調査職員全員が別事業の調査中であり、段取りの都合からすれば早くても10月初旬頃にしか動きそうもなかった。このため、工事は要調査範囲とは反対となる終点側から実施することとし、調査実施までの調整を行うこととした。

第2次確認調査の実施は、別事業との調整を行い、ようやく平成11年10月18日の開始として予定することができたことから、直ちに器材等の準備に入った。また、現道部分を覆うコンクリート舗装の撤去も、その前日までに行うこととして指示が出され、重機等の手配がなされた。そして予定されていた10月18日、調査員等総勢4名にて現地に到着、直ちに表土剥ぎに着手、3日間の調査が開始された。

第2次調査の発掘面積は、前回の調査で再確認が必要とされたTP-5試掘坑周辺の範囲において、延べおよそ106m²を発掘した。

なお、今回の確認調査を実施した地点は、「藤井城跡A地点」として取扱い、今後に予想される調査に備えることとした。



第10図 藤井城跡現況とA地点の位置

2 確認調査

1) 第1次確認調査

a 調査の経過と概要

平成11年6月22日、前日までに整えた調査器材を車両に積み、朝9時、係長以下5人の調査職員等が早速現地に乗り込む。現場には、埋設されたガス管や水道管の位置を確認するため依頼した柏崎市ガス水道局職員が関連書類・図面を携え、すでに待機していた。直ちに、大まかな掘削予定箇所を説明し、安全面等の打合せを行ったが、掘削に際しては特別な支障が無いことを確認した。

確認調査の体制は、調査員等5名、バックホウとダンプ各1台である。調査区域となる道路は、道路改良を必要とするだけに狭く、また人家とブロック塀などが両側に迫っているなどの事情から、今回の重機は、バックホウは小型のものとして0.2m³級を用意し、排土の仮置きをする余地が限定されているため、4tダンプ1台を確保した。

9時15分、重機オペレーターと作業手順や大まかな掘削位置等を打ち合わせ、掘削順位等について調整する。確認調査の対象範囲は、道路改良予定の延長およそ110m、工事面積771m²である。しかし、東側の工事区域は、拡張される幅が狭く、しかも拡幅箇所が植栽された垣根であるなど、掘削することが難しいため、これを除外することとしたことから、調査対象とする延長はおよそ80m、調査対象面積は約550m²となった。ただし、当該面積の中には、セメント舗装がなされた現道が含まれるため、実際に発掘可能な面積は300m²に満たなかった。

発掘順序は、排土処理等を考慮し、東側から順次西側に向かって進めることとした。掘削位置は、カーブ等で道路の拡幅が大きく、新たに用地として確保された旧宅地部分に対し、任意の位置に試掘箇所を設定し、重機により掘削、排土はダンプ等に仮置きした。掘削に際しては、5~10cmほどの厚さで徐々に掘り下げ、遺物の出土状況を確認しつつ遺構確認面の把握に務め、遺構と層序を図面類や写真により記録した。調査期間はわずか一日間であったため、調査できた試掘坑（略号：TP）は合計でようやく5カ所となった。午前中に2カ所、午後は3カ所を調査した。最も東側の試掘坑をTP-1試掘坑とし、順次西側へTP-2~4試掘坑の調査を行った。最も西側に位置するTP-4試掘坑は、海砂などが旧田水面に盛土されており、湧水による海砂の崩落が激しいため、掘削を断念した。このため、TP-5試掘坑は、TP-4試掘坑の北東側には接する位置に改めて発掘したものである。

今回の調査で発掘した試掘坑5箇所の総面積は約26m²、調査対象面積に対する発掘面積の比率はおよそ4.7%となった。

b 試掘坑と層序の概要

本項では、各試掘坑の概要と層序を概観するが、層序は各試掘坑別に色調等を略述し、総括的な層序については後述することとする。

TP-1試掘坑 調査対象とした調査区内では最も東側に位置する。現道はおおむね東西に走り、そこに北側からの道がT字路として交わる。当該試掘坑の位置は、北からの道の境界から約1mほど西に離れている。試掘坑の掘削深度は、遺構確認面として認識した第5層の黄褐色粘土層までのおよそ60cmである。遺構確認面までの層序は、大きく4層に分かれる。現表土層となる第1層は暗褐色土、第2層目は

暗褐色粘土の再堆積層であり、近年もしくは比較的新しい時期に行われた整地等の盛土層と理解した。このため、第3層の褐色粘土を旧表土層、第4層の茶褐色粘土を包含層に解釈した。しかし、後述するように、第4層は自然堆積にしてはかなり汚れており、近世後期以降の整地層の可能性が高い。

遺構は試掘坑の東端に南北に方位をとる溝状の落ち込みが検出されている。掘り込み面は、第4層を切っていることは確実であるが、覆土上層については第3層に類似するため判断が難しかった。調査後の検討からすれば、第3層が溝の上位を覆っていた可能性が高いようである。溝内の覆土は上層位を第3層がやや還元化したような灰褐色粘土が覆い、下層には青灰色砂質粘土が堆積していた。このため、水が流れていた可能性が高く、南北道に沿っていることから、人為的な水路の可能性も否定できない。時期については、道路等の区画に沿うことから藤井城築城段階以降とすることはできても、出土遺物が無いため特定できない。

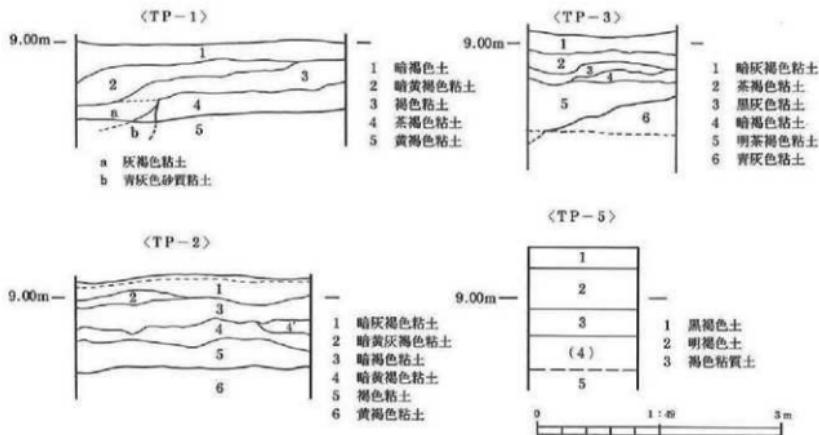
遺物については、近代・現代の磁器小片が2点出土したのみである。

TP-2 試掘坑 TP-1 試掘坑の西10mほどのところに位置し、敷地としては同じ区画内にある。遺構確認面は、深度約75cm、TP-1とほぼおなじ標高で検出された黄褐色粘土層（第6層）とした。層序は、5層に分けられる。上層から便宜的に説明を加えると、第1層：暗灰褐色粘土、第2層：暗灰褐色粘土、第3層：暗褐色粘土；第4層：暗褐色粘土、第5層：褐色粘土となる。地山の再堆積層が第2層と第4層に上下2枚存在し、暗色系の粘土層と互層をなしていた。下部の地山再堆積層は東西両側の試掘坑では検出されていないものであり、これを除けばTP-1・2試掘坑の層序とほぼ対比できる。

遺構確認面とした第5層上面からは遺構を確認できなかったが、第2層から掘り込まれる黄褐色粘土を覆土とする土坑1基を検出している。

遺物はほとんど無く、わずかに伊万里焼底部の小片1点が遺構外から出土したのみである。

TP-3 試掘坑 TP-2 試掘坑の西およそ20mほどの距離に設定した。TP-1・2とは現道を隔て



第11図 藤井城跡A地点試掘坑層序

た南側の区画に位置することになる。掘削深度は約80cm、最下層には青灰色粘土層（第6層）があり、この上面を遺構確認面に認定したが、上面は西側に向かってかなり傾斜を強くするものとなっている。第6層の上位には第5層の明茶褐色粘土が堆積するが、この層の上面から水平堆積となる。この第5層については、第6層が還元層であり、第5層はその酸化層の可能性も否定できない。

第1層から第4層までの各層の色調等は、第1層：暗灰褐色粘土、第2層：茶褐色粘土、第3層：黒灰色粘土、第4層：暗褐色粘土である。第3・4層は、TP-2試掘坑の第3層におおむね相当することから、TP-1・2各層序とほぼ対比できる。

本試掘坑では遺構も遺物も検出されなかった。また、遺物は時期不詳の陶器が1点出土したのみである。

なお、第6層が西側に傾斜した状況で検出されているが、北側へも傾斜していた可能性が高く、第5層の還元層でないとすれば、旧地形等の考察に示唆的である。

TP-4試掘坑 最も西側に設定した試掘坑であり、TP-3試掘坑の南西およそ27m、南北道路を隔てた西側に位置する。当該試掘坑は、やや小高くなる城跡範囲の縁辺に近いことから、堀跡の境界あるいは堀込み位置を確認する意図で発掘した。深度およそ80cmほどのところまで掘削し、青灰色粘土層上面を確認した。しかし、遺物は結局検出されず、また堀跡等の兆候も認められないまま、結局水田に盛土した海砂が湧水のため流出し、試掘坑の壁が崩落したため、調査を断念したものである。

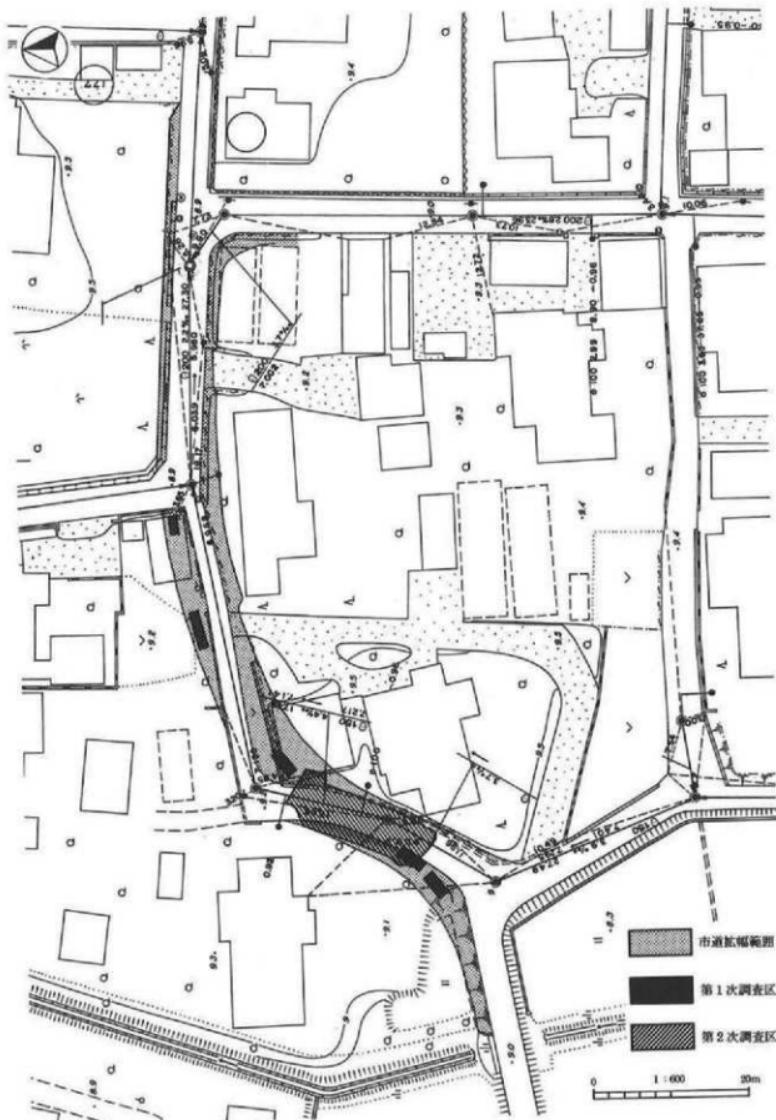
TP-5試掘坑 TP-4試掘坑のやや北東側に設定した。深度およそ50cmで暗黄褐色粘土層に達した。遺構確認面までの層序は、3枚に区分されるが、これまでの試掘坑とはかなり趣を変え、粘土層というより土質に変化していた。各層の色調等は、第1層：黒褐色土、第2層：明褐色土、第3層：褐色粘質土である。なお、後述するように、第1次調査で遺構確認面とした土層は、第2次調査では暗色を呈して汚れているとして、およそ20cmほどを振り下している。この層は、結局茶褐色系の人為的な層であり、遺構確認面は第2次調査検出の黄褐色粘土層とした。

第4層上面からは、6基のピット・土坑が検出された。遺構の可否を判断し、時期を特定する目的で3基を半截したが、これらのうち1基の土坑から古代の土師器破片が2点出土した。その他については、遺物が無く時期を特定できなかった。

2) 第2次確認調査の概要

平成11年10月18日の午前9時、現地に到着。天候は曇りで後晴れとなる。耕土の搬出等の段取りを、現地で工事を行っている工事関係者と協議し、南西側から順次掘削し、適宜北側の道路用地内に仮置きすることとした。現道を覆うコンクリート舗装はすでに撤去されており、路盤入れ替えのための掘削に合わせ、表土の除去作業を行う。掘削開始箇所は、第1次調査TP-5試掘坑付近でしたが、昨日の豪雨によって浸透した雨水が滲み出し、泥土化した調査区の南西端部分は遺構確認等の調査範囲から除外せざるを得なくなった。掘削深度は、TP-5試掘坑の結果から標高8.8mを想定したが、遺構確認面上の汚れがひどいことから、その深度を下げ、概ね8.6mとなった。掘削幅はおよそ6m、中央に幅1mの排水管理設に伴い搅乱された掘削溝が検出された。

遺構分布は、TP-5試掘坑の状況で想定されていたとおりピット等が検出されたが、大型土坑や溝類が意外に多いことが判明した。本日は、おおよそ10mほどの延長を表土剥ぎし、遺構確認を終えたが、その北端部分には堀跡を思わせる幅広で規模が大きな落ち込みを検出した。また、その南辺に沿って互いに平行する2本の小溝も検出されたが、中間が固く締まっていたことから道路跡の可能性が生じた。遺構の



第12図 藤井城跡A地点の調査区

主軸等の方向性は、おおむね南北指向であり、溝は東西に走る。

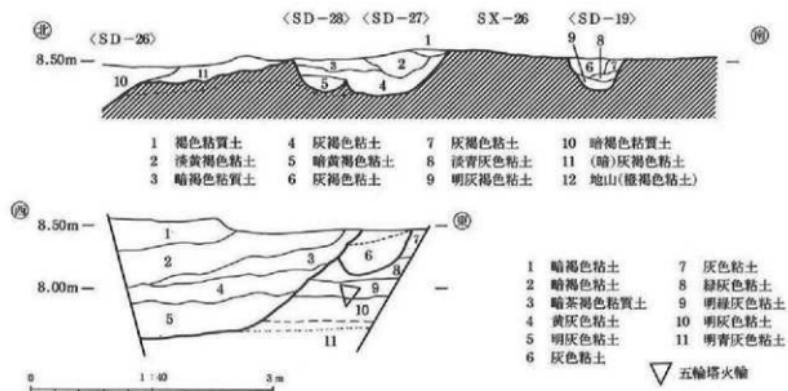
検出遺構の調査では、ピット関係の発掘と検出面で得られた遺構出土遺物の把握を行った。その結果、S Kp-13ピット内から平安時代中期の須恵器無台杯底部破片がやや摩滅した状態で1点出土したほかは、S K-12土坑やS D-22・23の各溝では18世紀代以降の伊万里焼を主体とした陶磁器類が出土した。このほかの遺物でも、17世紀後半代の可能性を含むものがわずかに認められるが、ほとんどが18世紀以降19世紀代と見られるもので占められている。

19日は、調査区北側で検出された壠状の大型落ち込みの追跡を兼ね、さらに北側へ表土剥ぎを拡張した。当初、東西に延びる壠の可能性を見込んでいたが、東側への延長はなく、屈曲もしくは南北のプランを想定せざるを得なくなる。

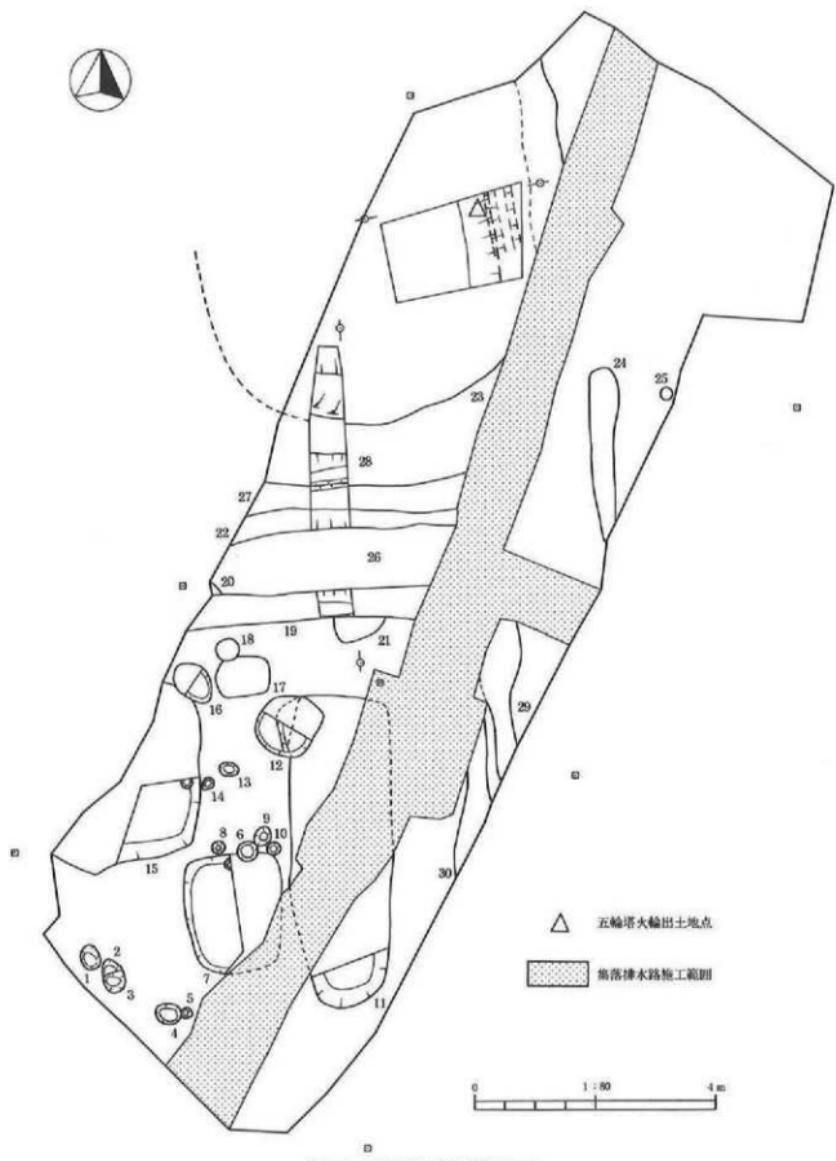
表土剥ぎは、耕土の仮置き場とした北側の道路用地が溝となって拡張が困難となったが、ピット・土坑類の分布も途切れたことから、延長18m余りのところで打ち切りとした。このため、壠状落ち込みの東側の境界を見つけることができなくなってしまったが、その後のプラン確認と町割りの道路状況等の検討から、南北方向と断定した。当該壠状落ち込みについて、重機により一部試掘を試みたところ、深度は確認面下約80cm、地表面から計測すれば深度およそ1.2~1.3mであった。幅は不明としても、深度が意外に浅いことから、壠として良いのかは難しいと感じられた。当該落ち込みからの出土遺物は、確認面で18世紀前後のものが認められたが、この深掘りに際して出土した遺物は、17世紀代のものは皆無であり、代わって古代の土師器小片が出土した。

小溝遺構に関しては、互いに平行する側溝と考えられるS D-19とS D-22があり、両者に挟まれたS X-26は、道路跡の可能性がかなり高い。しかし、その東側延長をS D-24が遮ることから、南側に折れ曲がるか、あるいはT字路等となる可能性が高くなかった。この点については明日確認することとした。

土坑等の調査では、S K-7・12・15・16の4基について半蔵を試みた。それぞれの土坑は、確認面からの深度が10~15cmと浅く、やや深いS K-15でも20cmほどである。遺物の出土は少なく、S K-12・15で近世後期以降の陶磁器が少量出土した以外、S K-7・16では皆無であった。



第13図 第2次調査断面図



第14図 藤井城跡A地点遺構平面図

ところで、SK-15は、第1次調査で土師器が出土し、古代の所産である可能性が高いとされていた土坑である。今回の調査では、かなり大型のプランを持つ土坑と判明したが、新たな出土遺物の検出により近世後期以降の所産であることを確認することができた。

第3日目となる10月20日は、暖かく、良く晴れ上がった。しかし、明日から天候が大きく崩れるとの予報があり、本日中に調査を終了できるよう急ぐこととなった。

まず、昨日の調査結果の検討により、SX-26の東西道に接続する南北道の確認のため、側溝の検出作業から開始した。その結果、SD-29・30の2本の小溝を検出し、南側に90度折れ曲がる道路の存在を確認した。また、堀としているSD-26についても、昨日のトレンチを改めて重機で掘り下げる、部分的な拡張を試みた。発掘中において、SD-26の範囲外から五輪塔の火輪が逆位の状態で出土した。再度の断面観察によれば、遺構確認面のさらに50cmほど下位に新たな整地層が確認され、火輪はその中に含まれていたものであった。SD-26は、この整地層を埋込むことが明かであり、これが築城段階の整地層を示す可能性が生じるとともに、築城以前に中世の墓地が存在した可能性を示唆するものとなった。

土坑類の調査では、SK-11・17の一部を発掘した。SK-17は深度5cmと浅く、遺物なし。SK-11は長辺3m、幅1.8mの細長い土坑で、深度は60cmほど、近世後期以降の陶磁器類が多く出土した。

これら遺構等の調査と並行して、平面図や断面図の実測等記録作業を行い、これら図面類や記録写真的撮影を行ったことにより、3日間の調査を終了した。

3) 遺構と出土遺物

前後2次にわたる調査で得られた遺物の出土量は、一般的な平箱に換算しても半分に満たない程度である。出土遺物の種別と時代は、古代では平安時代中期の土師器・須恵器、室町～戦国期と考えられる五輪塔、近世は後期以降の陶磁器類などで、陶磁器類では近現代のものが多く含まれる。

本項では、第2次調査で出土した遺物を中心に概説的に述べることとし、第1次調査や表探で得られた遺物については一部について補足的に触ることとしたい。

古代（第15図1・2）

当該期の遺物としては須恵器・土師器の種別がある。出土量は少なく小片が多く、大半は圓化には至らなかった。出土地点としては、現地踏査段階で、上藤井集落南辺において採集された須恵器底部糸切り杯破片（1）のはかは遺構内から出土している。

圓化を行った須恵器（1）は、前述したように、上藤井集落の南辺の水田内から採集された無台杯の底部破片である。底部の切り離しは回転糸切りでなされ、外外面に數カ所火襷の痕跡をとどめる。底径はおよそ6cmである。時期はにわかに決しがたいが、9世紀前半頃の可能性が高い。圓化には至らなかったが、須恵器にはこのほかにSKp-13から出土した無台杯底部小破片1点がある（図版49a-a）。底部の切り離しはハラ切りであり、小泊糸須恵器の可能性が高い。小片のため器形等の詳細が不明であり、時期の特定は難しいが、おおむね9世紀後半頃の所産としておきたい。なお、SKp-13の所属時期については、須恵器の出土から古代の柱穴である可能性を高くするが、後述する土師器が全て近世陶磁器との共伴関係にあり、にわかに断定できない。

土師器も圓化に至った破片は第1次調査で出土したSK-15の1点のはか、SK-11、SD-23（図版49a-h・i）からも小片が出土している。これら土師器は、近世陶磁器と遺構内で共伴しておらず、混入と判断できるものである。したがって、前述の須恵器とともに、当該地における古代遺跡の存在を示唆す

ることになるが、古代の遺構は特定できない。土師器の器種は、2が長甕の胴部破片、そのほかには碗や小甕と考えられるものが確認できる。

中世～近世初期（第15図3・7・図版50b-j）

当該期の資料は極めて少ない。図化した3は、上藤井集落の南辺水田内で採取した珠洲甕破片である。吉岡編年第III期前後の所産と考えられ、13世紀後半前後の年代観が想定される資料である。7は藤井城築城段階と推定される整地層にめりこんだ状態で出土した五輪塔の火輪である。下部の法量は42cm×41cmで若干のゆがみがある。高さは32cmを計る。石材は、小砂礫を含む凝灰岩で、色調は明るい黄褐色を呈する。上面の空風輪との接合部は平らでソケット状の差し込み孔はない。底面は外縁が反るように整形され、四隅を若干強調している。時期の特定はできないが、築城段階の整地層出土が正しければ、元和2年（1616）以前の所産となり、近接地に墓地もしくは墓が造営されていたことを示唆することになる。

近世初期、つまり藤井城築城の時期に相当する遺物はほとんど出土しなかったが、唐津I～II期（16世紀末～17世紀前半）と考えられる皿小片1点（図版50b-j）が包含層から出土している。

近世中～後期（第15図4～6・8～12・図版49～50）

第2次調査出土遺物の大半が、当該期に属する。遺構内出土遺物を中心に述べる。

S K-11土坑（4・図版49-e-k） 肥前系の陶磁器の小片が10片ほど出土した。j～kは呉器手の京焼き風の陶器である。kの底部は腰部分よりかなり薄く仕上げられており、18世紀前半の所産と考えられる。e～iは磁器である。染付け底部破片eは、外面に3本の平行線が引かれる。高台が高く、端部がU字状を呈することにより、17世紀後半の所産とされる。iは内面見込みに蛇ノ目釉剥がが施される皿の破片で、高台部が角張ることなどにより17世紀後半頃と考えられる。このほかの陶磁器については、細片であるが、時期的には17世紀後半～18世紀前半の範囲に収まりそうである。

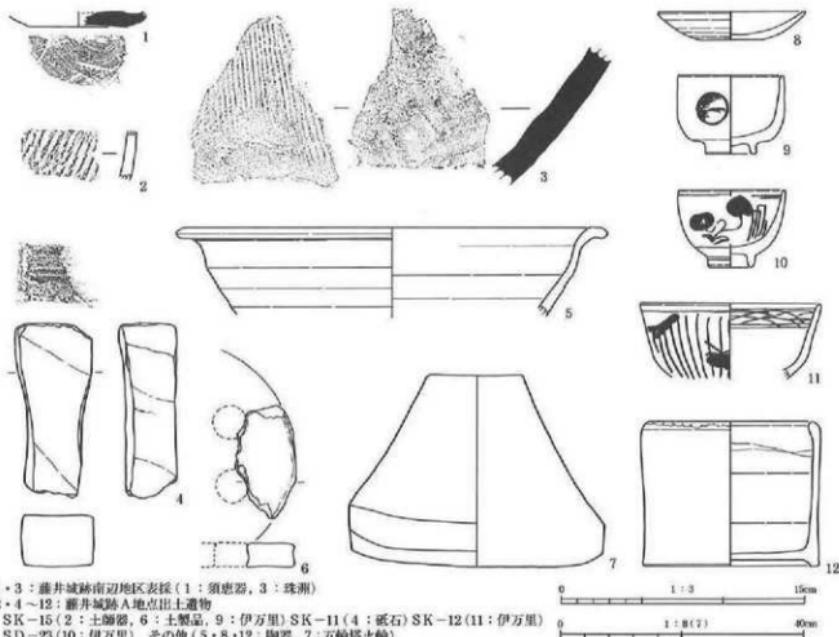
また、石製品としては、砥石（4）が1点出土した。下部は欠損し全長は不明だが、現存長は10.7cm、上端部にある最大幅は4.7cm、最大厚3.3cmを計る。色調は灰白色（7.5Y 7/1）を呈する。石材は緑色凝灰岩で、バミス状の軟質粒子や黒くじんだような不定形粒子が多く含まれている。産地は不明。

S K-12土坑（11・図版49-l） 11の磁器碗は、形骸化した菊に蝶のような文様が描かれている。胎土は灰白色（5Y 2/1）、釉は明オリーブ灰色（5G Y 7/1）、染め付けは暗緑灰色（5G 4/1）で描かれている。時期的には18世紀後半頃に比定されるが、本土坑はS K-11を切る新しい遺構であり、矛盾しない。口径10.8cm。lは、須恵器質の陶器で、体部下半は内外面とも鉄釉がかけられる。内底面に向かって胎色のガラス釉が一筋流れている。生産地は明確でなく、肥前系ではない可能性が高い。

S K-15土坑（6・9） 9は、三単位の丸文が施されたやや筒形を呈した小碗である。口径6.4cm、高台径3.1cm、器高4.8cmを計る。丸文の円は、3カ所とも直径が同じ1.9cmであり、印判による施文と考えられる。外面のガラス釉は白濁して透明度を失っており、二次的過熱を受けたことがうかがわれる。時期的には18世紀代でも前半頃に比定できそうである。6は、直径14cm、厚さ1.4cm、焼成良好の土製円盤で、6個ほどの透かしが穿たれている。かなり強い火熱を受けたことがうかがわれるが、七輪の部品となる「さな」である。

S D-22溝（図版49b-m） 口縁部の小破片である。外面は黄灰色、内面は銅緑釉にかけ分けられる。見込み部分は欠損しているが、蛇ノ目釉剥がが施されるもので、内野山西窯製の皿である。時期は、17世紀後半～18世紀後半に比定される。

S D-27溝（図版49b-n） 内面は無釉、外面には乳白色でやや緑色を含む厚い釉がかけられている。



第15図 藤井城跡A地点出土遺物

器種や生産地は不明である。

S D-23壺状遺構（10・図版50a-a~g）肥前系の陶磁器のほか、生産地不明の陶器、および土師器が出土している。土師器は、覆土下部からの出土である。近世の遺物は、覆土下部からは出土せず、上層部から検出されたものである。

10は、肥前系の小鉢である。文様は草花の横に源氏香文が描かれる。時期的には18世紀後半以降の所産と考えられる。口径6.6cm、高台径4.8cm、器高2.5cm。c~fは肥前系の磁器。d~eは内面に二重線による正格子文が施される皿、fは外面に同様の文様が施される碗であり、ともに18世紀後半頃の時期に比定される。aは、明灰色の釉が内外面に施され、全面に貫入がはいる碗である。関西系と思われるが生産地は不明。bは広口壺で、外面に暗褐色の釉、内面は鉄釉が施される。gは外面に白色の化粧土を施したまま焼かれた陶器で、器種は鉢と考えられる。胎土も白色で、内面は無釉である。两者とも産地は不明。

包含層等出土遺物（5・8・12・図版50b-j~o）5はオリーブ黄色釉を内外面に施した鉢で、口径は26.6cm。産地不明。8は、内面が浅黄橙色の京焼き風の釉がかけられるが外面の大半は無釉の皿。口径9.0cm、底径3.8cm、器高1.7cm。12は煙草盆に用いられる灰吹き。素地の色調は灰黄色、外面から口縁内面にかけて灰白色釉が施される。口唇部は、キセルを打ち付けるため割離が著しい。口径10.0cm、底径10.6cm、器高8.8cm。mは肥前系青磁染付け、内面見込みに手描五弁花が施される。18世紀後半頃。nは、底部側縁に高い高台が付く肥前系鉢。18世紀代の所産か。kも肥前系の碗で18世紀後半。図版50a-dは棒状の土製品。このほかに、近代以降の陶磁器があり、瀬戸系が混じる。

3 調査の成果とまとめ

1) 藤井城の沿革と現状

藤井は、柏崎市街地の東部・北鯖石地区に属す柏崎市大字藤井のことであり、集落（町内会）としては、上藤井、北部の下藤井及び西部の南田塚の三地区に分かれている。

当該地域の昭和30・40年代に完了した2級河川・鯖石川河川改修と圃場整備は、地域の災害防止と農業・農村の近代化に大きく貢献するところであったが、一方、長い歴史の中で鯖石川に育まれてきた流域の景観をも一変させてしまった。ついで、高度成長時代には、特に西部において、一挙に工場・住宅地化と市街地との一体化を進めて、一面の水田地帯の景観を大きく変えた。

こうした変化はほんの少し前のことであったが、今では地元にさえ、その前の風景をいきいきと語ることのできる者は多くない。まして、ここ上藤井に城のあった風景は、江戸時代の城郭特有の白壁の矢倉、高石垣や水堀等がいっさい残っていないので、城城さえ痕として伝わっていないのが現状であった。

今回、団らぬも市道拡幅工事のために、藤井城として周知された遺跡範囲の中で発掘調査することになった。しかし、なにぶんにも部分的かつ小面積の発掘であり、位置的にも端辺部であり、そこで明らかにされた成果は決して少なくはないが、それにも関わらず、藤井城全体からみれば（肝心の、どんな城だったかという質問に対して、答えられないほど）僅かなものと言わざるを得ない。

そこで、本項では、発掘調査の成果に基づく考古学的手法を離れて、文書資料や地名・伝承や更正図などの様々な史料をも利用して藤井の歴史を考え、また、多少の推察を加えてでも、今現在の試案として、藤井城（一名、豊岡城とも伝わる。）の平面プランを示してみたいと思う。なによりも、地元の方々に今後とも関心を持ち続けてもらうために。

a 古代・中世の藤井

地域の歴史的概観については、既に第I章で触れているところだが、ここでは、少ない史料の制約の中で城の復元作業が少しでも有利になるよう、城のあった頃の地域全体の景観はもちろん、ここに城が造られた背景などもできるだけ整理し理解しておきたいと思う。そこで、重複を恐れず、地域の関連資料を紹介しながら、藤井の歴史的沿革を整理しておきたい。

しかし、古代の柏崎平野（ただし、現柏崎市西部の米山・上米山地区は近代まで頸城郡に、小国町は中世まで魚沼郡に属していた。）については、柏崎市街地の南部・内陸部で鯖石川・鶴川両河川の中下流域にのみ私領たる3荘園が立莊していたこと¹⁰、大部分は国衙領及び国衙主導の別所（保・郷など）に占められていたと考えられ、特に柏崎町から東北の別山川流域は集中的に保・郷が設置されている（その先の島崎川流域も加えると、もっと）特異な地域であるなど、を整理しておくに止める。

ところで、藤井は何時ごろ成立した（これは、弥生時代から人が住んでいたとかの意味ではなく、地名にしろ聚落名にしろ、藤井の名が何時できたのかという意味において）ものか。資料で遡られるのは、後述するように中世までである。残念ではあるが、文書資料で中世まで遡られる例の方がむしろ珍しい。

そうした中で、「中世の藤井」の名の見える資料が2点だけ存在するので、以下に紹介したい。

鶴川莊 1点目は、岩船神社（村上市）所蔵の額口銘である。

（刻銘） 敬白 越後国菊羽郡鶴川莊藤井卒塔婆領八幡宮 檜那道吉右近五郎

嘉吉二年十一月六日

(岩船神社資料／柏崎市史資料集 古代中世篇—第74号)

この鰐口、元々は、嘉吉2年(1442)、現・柏崎市大字藤井(の内、下藤井)の八幡神社に奉納された物であることは、刻銘のとおりである。藤井は、この「鶴河莊藤井」の銘によって、鶴川莊に属することが解る。そして、これが、その唯一の資料でもある。

この鰐口の奉納者については、残念ながら在地の者と決めつける材料を持たない。しかし、少なくとも、当時の藤井には、鰐口を受けられるほどの(つまり、石祠だけでなく、本殿以上の建築物を備した)神社があったことが解る。そうした施設は、当該期の単なる農山村にはそう在るものではないはずで、何らかの有力支配層が近辺に存在した可能性を想像できるだろう。

また、銘中の「卒塔婆領」は「寺領」との意の当該期宗教上特有の表現であるが、ともかく、「寺領の八幡社」とは、神仏習合時代ならではのことであり、この表現によって、この神社に別当寺が存在することが知られる。すなわち、江戸時代初期の天和檢地帳には善福寺³が、また、同後期の松平家・白川藩の成した風土記(以下、「白川風土記」という。)には同寺の本寺となる普光寺³が、当該社の別当職として記録されている。

藤井堰 2点目は、水田開発に伴う下記の資料である。ここに見える「藤井堰」とは、俗に江戸時代以降「川下1万余石」と称された二級河川鰐石川の堰のことであり、今でも柏崎地方最大かつ最重要な農業用取水堰である。もちろん、堰は何度も造り直され、また、それに伴い設置場所も変わっていて、現在はこの最初の設置場所・藤井から2kmほど上流の平井地内に在るが、今でも、この由縁で藤井堰の名で呼ばれていている。

さて、この「掟」の発給者の「直江」とは、上杉家執政の直江兼続であり、この条文は、写しではあるが、地元用水組合の最重要書類として、今に伝えられてきたものである。

藤井堰掟

- 一 田畠并屋敷共ニ一切五年^生やすみたるべき事、
一 此水下へ罷出もの儀、前々^井其所之田地もちつけ、ふ^{請代}たいの」
百姓等におひいてハ、きよよふ」いたすべからざる事、
一 彼地おこし申におひては、作食^用当年りなしにかし可申之事、

已上

右此旨相守彼地急度可致」開作者也、仍如件、

文禄四年二月九日 直江(黒印影) • 印分「榮福」

(両田尻 酒井家文書／柏崎市史資料集 古代中世篇—第600号)

この掟の発せられた文禄4年(1595)とは、上杉家の越後国治世の最末期であり、また、「天下」を統一した豊臣秀吉によって戦渦が東アジアに広げられていた時期である。上杉家も朝鮮へ出兵したが、おしなべて各大名の領国状況が最も悪化していた時期でもある。

この掟の内容は、今後5年間の年貢免除、「ふたいの百姓等」は除外する条件付きながら、受益地へ移転し新田を興す者に対して種穀を始め食糧まで(その上、当年分無利子で)貸し付ける特典を与えている。上杉家も領内の状況を踏まえて、新規の年貢賦課対象となる自作農民の形成を促している様子が窺える。ところで、この堰に関して、もう一人、史上有名な人物の手になる条文がある。次に紹介する。

藤井堰之事

- 一 川せぎ普請人脚等之儀、」最前直江如被申付、在々申」談せぎ可申事、
- 一 せぎく柴等之儀も、是又可為」如最前之事、
- 一 近年彼せぎ下在々百姓等」不可作出之事、

已上

右此旨急度可申付者也、

慶長三年卯月十五日

治部少（花押影）

（同酒井文書／同一第603号）

この条書の署名者「治部少」とは、豊臣家五奉行の石田光成その人である。彼がこの時期に越後国に下向していた理由とは、この慶長3年（1598）正月、太閤秀吉から上杉景勝に対して会津移封の命が下った後始末、すなわち、上杉家からの国受取り（及び御領所や新領主・堀家に渡すまで）の様々な事務処理のためであろう。

内容的には、全て「最前直江如被申付」とおり「急度可申付者也」というものであり、この条書もまた、「藤井堰」に係る「掟」として、地元に大切に伝えられてきたものである。

中世・藤井村の領主 こうした断片的な資料だけでは、長い中世について何も解らないと大差がない。そこで最後に、江戸時代成立の史料ではあるが、そこに記録されている中世の様子もみておきたい。主に領主の記録である。

「白川風土記」の藤井村の項には、次のように記録されている。

貞治年中越後一統上杉家ノ領トナル春日山付ノ本領數世を経テ堀久太郎松平上総介忠輝卿

福垣平右衛門松平伊豫守松平越後守御料所等ヲ経テ正徳元年ヨリ當領トナル

次いで、近辺の村々も見ておくと、

（中田村） 貞治ノ頃越後ノ一統上杉左近将監憲栄ノ領春日山付ノ本領ナリ夫ヨリ數世ヲ経テ
堀久太郎領トナル（以下略）

（御 村） 貞治ノ頃越後一統上杉左近将監憲栄ノ領トナル春日山付ノ本領夫ヨリ數世ヲヘテ
堀久太郎（以下略）

（土合村） 貞治年間上杉家ノ領トナリヨリ當領トナルマテ領主ノ次第御村ニ同シ

と同じ経過となっている。念のため、これは越後一国が上杉領という漠然とした意味からではないことは、同じ近辺の畔屋村・与三村・矢田村の領主の次第に、「貞治年中上杉家領ナリヨリ幕下北條ノ城主毛利



中央が本丸、土塁は一部欠落するも右に続いている。手前水田は外堀跡、本丸左下の水田は内堀跡で、その左側の木立部が北曲輪である。なお、石垣は、こうした主要部にも一切使用されていない。

写真1 藤井城の主要部

丹後守領ナリシ家断絶ノ後春日山本領トナリ（以下略）」と記録されていることで、理解できよう。

これらの中世の記録については、既にその記憶が定かでない頃の成立であるから、記載されている全部を信じられないのは当然である。例えば、「貞治ノ頃越後ノ一統上杉左近将監憲栄ノ頃」には「春日山付ノ本領」という現象は有り得ない筈である。しかし、白川風土記は、編纂のために在地を廻り、また村々の提出記録を吟味している様子が窺われ、少なくとも、中世の記載についても「当時の人が想っていた」ことが正確に記録してあると（見方による立つ限り）信頼して良い史料といえよう。それでは、鎌倉時代からの中世をとおした領主の沿革など、まったく不明という他はない。

ただ、先に見たとおり、文禄年間の「藤井堰堤」が直江兼続から発せられていることに注目すれば、少なくとも、堰堤の築造時には、堰堤の築造地から下流（受益地）は、全て上杉家御領所だったようと思われる。当時の上杉家では、近世大名の支配と被官関係とは程遠く、上杉家やその執政といえども他領の年貢免除などを行う権限はないし、そもそも他領のために大工事を起こすことも考え難いから。

したがって、藤井村が何時から上杉家御領所だったかはともかく、少なくとも、右岸側の畔屋村以下の記録に見られるように北条家が越後国内の本領を没収された後は、藤井村を含む鰐石川の両岸とともに御領所となっていたものと考えたい。

ともかく、慶長3年（1598）、上杉家は国替で会津へ去了った。豊臣家からの指示は、中間・小者であろうと奉公人は全て召し連れていく（一方、年貢負担者は一切残置する）ことであった。武士とその他在地階級の厳格な切り離しが行われたものである。越後の国における、中世の終焉である。

b 藤井城のあった時代

① 藤井藩のできるまで（領主の変遷）

ここでは、藤井城（豊岡城）の築城の時代背景と何よりもすぐに廃城される事情を理解したいので、近世初期（織豊時代～江戸時代初期）の領主の変遷及び理由を概観しておきたい。

藤井村等の領主については、先に見た白川風土記に村々毎に沿革が記録されているが、ここではそれらを要領よく纏めてある「柏崎刈羽の歴代領主変遷表」³⁾を参考にして記述していく。

慶長3年（1598）、越後国は豊臣系大名の堀久太郎秀治に与えられた。堀氏は、国内の要所に一族と与力大名を配して支配を行い、また、一旦入城した春日山の山城たる不便さを嫌って、直江津に福島城の造営を開始した。新城の完成を待たない秀治の死亡もあったが、相続も福島城への移転も無事に終わり、将に新しい時代の到来に見えた頃、一族重臣の確執から御家騒動を引き起こし、改易されてしまった。

なお、後に椎谷に立藩する堀家は、その一族である。

代わって、慶長15年（1610）、越後国は、信濃国川中島四郡を領する松平忠輝に与えられた。松平家は、信濃国川中島四郡と合わせた大領（55万石と伝えられる。）といい、忠輝自身の出自（徳川家康の六男で將軍・秀忠の弟、奥方は伊達正宗の娘）と合わせ、有数の大名家となった。4年後には高田城の築城を開始し、同年冬に勃發した豊臣家との戦（大阪冬の陣）までに移ったと伝えられ、これ以後は高田藩と呼ばれる。翌元和元年（1615）冬の豊臣家の滅亡によって職も絶え、安泰となった徳川幕府の支配下において、その親藩たる松平家の支配が續くと思われた。

ところが、こうした有数の大名・高田藩は、長くは続かなかった。松平忠輝が謀叛の疑いを掛けられ、高田藩領は、全て没収されてしまった。これ以降、越後国は、幕府御領所や中小大名領に分割され、二度と一国規模で統治されることがなかった。これによって、越後国では、交錯した大名領等を越えた交通路や治水など、例えば、信濃川の分水工事は幕府時代から申請に及んでいたが採択されなかつたと伝えられ



堀は、中央付近で折が設けられている。左が主要部（現況畠）で、東側から望む。

写真2 内堀跡の水田

るよう、一国規模の大局に基づいた事業も治世も行われ難くなつた、のは事実であろう。現在に通じる様々な問題や意味の起因の一つと言えようか。

ともかく、元和2年（1616）、幕府は、越後国を分割して支配させることにした。

刈羽郡では、柏崎町を中心とする一部は、高田藩・酒井家次（10万石といわれる。）に、椎谷を中心とした北部は、堀直之（椎谷藩・同5千石、後1万石）に、大部分の柏崎地方は牧野駿河守忠成（長峰藩・同5万石）に与えられた。

そして、ここ藤井村を含む2万石は、稻垣平右衛門重綱に与えられた。重綱は、領地の支配の拠点とすべく、ここ藤井村に築城を始め、ここに藤井藩が成立した。

この城が、今回発掘調査の対象となった藤井城である。

② 藤井城（豊岡城）の時代 元和2年（1616）、稻垣平右衛門重綱は、2万石を与えられ、ここ藤井村に築城を始めた。ここに藤井藩が成立した。そして、これが今回発掘調査の対象となった藤井城（一名、豊岡城⁶とも伝わる。）である。

稻垣氏は、上野国伊勢崎（1万石）からの転封であり、同時期に長峰藩（5万石）に封じられた牧野家の三河国時代からの努力だったとみられる⁷ので、牧野家領に隣接、むしろ囲まれる形で配されたのは、そうした関係をなお考慮されたものと考えられる。

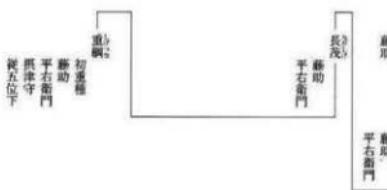
さて、稻垣氏は2万石を給せられたことになっており、これは、3年後に三条に2万3千石で移封していることからも、これは信じられる石高と考えられるのだが、封地の範囲は不明としか言いようがない。藩領とされるのは、先の柏崎市編年史の変遷表ほかを参考にすると、藤井村、畔屋村、与三村及び矢田村の4か村である。しかし、石高が足りない。

当時の各村の石高は不明ではあるが、藤井村の石高は、この後の天和3年（1683）付けの検地帳（以下「天和検地帳」という。）では、「高都合武千五百三拾四石三斗武升九合（本田新田共）」と記され、同時に天和以前の検地高を示す「古高武千百七拾九石九斗六升九合」の付箋がある⁸。

確かに藤井村は、2千534石余（古高でも2千177石余）もの大村である（その他の3ヶ村は、検地帳は

稻垣氏（清和源氏 支流）略系図

卷之三



之、今川氏真より「中島守護」を蒙る。のちの秋村成定領「數度の執りに功あり」。永禄八年成定が守護に除せられ、「中島」へ「守護」してしまつるにより長崎守護「中島」に改められた御守護官である。中島（中島）は、元治八年（一六五一年）八月開港令にせらるて、その名の由来である。〔中島〕、下野国足利郡、上野国山田郡、勢多郡のものにを含めて安堵三千石を名目とする。徳長元年十二月松平忠貞のとき、「中島」牧野成蔵が城坂上野守大胡城にて安堵三千石を名目とする。〔中島〕この年（六年）徳長元年九月、朝鮮より上野守國佐部守を置いて、萬石を領し、「中島」に住す。〔中島〕

〔中島〕十七年十一月一日承す。年十七歳。快活當年、中島と號す。

上野守國佐部伊能守の天守館に暮る。一時は茂茂と聞かせせるるゝなり。の時代々暮す。

第16圖 稲垣氏（清和源氏 支流）略系図

伝えられていない)が、各村とも藤井村ほど大きくはない。これは、白川風土記の戸数をみると現在と大差ない規模であることが解る。つまり、その4か村の種恒氏時代の総計では4千石が良いところであろう。

そもそも、2万石は大領である。藤井堰の受益面積は、白川風土記や各村明細帳などに「流下老万老千石余」とあるように、鰐石側下流域のほとんどを含むものだが、それでも足りない。2万石とは、相当な領地であることが解ろうというものだ。まして、1万1千石余の受益というのは、堰が稻垣氏の時代よりも上流へ移った時代のことと、右岸で平井村、左岸で安田・上田尻村・下田尻村・両田尻村の計5か村も受益地が増えているのであるから。

稻垣氏の治世下にあった村々がもっとある筈であるが、どうしたことであろうか。まず、考えられるのは、稻垣氏の治世が余りに短命だったため、中心城下にしかそうした記憶が残らなかったものであろう。もう一点、刈羽郡内に様々な大名領が設置されていることを勘案すると、稻垣氏の領地2万石だけが城下を中心まとめて在る筈がない、とも考えられるだろう。極端な飛地領の例としては、柏崎近辺に例を求めるだけでも、椎谷藩の半地5千石ほどが信濃国小布施にあったり、何より後年、柏崎地方の大部分が奥州・白川藩領や伊勢・桑名藩領だったりしたのだから、こうした飛地領もままあった筈ではある。しかし今は、これ以上の探求を行う余裕がないし、主目的からも逸脱するので、ここでは、稻垣氏領と伝えら

卷之九 立碑記

(寬政重修諸家譜卷第三百八十四所取) 88

れる4村以外に多くの支配下の村々があった筈、ただし柏崎地方に集中してたとは限らないという点だけ、今後のために指摘しておくに止めたい。

また、藤井城は、一名、豊岡城と伝わるところから考へるに、稻垣氏は城下町たる藤井の名を一旦、豊岡に改めたと思われる。

もちろん、これが地名として残らなかった、藤井の名に親しんだ民衆の中に定着しなかったのは、やはり、氏の治世が短命であったためである。

しかし同時に、支配者の言いなりには決してならない骨太の民衆の姿も感じられないだろうか。

ともかく、稻垣氏の治世の様子は余りに短命のためか、安堵状などの一片の発給文書類も伝わっていない。将に、城跡が残るのみである。

② 藤井城のみえる風景（景観の復元）

復元の手法 藤井城は、全貌が見えるほどは、いや、むしろ殆ど形が残っていないというのが現状である。唯一、形として残るのは、主郭部の東側の土壘と北側の堀（現況は水田、内堀とされる。）のみであ



第17図 明治26年調整の地籍図

る。

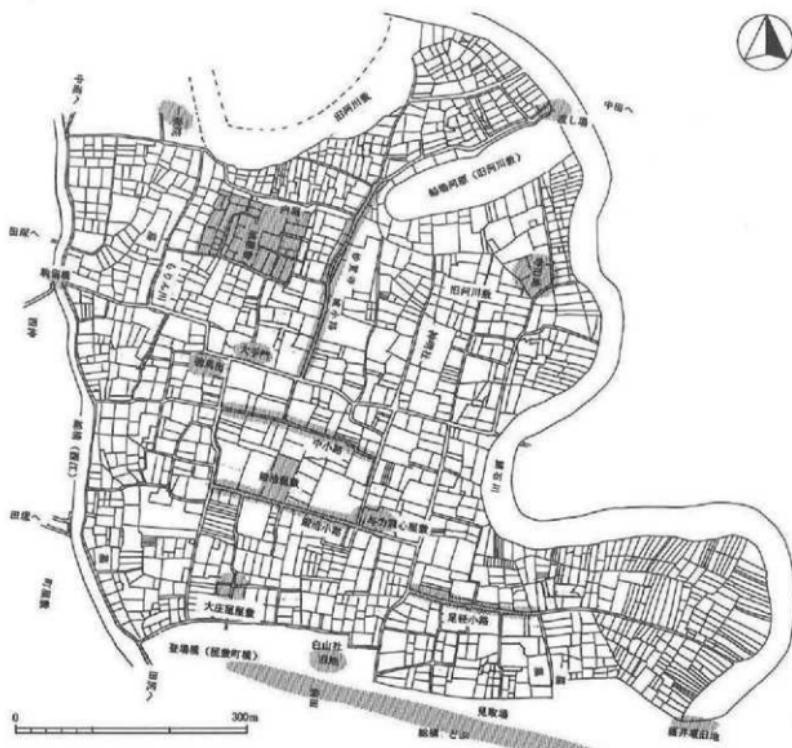
しかし、周囲より明らかに低く幅広い水田が、集落を大きく南から西側を経て北へ囲んでいて、これも一見して外堀と解る。この水田は、鰐石川の河川改修時の残土で相当埋められたと伝えられるが、今も周囲の水田より一際深い。

東側の防禦は、鰐石川に依った筈である。今はまっすぐ流れているが、現地でも、地籍図でも、幾重にも蛇行を繰り返していたことが見える。

地籍図は、作成以降の分合筆や地目変更などを極力戻した。そうすると、今は北側にだけ残る内堀跡の水田は、明治時代にはやはり水田として、その東端から南へ折れて続いていたことが解ってきた。その先にも、道路沿いの宅地内に不審な（現況と無関係な）線が切れ切れに見えている。

こうした地籍図からの情報を整理したのが、前ページの第17図である。

全体の地形としては、南側と西側が高く北と東へ徐々に低くなっている。南側と西側の各集落端の宅地は、それぞれの側の外堀の外より低くなっている。



第18図 藤井城跡の地形と地名

その上、幸いに地元の人の協力を得て、俗称や屋号として残っている往時のものらしい地名を採取できた²⁰。城屋敷、大手門、御馬出、与力同心屋敷、鍛冶屋敷、城小路・中小路・足軽小路などであり、それを第18図に示した。

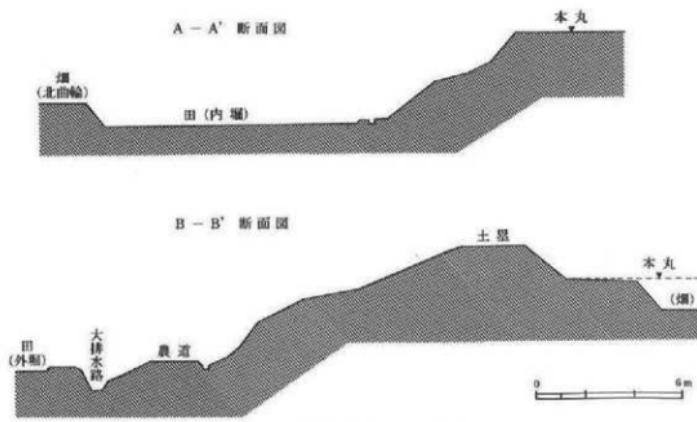
主要部 さて、第17図と第18図を併せて考えると、第17図の本郭の東側北部の堀は、やはり、道路に沿って南下しているのが見える。更に南下すると、東西に走る道路に突き当たって左（西）に曲がるまで線が続いているのが見える。この道路に集落排水事業の下水道本管を伏設したとき、地下3m程までカツボがあったと聞いている。曲がると、第18図の「大手門」と「御馬出」の間を握り切る。その後、やはり道路沿いに北へ曲がりつつ大手との間を広がり、最後は西側の外堀（明治には、中央に「もりん川」が流れている。）へと連なっている、のが見えてくる。この範囲が、主要部であろう。

これをもう少し、詳しく見ていく。

まず、「大手門」と「御馬出」が見える。大手門は、正面の出入口であり、当然ながら一番防備を固める所である。そうした目で、大手門の名が残る土地付近の地籍図の線を見ると、裏（北）側にも堀が巡っているように見えるので、ここは土塁で囲んで外枠型が形成されていたと考えられる。

「御馬出（屋号）」の由来は、地元では、馬を出した所、すなわち近くに馬小屋があったのでは、と伝えている。しかし、大手門の真正面に位置するから、やはり、本来の城郭用語としての馬出曲輪の意か、せめて、出陣時などの馬揃の場（一般的に大手門前に兵馬の整列のために設けた広場）の転化か、と考えたい。馬出（又は馬出曲輪）とは、門前の広場は必要であるが一番侵入され易い門前への直線的な攻めを許す弱点となるので、門前の正面に堀や土塁で両翼を残して囲繞した空間のことである。甲州流の三日月堀が原型かと思うが、積極的な防禦戦が可能になるため、江戸時代の城郭にも継承され、多用されている。ともかく、この御馬出の屋号の家の南側にも堀などがあったと考えられる。

また、大手門・御馬出の防備をもう少し模式的に考えれば、主郭の西南側は大手を大きく囲繞する形（いわゆる横矢掛）で南へ突き出るべきである。そうすると、大手門の西の大堀から更に西へ延びる堀は



第19図 藤井城跡主要部の土塁と内堀

ごく狭く、その南へ続いてもう一曲輪が（地籍図にも、今回調査した道路部分にも、該当する物は見えなかったが）在ったのかも知れない。

北側の内堀にも虎口が在ったのは、確實であろう。すなわち、昭和30年代の航空写真には、堀の折の部分の主郭側の一部に、周囲の畠より一段低くなつた土地が写っている。現在は、この部分の畠の土手にだけコンクリート土止壁が設けられているのは、それを埋めたためである。この低地は、内折型の名残であり、周囲には土塁が囲繞していたことであろう。

虎口は、以上の南北2箇所は確実であろうが、東西の中央部にも在ったと考えられる。現在それぞれ内部の畠へ行くための道の位置であり、東側では入って道の折れている辺りが堀と土塁を越えた（主郭へ入った）部分になるように見えるし、西側では水田（外堀跡）から畠に上がった所に内部に土塁が曲がって内折型を造っていた（そのため、内部が畠となつた後ここだけ土塁が除去された）と考えられ。

さて、復元した内堀の内部を主要部としたが、広さが方200m程にもなつて、2万石程度の大名の城郭の本丸としては、広すぎ、かつ外郭とのバランスも悪い。

そこで、この内部の北西部の一画が「城屋敷」と俗称されることに注意したい。これが、本丸に相違ないし、現在の西側に残る高さの土塁で囲繞されていたに違いない。土塁の外は、西側は広い外堀（深さ的には水堀だったはず）、北側は内堀（同水堀）であるが、内郭側の東側と南側は、どう画されていたのだろうか。

現在の畠の中に大きな深い堀のあった形跡は全く窺えないから、そこには、内部の排水を兼ねた程度の比較的浅い空堀であったと考えられる。そのため、後世の畑化に伴つて、土塁の土を崩して比較的簡単に埋められたのであろう。おそらく、大正時代の記録¹¹⁾にある、藤井城跡を「六十間四方」としているのは、この本丸の範囲だけを計ったものだろう。

そして、北西側の本丸を東側と南側から逆L字形に囲むのは、二の丸となろう。ここでも、本丸が北・東・西側からの三方の入口に囲まれた範囲であることに、もう一度注意が必要である。

すなわち、二の丸に入る、内堀の北側から虎口・外堀の西側からの両虎口は、何れも本丸の直下に接する位置にあり、本丸自体が横矢を務める折型を形成していたと考えられる。



写真3 藤井城跡付近航空写真（昭和30年代）

東側から二の丸に入る道は、内堀から50mほど入って大きく曲がっているが、これが、この付近に二の丸から本丸へ入る虎口があった名残であろう。もちろん、二の丸も、東側と南側の内堀が跡形もなく埋められているのは、埋めるにたる土量が手近に在ったために相違なく、堀の内側には土塁が存在していた筈である。

外郭部（三の丸）さて、ここまで試みた本丸・二の丸の復元は、よく残った北側と西側の現況、地籍図に残った線と地目、城屋敷・大手門・御馬出の俗称地名と屋号などから比較的簡単にできた。しかし、集落内からは、まだ「城小路」、南側に「中小路」、「鍛冶屋敷」、「鍛冶小路」、その東には「与力同心屋敷」及び「足軽小路」という俗称地名等（「鍛冶屋敷」だけは屋号）を探取している。

これらの範囲は、「大手門」のある堀に囲まれた範囲の外であるため、外郭部と題したが、もう一点、外堀と鰐石川の内側の範囲全てを一画と考えるのは、やはり、主要部とのバランスが悪いし、何より2万石の大名の純然たる城郭内とするにはやや広すぎる感がある。

おそらく、東側では、「城小路」は城内であろうが、現・神明社の位置か、もう一本東側の道路内側辺りに南北方向の堀があり、また、南側にも、「鍛冶屋敷」の北側に東西方向の堀や地下水抜き（防火用水兼用）の池などが在ったに違いない、と今でも宅地間にある低い土地（水田や畠等）を見たり、古い地籍図の地目（水田）を見て考える。これが、一画なら三の丸と呼ぶべきだが、更に分かれて東曲輪などと呼ぶべきとも考えられるところである。

主要部の北側には、内堀と旧河川敷（外堀）との間の自然堤防上に一画が設けられていたと思われる。これを、北曲輪と呼んでおこう。この北曲輪の北東には、鰐石川の「渡し場」があり、もちろん、それへ続く自然堤防は、両側の河川敷を結ぶように、堀で断ち切られていたことであろう。

なお、この船一般の運用は、藤井村が半額、対岸の中田村はか6村が半額を負担する慣行だった。

総構と城下町 さて、この西側虎口から外堀を越えた側、西側の一面の水田の中に墓地（大字藤井所有地）がある。おそらく往時も、外堀に突き出た地形だったであろう。

ここは、その西側にある西江（藤井堀の西岸側の幹線用水路）を総構の堀としただろう一曲輪（以下、



左（西）側から墓地が、中央の外堀跡の水田に突き出ている。
遠方が主要部で、写真右端が土塁の切れている箇所である。

写真4 主要部と墓地

西曲輪と仮称しよう。）の中から、主郭へ向かって堀を渡る道筋を守る番所などの小防禦施設の箇所である。耕地整理前、この西曲輪の北隅付近の西江に架かる橋を登場橋と言ったが、これは、登城橋又は外城橋と呼んだ名残であろう。

この総構内の西曲輪から、まっすぐ西へ向かうと田塚を経て柏崎町へ向かう。この道筋の南側、総構の西側が字町屋敷である。城下町が形成（又は計画）されていたものと考えられる。また、西曲輪から城の北側を経て鯖石川へ達すると、前述の「渡し場」に達することができる。

なお、この西江は、用水路とは言えども、藤井堰の西岸側の幹線用水路であって今では幅3m程度のコンクリート水路だが、明治の地籍図（耕地整理前の土水路の頃）では幅10m以上を計る（地籍図だから两岸の土手又は管理道を含む）堂々の普通河川並みの大きさである。

総構は南側にもあったようだ。すなわち、外堀の更に南約100mに耕地整理前にあった（今、高圧電線鉄塔が列ぶ前後）通称“どぶ”と呼ばれる非常に深い大溝があったのがそれで、現在、付近には西江の余水吐兼用の大排水路が直線的に鯖石川へ延びているが、これが総構“どぶ”的名残であろう。

この南側の外堀外の総構内（以下、南曲輪と仮称しよう）は、東側には「足軽小路」という俗称が残る土地もあり、西側には「大庄屋敷」と伝えられる土地もある。そうすると、ここは、基本的には町屋であって、狭い意味では城外と考えて良いだろう。

また、この南曲輪の西隅にも、西曲輪のそれと同じように、外堀跡の水田に突き出すような位置に墓地（同じく大字藤井所有地）がある。ここも、外堀を越えて城内へ入る道筋か、逆に南曲輪内に入るためにはこの近辺にあった「屋敷町橋」の防禦をも兼ねた地点であったものだろう。ただし、「屋敷町橋」は、田尻村への往還として“どぶ”に架かっていたとも、町屋敷から柏崎への往還として西江に架かっていたとも両説伝わっている。

ところで、総構“どぶ”は、伝えられる深さと位置からは、当初の藤井堰からの用水路と考えられる。“どぶ”が非常に深いのは、一面の水田中でもわざわざ高い所へ設置されているからであり、また、単なる西江の余水吐のためなら数百メートルも遠くの鯖石川まで掘らなくとも、もっと近くの旧河川敷へ結べば済む筈である。おそらく、当初の“どぶ”は、余水吐とは逆に、上杉時代に造られた藤井堰から西江へ繋ぐ用水路部分だったからであろう。もちろん、わざわざ高い所を選んで掘っているのは、堰上げの水位と下流での用水路としての必要高を得るために相違ないと考えられる。稻垣氏が入部した頃には、藤井堰はまだここ藤井地内に在った¹⁰から稻垣氏は、西側と同様、南側も既存の西江を総構えとして有効に利用したものであろう。

既存の地形を利用したと言えば、広く長い外堀も、おそらく、稻垣氏の新築ではなく、旧河川敷であったと想像される。今、外堀跡とされる水田を見ると、一見して周囲の水田より一際低いが、それでもそれは昭和30年代の鯖石川河川改修と続く耕地整理でもって相当埋め立てた後の高さであって、それ以前は、集落外周の道路面から優に人の背丈以上の深さがあったそうである。もし、城の造営で掘ったとしたら、それだけの土量を何処へ処理したかである（通常、城内の嵩上げや土塁などの造営に使う）が、城内は、外堀の設置して在る西側も南側も、堀外の水田面より明らかに低い。それだけの土量があれば、もっと高くなっている筈であるし、その上、発掘の成果として、現在の宅地面は築城期以降の江戸時代から繰り返し盛土をしている事が解っているのに、である。

これは、おそらく、稻垣氏の掘削ではなく、先に鯖石川の蛇行によって生じた旧河川敷が存在していたから、と考えられる。旧河川敷はその当時、池沼であったか、原野であったかは解らないが。



第20図 藤井城復元図（試案）

いや、むしろ、藤井堀の当初の設置場所ということを考えると、それは、旧河川敷でなく、現役の河川として分流していた可能性もあると思う。藤井堀は、後年、上流の安田一平井地内に造り直されるが、その設置場所とは、鯖石川本流が三筋にも分流していた内の一筋であったこと（河川改修まで変わらなかつた）を想起すべきだろう。つまり、江戸時代の土木技術としては、2級河川の鯖石川クラスの本川を堰止めることが無理であったか、少なくとも安全のために分流している所を選んだと考えられるのだが、そのずっと前の上杉氏の力なら、もっと大きな限界が在つたであろうことは想像に難くない。

ともかく、稻垣氏ももちろん外堀とすべく手を加えたであろうが、こうした地形を利用したから、大きな苦渋ではなかったであろう。というより、そもそも稻垣氏は、そうした鯖石川の蛇行や西江などの存在に拘って、ここを築城地として選定したものであろう。

こうして、復元を試みた藤井城の概観を第20図に示しておこう。

地元には、「築城は完成しないまま転封した」とも伝わる¹⁰。また、「全く新築に掛かったのか、それ以前に在った遺構を基にして始めたのか不明」とも伝わる¹¹。

これについては、今は考える材料が採取できなかつたので、不明としか、言いようがない。

しかし、「未完成だった」という点については、そんな答はないと言いたい。この復元図を見ると、種垣氏は、鰐石川の蛇行地形を最大限に利用して築城したことが良く解るし、まして、石垣を全く使用していない城である。

したがって、比較的重要でない部分の解や居住性を高める茶室などの作事、庭園などの普請は若干続いていたかも知れないが、純然たる城郭部分の、いわゆる“城普請”は完成していた答と考えるのが妥当であろう。

城下町（城下集落）の様子 上記までは藤井城の概ねの範囲を概観したつもりだが、近辺に「町屋敷」の小字が残っていて、城下町跡かとされることにも触れなければならない。

總構（西江）の外（西）側、西江本流から西へ落ちる水路（下流では都市排水路よしやぶ川となる。）沿いの、今は水田地帯の所である。

しかし、航空写真や地籍図の地形や道路、水路による土地割などを見ても（地籍図省略、航空写真：図版41を参照）、城下町としての宅地割はあまり感じられない。おそらく、種垣氏の足掛け5年の治世では、自身の城郭と自身が引き連れてきた職人（鍛冶屋、鉄物師、革屋などの軍事的必需業種）等のための外郭部（町屋と言っても良いだろう。）は、確実に完成させただろうが、更に總構の外側に広がるほどに一般町人を定着させるまでには至らなかった、のではないだろうか。在ったとしても農民宅地の散村的な風景であって、城下町とまでは発展しなかつたと考えられる。

あえて、藤井城の城下町を探すなら、ここ上藤井集落のすぐ北側にある、下藤井集落であったと考えた方がふさわしい。

下藤井集落も、先に紹介したように、鰐口の奉納を受けるほどの八幡宮があり、及びその別当寺院もあるという中世での風景は、単なる農村風景ではなかった答である。

そして、鰐石川の渡し場は、下藤井集落と城との間を通った先に在るといえるが、こうした河川の渡し場やその付近の川原などこそ、アジールとしての市庭の発生場所といわれる。また、城の北東側に見える（大字中田）字舟場川原の地名が、もし、渡し場の由縁によるものでなく、一説に伝えられるように“城への舟入り場”というものとしたら、城だけというより商業全体を視野にいたれた鰐石川舟運の拠点ともいえるだろう。こうした様々な意味からは、現県道付近の下藤井集落こそ城下町にふさわしい位置と言えるようである。

ところで、大肝煎・高橋氏のことにも触れておこう。ここ藤井村は、江戸時代の柏崎地方を数箇所に分けて支配した大肝煎・高橋氏の居村である。高橋氏は、伝えるところでは、「毛利北条氏の鑑奉行を務めていた先祖三郎右衛門が、天正7年、藤井村に居を移した後、請われて大肝煎に就任した」といふ。

そこで、南曲輪と仮称した所に残った地名「大庄屋屋敷」は、その高橋氏に由来する地名と考えられるのだが、もし、それが城郭の機能していた時代を指すとしたら、ここ南曲輪は、（当時の大肝煎身分は、給禄を食むが武士でも純然たる農民でもない、中間的なものと考えられるから）やはり完全な城内とは言えず、広い意味では城下町（集落）と言ってよいと考えられる。

藤井城の魔城 ここ藤井村においてこうした築城と城下町創を行つた（おそらく大部分は完成していたと考えられる）種垣氏ではあるが、元和6年（1620）、新たに3千石を加えられて三条城に転封となった。地元には、種垣氏は築城を完成しないまま転封した、とも伝えられているとは先に記したし、同時に、完成しなかつた答はない、とも記したとおりである。

ともかく、藤井村ほか柏崎地方の稻垣氏領は、高田藩・松平忠昌に与えられた。高田藩としては、ここ藤井に小規模な城を残す理由もなく、また幕府に許される筈もないので、藤井城は、この時点で廃城となつたものであろう。

そして、藤井城は、その後徐々に、本丸・二の丸の大部分は畑に、外堀等は水田へと耕地化され、そして曲輪内にも地元民の移住が行われ宅地化した。やがて、それが集落となる頃には、更に規格的な村作り・道作りを必要とした時に、簡単に比較的広い直線道路を造る方法として、内堀が土壙を崩して埋められたものであろう。

c その後の藤井

近世（廃城後の藤井の江戸時代） 先に記したように、元和6年（1620）、藤井村ほか稻垣氏領は、高田藩・松平忠昌領となり、藤井城は廃城となった。そして、藤井城跡は、その後徐々に、集落化と耕作地化が進み、城の規模さえ解らなくなつていった。

この後の藤井村は、北鶴石地域の中心村として、松平忠昌の後、寛永元年（1624）から高田藩・松平越後守光長、天和元年（1681）から天領、貞享3年（1686）から高田藩・稻葉正道、元禄14年（1701）から高田藩・戸田忠真、宝永7年（1710）から高田藩・松平定重、そして寛保元年（1741）から白河藩・松平定賢の支配を受けて、最後は、文政6年（1823）からの桑名藩・松平定永（実は奥州白河から松平氏が転封した。）の支配下で戊辰戦争を経て明治維新を迎えた。

最後の桑名藩主・松平定敬は、京都守護職（会津藩主）松平容保の実弟であり、所司代として兄と共に京都の治安維持の第一線に立っていた。当然、維新政府には憎まれていて、慶応4年（1868）3月、江戸城を開城させた維新政府は、罪の一等は徳川慶喜、同第二等は松平容保・定敬兄弟としていた。

しかし、柏崎は桑名藩領とはいども、所詮は飛び地領で大きな戦力配備もなかったため、同年4月27日に頸城郡との境にあたる青海川・谷根～鰐波の間で戦闘があった他は、小千谷口の戦況との関係もあって、柏崎町付近では大きな戦は起らなかった。とはいながら、藤井の人々も、鰐波方面の銃砲火の音や炎上する煙は望めたであろうし、まして、5月6日の長岡街道上の曾地村・花田村の砲火による炎上には、当時の藤井村との間には一望千里の水田が広がるのみであり、生きた心地がなかつたことであろう。

近代 戊辰戦争の最中・慶応4年（1868）7月、越後府の下に、刈羽・頸城・魚沼の3郡を管轄する柏崎県が置かれた。当然、藤井ほか柏崎地方は全てその管轄下に入ったが、速くも4か月後の明治元年（1868／9月1日改元）11月、柏崎県は新潟府の管轄下とされたのを始めとした糾糺曲折を経て、翌年7月には新潟県に統一編入された。

明治21年（1888）頃から市制・町村制施行の明治政府の方針で盛んに大字単位の村の合併が進められ、翌年には、長浜村（29戸）・新田畠村（19戸）・田塚村（43戸）藤井村（213戸）が合併して、藤井村（304戸）が生まれた。藤井に村役場が設けられたのは言うまでもない。

更に、明治34年（1901）、藤井村（長浜村、新田畠村、田塚村、藤井村）と旭村（中田村、上大新田村、畔屋村、与三村）が合併し、北鶴石村が生まれた。藤井村は田尻・横原両村との合併を希望したが、地方事務所の裁定に従つたようである。村役場はやはり藤井村に置かれた。

昭和30年には、更に大きな変化があった。2月1日付で北鶴石村は（同時に田尻村・高田村も）柏崎市に合併した。また、9月には藤井堰土地改良区総代会も県営刈羽平野土地改良区に合併した。こうして、行政組織としての名では藤井村も北鶴石村も消えたが、藤井が北鶴石地区の名実共に中心であることは今

も変わりがない。

註

- 1) 柏崎刈羽平野では、佐橋莊・比角莊・鶴川（宇河）莊の存在が知られる。三莊の初見史料は吾妻鏡・文治2年(1186)2月12日の条（「閑東御知行国々内乃貢末清莊々注文」）である。
なお、佐橋莊・鶴川莊の名は、地域呼称としては江戸時代の検地帳にまで残るが、比角莊の名が長く残らなかった（比角は村の名として残るが、）のは、比較的早く莊園としては解体されたためと考えられる。
- 2) 善福寺（曹洞宗）は、藤井（下藤井集落）の当院八幡社に隣接し、現存する。
- 3) 善光寺（曹洞宗）は、柏崎市原町に存在する。ただし、半田などへ移転していた時期もあると伝わる。
なお、原町は、国衙領の系譜を引き、室町時代には府中長尾氏領（又は上杉氏の代官としての長尾氏の支配下）にあったと考えられる。
- 4) 毛利丹後守とは、佐橋莊北条を本拠とした大江姓毛利氏の惣領・北条丹後守景広のこと。また、白川風土記では、丹後守景広の天正七年（御船の乱）の討伐（とその後の北条城開城と本領取公）をもって、毛利北条家の断絶と捉えているので、本文の記述となっているもの。実際は、景広と越後国内の本領を失った後、景広の父・北条芳林（安藤守高広）を中心とした一族は、再び上野国鹿籠を本拠として上杉家から自ら立し活動を続いている。
- 5) 昭和37年、新沢生氏の作成になる。ここでは、柏崎昭年史（昭和45年11月柏崎市教委発行）所収のそれによった。
- 6) 豊岡城の名は、大正時代に刈羽郡内全地域の旧跡などを調査した関甲子郎が採取し、記録した。ここでは、その写本・柏崎文庫（未刊行、柏崎市立図書館所蔵）によった。
- 7) 牧野氏との関係は、福垣氏系図の重綱及び父・長茂の項による。
- 8) 福垣氏略系図は、「柏崎市史料集 近世篇1上『柏崎の近世史料（支配・後地）』第一章第二節四福垣氏（藤井藩）家譜（柏崎市歴史図書委員会 昭和59年11月5日発行）」から作成した。
- 9) 藤井・竹田英氏所蔵文書／柏崎市史料集 近世篇1 下 「柏崎の近世史料（天和後地帳）」第二章第二節第二項ホ三「天和三年閏五月藤井村検地帳」（同 昭和59年12月5日発行）による。
- 10) 城郭関係地名としては、本文に記載した他に、藤井村天和後地帳によって、土の内、土の下、館のうら、古屋敷、堀り田、屋敷泡、足軽町、古城之内などが採取できるが、場所を特定できなかった。（したがって、正確に言えば、「土の内」の土は、土塁なのか、堤防＝溜池を指すのか等々、城郭関係とは断じられないが。）これは、忘れ去られたことも一因だろうが、調査を行ったのが上藤井集落のみであること（他の2集落内にあった可能性）も大きな原因であろう。
- 11) 白川風土記による。例えば、藤井村には次のように記録されている。

鶴石川 村ノ東二丁ニ流瀬湯ニテ船一般
船仕立割合ハ當村半高廻リ半高ハ中田村大井町與三田矢田村畔屋山間村ヨリ出ス
- 12) 藤井堰は、当初こそ藤井に築造され、慶長17年（1612）に上流へ移転した。（白川風土記：藤井村の条による。）
- 13) 大正時代の柏崎文庫の筆者・関甲子郎は、「城跡 六十間四方」と記録している。これは、本丸と考える範囲に合致するのだが、その「六十間」の記録が本文のように「城屋敷」と呼ばれる広さを示したのか、あるいは、その時点では何らかの「具体的形跡」が残っていたものの、残念ながら今では不明である。
- 14) 完成しなかったと伝えるのは、柏崎文庫（前出）の記録である。
- 15) 白川風土記の藤井村の「城跡」の記録に、次のようにある。

村ノ内子ノ方ニ土居池水監在シタリ
元五年福垣平右衛門ノ頭ノ居リシカト云フ
封ヲ移サレシ後城池トナル故ニ城池ノ跡猶アラタナリ
福垣氏ノ新築ニテアリシヤ其 上杉氏ノ臣僚ノ遺構ニテ有シヤ
ソレラノ事ハ遠カラサル事ナレ共今口碑ニ傳ル事ナシ
- 16) 高橋氏の由緒は、「代々記録 市立図書館所蔵一九四／柏崎市史料集 近世篇 2 上 柏崎の近世史料（貴賀・町村概況）第四章第三節第三項イ八 高橋三郎右衛門代々系図記（同 昭和60年3月29日発行）」の内、初代についての「北条村城主毛利丹後守家来先祖御舖率行、但永禄七子弟落城、則同年藤井村に立越、翌年二月方依頼ニ面附役人ニ相成候」との書上による。
ただし、本文では、藤井村へ移転した年は「永禄7年」ではなく、「天正7年」とした。これは、「永禄7年」には北条丹後守の城に限らず毛利一族の城が「落城」する事件はないので、御船の乱における「天正7年」の丹後守景広の戦死・北条城の開城を指すものと考えたため。なお、この読み替えにより、同由縁書の初代の大肝煎就任期間42年間は19年間となり、次代以降の就任期間と比較しても、違和感はなくなる。

2) 藤井城跡 A 地点における築城状況とその後の展開

今回の確認調査は、近世城郭とされる藤井城跡の範囲内で実施したが、現地踏査に際して古代・中世の遺物が採集され、それら遺物が所属する時代の遺跡を確かめる目的も持っていた。実際に、第1次調査では遺構内から土師器が出土し、詳細を見極めるため第2次調査を統いて実施したが、結局古代と中世については遺物は存在しても、遺構の存在を明確にすることはできず、結果的には藤井城築城以降の遺構・遺物が主体的に検出されることとなった。

ところで、調査を実施した A 地点は、土塁や堀が残る城郭中枢部とはやや距離を隔て、城郭遺構がまったく残存していなかった区域であった。しかし、前後 2 次にわたる調査の結果、少なくとも 60cm、最大 1m 余りの厚さに及ぶ盛土・整地層が確認された。また、出土した古代（平安時代）・中世～江戸時代初期・江戸時代中～後期および近現代に至る各時代の遺物は、藤井城が築城された時代とそれ以前、そして廃城以降現在の集落に至までの長い歴史があったことを物語っていた。

しかし、その成果は、調査面積に比例しており、得られた情報は少ない。また、調査地点が中枢部から離れた極めて限定された区域を対象としており、当該成果の普遍化も困難とせざるを得ない。さらに、検出された遺構・遺物の主体が、江戸時代中・後期にあり、中世以前あるいは最大の関心事である藤井城築城の様相を示す時期については、そのほとんどを解明できない結果となった。しかし、藤井城跡に対して初めて実施された考古学的調査であったことは、地域の歴史にとって意味するところは大きい。このような観点から本節では、今回の調査で得られたデータをもとに、築城期から廃城後の展開を中心に、若干の考察を加え、今後の調査に向けた前段作業として試みることとしたい。

a 層序と整地

今回の調査では、第1次調査を中心にして、基本層序の把握作業を行った。その結果、暗色系の土砂と黄褐色・青灰色系の地山的な粘土層が交互に堆積する状況を確認することができた。この事実は、何らかの整地あるいは造成がなされた結果を示すものとできる。しかし、問題は、それらの作業に至った原因やその目的、そして時期の解明であり、その結果と過去の記述や伝承等との関連を究明することにある。ただ、今回得られたデータは、城跡全体から見れば点にすぎないため、以下の検討は、一つの試案と言うこととした。

第21図は、基本層序で把握した各試掘坑等のデータを模式的に示し、配列したものである。この図に示されたとおり、TP-1～3 試掘坑は互いの整合性が取れず、TP-5 の上部層とは異なる堆積状況にあることが判る。下部については、TP-3 を挟んで変化するが、第V層と第VI層は対比が可能であり、おおむね標高 8.5m 前後に地山的な黄褐色粘土層が存在することになり、第1次調査ではこれを遺構確認面とした。しかし、第2次調査の堀状遺構の壁面で確認された堆積層では、標高 8.0m ほどのところから旧表土層と想定できる暗色系還元化粘土層（第X層）と、その上位を覆う黄褐色酸化系粘土層（第IX層）、そして两者に食い込むような状況で五輪塔火輪が発見されたのである。

第IX・X層の年代観は、ものさしとなり得る土器類がなく、また五輪塔そのものから年代を限定するところが困難なため明確にできない。しかし、墓石でもある五輪塔が、現地表下 1m の整地層内に無造作に打ち捨てられていた事実は、間近に造営されていた墓地や墓の存在と、これを破却するに至った事態に見舞われたことを物語っている。これらの状況を考え合わせると、墓石の廃棄は城郭の建設に伴う造成事業の

可能性が高いように感じられるが、今後における調査事項には第IX・X層の時期比定と、さらに深い整地層の有無を確認する作業などが掲げられることになる。

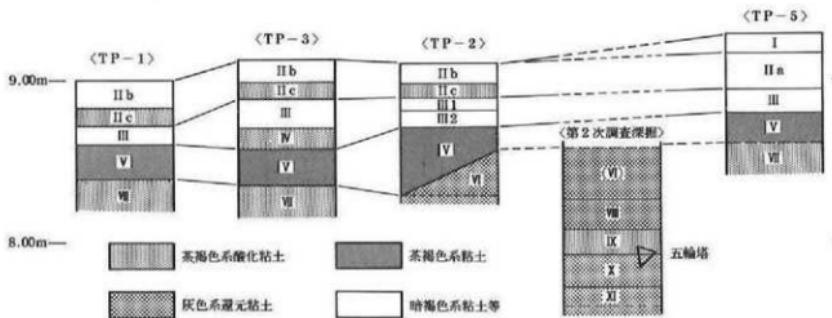
さて、わずかな事実での想定となるが、第X層が元和2年頃までの旧表土層と仮定するとすれば、当時の標高はおおむね8m前後であったことになる。もしこの仮定が正しいとすれば、第1次調査で地山層と仮定した第Ⅸ層は、酸化系土砂による整地層の一部となる。調査では、第Ⅹ層以下を掘削していないため下位の層位は未確認であるが、TP-1～3試掘坑で出土した遺物は、その大半が近現代に属するものであり、江戸時代の所産とできるものはほとんど認められなかった。このことから、第Ⅹ層が整地層の一部である可能性をさらに高める。しかし、TP-5付近では土師器・須恵器と言った古代の遺物が出土していることも事実であり、TP-5付近は地山層、TP-3付近以東においては旧地形の標高が低かった可能性も否定できない。これらの確認作業は、今後当該地一帯の旧地形を復元するため必要となるであろう。

ところで、TP-5試掘坑で検出されたSK-15土坑は、第V層から掘り込まれたものであることが明らかである（図版44-f）。SK-15土坑からは、18世紀前半と考えられる伊万里小碗出土していることから、これを覆う第III層は18世紀後半以降の整地層となる可能性が高い。また、後述するように、SK-15と主軸方位などで類似するSK-11出土陶磁器類も17世紀後半から18世紀前半代の時期幅に収まることからすれば、第V層は17世紀後半から18世紀前半以前に造成された整地層である可能性を示している。藤井城の築城が17世紀第1四半世紀であることを考え合わせると、第V層の判断を留保するとしても、第V層から第VI層は築城期における整地造成層となる公算を高くするのである。したがって、第III層以上第II層までは、18世紀後半以降の整地層となるものと考えられ、そのため試掘坑からの出土遺物は少なく、また時期の新しいもので占められていたのではないかと考えられる。

なお、第I層については、TP-5試掘坑のみに存在する異質な黒褐色土であることから、本層は現代でもかなり最近における屋敷内個別の盛土層と考えられる。

以上のことから、A地点で見られる整地層は、近年の盛土層を除けば、整地層A（第V層～第IX層：ただし第VI層保留）と整地層B（第II層～第III層：第IV層は不明）に大きく二大別がなされ、前者の整地層Aは藤井城築城の関わる整地層の可能性が高いことになる。

そこで整地層Bの出自が問題となるが、18世紀後半以降の造成とすれば、集落内の耕地と居住に関わる事由でなされた造成事業であったと考えられる。現在の上藤井集落は、標高がほぼ一定した平坦地に形成



第21図 藤井城跡A地点基本層序概念模式図 (1:30)

されているとおり、地形的起伏が少ない。しかし、藤井城築城の整地がA地点まで及んでいたとすれば、土塁や堀などといった大規模な遺構が構築されていたことは想像に難くなく、これら大規模な城郭遺構による起伏が当然あったものと見られる。ところが、A地点周辺に城郭遺構はまったく現存しておらず、廢城となった以降において、これら城郭遺構が取り崩されたものと想定せざるを得ない。したがって、18世紀後半以降に比定される整地層Bの出自とは、これら土塁等の削平にともなって生じた土砂であった可能性を高くするのである。つまり、現在の上藤井集落域の景観は、18世紀後半頃に実施された新たな造成によって現出されたのではないかと考えられるのである。そして、この整地層Bの存在とは、A地点周辺まで城郭遺構の造営が行われていたことを証明する意味も持つことになるのである。

b 遺構の配置と年代観

A地点で発掘された調査面積はおよそ100m²であり、この狭い範囲内で検出できる遺構にはおよそ限界がある。また、調査日程の都合により、全ての遺構を完掘していないため、詳細が不明な遺構も多い。そこで、検出された遺構の機能や形態などにより、大まかな分類を試み、遺構配置を概念的に示したものが第22図である。この図でうかがわれる調査区内の状況とは、道路によって区切られる土地区分である。道路は、南北及びこれに接続する東西の道路と側溝がT字路に設定され、土地も大きく3エリアに区画されていたことが判る。これにより区画された3エリアを図示したようにA・B・Cと便宜的に呼称する。

遺構配置の概観 Aエリアは、土坑やピットが多く検出される。ピットには柱穴とすることができそうな深度のやや深い事例（SKP-13など）が含まれるが、建物の復元には至っていないため、性格については計りかねるものである。土坑は大小の規模があり、その差異は大きいが、長方形や正方形など一定の規格をもち、土地区分に沿う一群と、方位等に規則性が看取されないやや小規模な一群がある。前者を便宜的に土坑a群とし、後者を土坑b群とする。

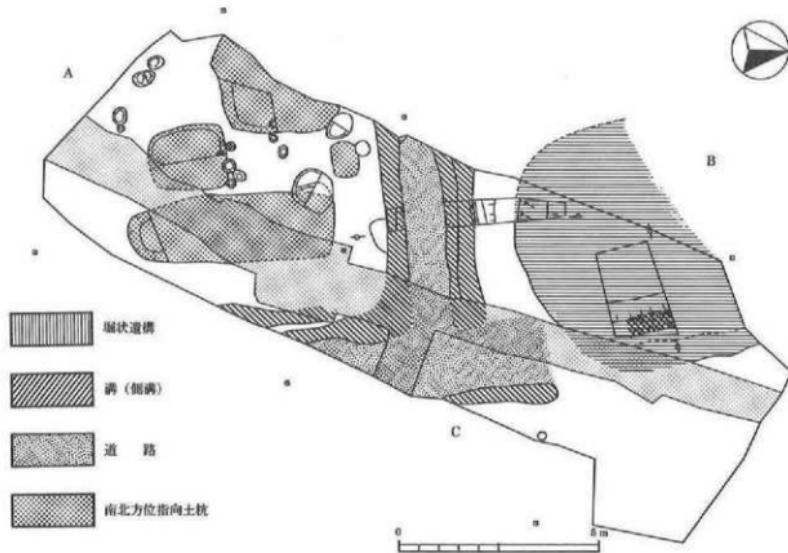
Bエリアは、堀状の大型落ち込みではほぼ全体が覆われる。この堀状落ち込みは、南北道路部分まで及ぶことから、道路の設定はT字路ではなくL字型に屈曲していた可能性を示唆するが、Cエリア境の小溝（SD-24）と、堀状遺構によって切られる小溝の存在から、筋違いに設定されていた可能性も考えられる。

Cエリアは、調査区北東部でわずかに知り得るのみであるが、遺構確認面とした地盤は、ほかのA・Bエリアとは異なって、かなり固く締まっており、かなり安定した地盤となっていた。ただし、検出された遺構は小ピット1基のみであり、具体的なことは何も明らかにできなかった。

遺構群の年代観 各遺構から出土した遺物は、完掘していないこともあるが、もともと遺物が少なく、時期を特定するには不十分な結果となっている。しかし、この不備を前提としつつ、それぞれの遺構の時期について大まかな類推を試みておきたい。

まず、遺構内から出土した遺物の年代観を例示してみたい。ピット群・土坑群については、SKP-13（9世紀後半～10世紀前半）、SK-11（17世紀後半～18世紀前半）、SK-12（18世紀後半頃）、SK-15（18世紀世紀前半頃）の4例が挙げられる。堀・溝類では、SD-22（17世紀後半～18世紀前半）、SD-23（18世紀後半頃以降）の2例がある。

これら遺物の年代観が即遺構の年代観とすることはできない。しかし、各遺構の年代観を提示するには、これ以外に手掛かりがないことも事実である。そこで、多くの問題を持つことを前提としつつ、遺構内から出土した遺物の年代観をもとに、各遺構群の年代観を推定したい。



第22図 藤井城跡A地点遺構配置概念図

年代観の検討の対象となり得る遺構群の種別は、堀状遺構、小溝（側溝）、ピット、土坑a群、土坑b群である。まず、堀状遺構については、下層部から出土した土師器等は混入として除外するが、最終的に埋没に至った上層部の年代が18世紀後半頃以降となる。側溝と考えられる小溝の事例はわずかであるが、SD-22を代表として類推すれば、これら側溝の埋没時期を17世紀後半から18世紀前半頃に比定することができる。ピット群は、SKp-13から出土した須恵器無台杯の存在から古代の可能性を持つ。ただし、SK-15土坑などで近世陶磁器と土師器が共伴している事例があるとおり、土師器や須恵器が小破片であった場合、混入の疑いを捨て切れない。土坑a群は、SK-11・15の事例から17世紀後半から18世紀前半に、また土坑b群はSK-12の事例から18世紀後半以降とすることができる。土坑群は、堀や側溝等とは異なり、掘削後埋め戻されたものであることは、これら土坑の覆土が物語っており、遺物の年代観がほぼそのまま遺構の構築期である可能性が高い。これら土坑群のa群とb群の時期差と前後の関係は、SK-12が、SK-11を切っていることから矛盾しない。

さて、このように各遺構の年代を類推してみると、藤井城に直接関わる遺構は認められないことになる。ただ、SD-23などは確かに検出した範囲が狭く、一部をトレンチ調査しただけで、築城期の遺物は検出されていないが、堀状遺構と側溝の時期とは埋没時期を指し示すものであることからすれば、これらは側溝に挟まれた道路とともに、城郭建設時まで遡りえる可能性を持っていることになる。しかし、土坑群は、出土遺物の年代がほぼ構築年代と見ることが可能であるため、a群・b群ともに藤井城とは直接的には関係しなかったことは明かである。これら土坑群の性格は不詳であるが、藤井城廃城後の展開において、集落の居住や耕地との関わりの中で生じた遺構群を見ておきたい。

c 藤井城築城前後とその後の展開 ーまとめにかえてー

今回実施した前後2回の確認調査は、藤井城跡の範囲内における初めての調査であったが、それはそのまま当該藤井地区のことである。調査の結果をみると、藤井城に関わりそうな遺構の存在を確認するとともに、城郭建設に伴って設定された土地区画が、その後の展開に大きく作用し、現在の集落内における道とそれらによって区画された土地の区割りにもその影響をうかがうことができる。つまり、この藤井地区的変遷史において、藤井城の築城とは、極めて大きな期間であったとすることができる。そこで、調査成果のまとめとして、当該地の変遷を大きく3期に区分して概観することとしたい。

第Ⅰ期：藤井城築城前史 藤井城の築城が始まったとされる元和2年以前の時代とし、長期にわたるが古代と中世の時期とする。出土した遺物はわずかであるが、しかし確かに人々の暮らしがあったことを証明する。そして、中世のある時期、おそらく室町・戦国期には墓地もしくは墓が造営されていた。

ところで、藤井城の築城は、大規模な土木工事がなされたことを意味し、城郭建設のため堀が掘られ土塁が積まれ、低地には土砂が盛上されるなど、自然的・地形的景観は大きくその姿を変えた。それまでの旧地形を考察できるデータはほとんど得られなかったが、T P-5 試掘坑付近の第Ⅷ層の存在、そして堀周辺における第ⅩⅠ層とのレベル差は90cmにも達しているなど、かなりの起伏が想定できる。城郭を建設する際の用地選定において、単なる低湿地を選ぶことは考え難く、それよりも田塚山などといったような中位段丘の残丘が点在したような場所が選ばれたのではないだろうか。

第Ⅱ期：藤井城築城期～廃城直後期 藤井城築城の開始は元和2年とされ、元和6年まで続けられたとされる。しかし、廃城となった以後の動向は明確でなく、17世紀後半まで遺物もほとんど見当たらぬ状況となっている。このため、築城期とその後の17世紀中葉頃までの空白的時期を区分し、それぞれa小期とb小期と呼称したい。a小期は元和2年～元和6年に相当する。この段階に盛土と整地がなされ、堀と道路などにより土地の区画もなされたと考えられる。A地点検出の遺構配置については、これらが藤井城においてどのように位置付けられるのかは一切明らかにしない。ただ、調査区に隣接して「馬出し」と解釈できそうな屋号を持つ家があり、これに関わる可能性は考えられる。b小期については、A地点では空白期であるが、広大な城内的一部では、屋敷や耕地と化していた可能性はあるかも知れない。

第Ⅲ期：藤井城廃城以降 A地点での層序の検討から、18世紀後半段階において土塁を崩し、堀を埋めた可能性が指摘されたため、これを小二期として前後2期に細分する。それぞれの時期は、出土遺物の検討からa小期（17世紀後半～18世紀前半）、b小期（18世紀後半以降）とする。a小期では、A地点でも遺構が残されているとおり、人々の生活が始まつたことが確かめられる。天和3年（1683）の「藤井村検地水帳」では、町屋敷・下町屋敷・古屋敷・足軽町が水田化し、また古城之内・屋敷・足軽町が畑とされ、141軒の屋敷が記載されている。この屋敷数は、藤井村全体であるが、b小期となる文化4年（1807）に成立した『白川風土記』によれば、藤井村全体で198軒、現在の上藤井集落域には59.1%を占める117軒があったと記されている。この割合を単純に当てはめれば、天和3年段階の上藤井地内には、およそ80軒余りの屋敷地があったことになる。藤井城廃城からおよそ半世紀、かつて藩主の居城とされた城内は、水田と畑が開発され、そして80軒にも及ぶ大きな集落が成立していたのである。

藤井城の遺構は、18世紀後半頃における地均しによって、本丸を除いてその面影を消した。築城からおよそ400年を迎える今日、封建制の象徴でもある藩主の館は、宅地化や新たな道路の改修により、さらなる変貌を遂げようとしているのである。

V 小峯遺跡

—市道柏崎7-120号線新設拡幅工事に伴う確認調査報告—

1 確認調査に至る経緯

平成元年に法線発表がなされた国道8号線柏崎バイパスは、国道252号線から国道353号線を結ぶ区間がすでに事業化されている。現在、用地買収が終了したところから、埋蔵文化財の調査や一部で盛土等の工事が着工されるまでに至っている。このような当該事業の進捗に伴って、市内各所ではバイパスへの取り付け道路の事業化も進み、枇杷島地内では箕輪遺跡西辺を通る都市計画道路の建設も進められている。

平成11年6月7日至って、市道柏崎7-120号線の新設拡幅工事の実施に伴う埋蔵文化財の取扱い協議がもたれた。当該市道も、バイパスへの取り付け道路となるもので、一部拡幅しつつ、バイパス接続部は新設する内容となっていた。この新設区間となる事業予定地が、平成10年度から発掘調査が進められている小峯遺跡の隣接地であった。

平成11年6月10日付け、国八第3号により、柏崎市長（担当：柏崎市建設部都市計画課）から文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が市教委へ提出された。市教委は、まず現地踏査を実施し、地形等を観察するとともに、遺物の散布状況を見極めること、さらに隣接地で進められている発掘調査の状況を参考に、発掘調査の要否を判断する必要があるとし、この旨を新潟県教育委員会（以下「県教委」）へ進呈する際に付したのである。

小峯遺跡の発掘調査が終了に近づいた平成11年7月27日至って、県教委担当職員が来柏し、小峯遺跡の調査状況と隣接地にある市道用地内を視察した。状況としては、道路用地の南北両側の水田に須恵器片等の遺物が採集されていること、また西側において中位段丘の縁辺が舌状に延びている可能性があり、これらの地点に新たな遺跡の存在も予想されるとして、確認調査を実施し、遺構・遺物の有無を確認した上で判断するよう指導がなされた。

しかし、道路用地となる水田内には稲が作付されており、確認調査の実施はすべて稲刈り後とされ、しかも柏崎市教育委員会では緊急を要する長期の発掘調査を実施中であったため、日程の調整は困難を極めた。その結果、確認調査の実施決定は前日となる平成11年10月20日に急きょ設定したものであり、さらに翌21日の1日だけ調査を終了させざるを得ないなど、あわただしい調査となった。

2 確認調査

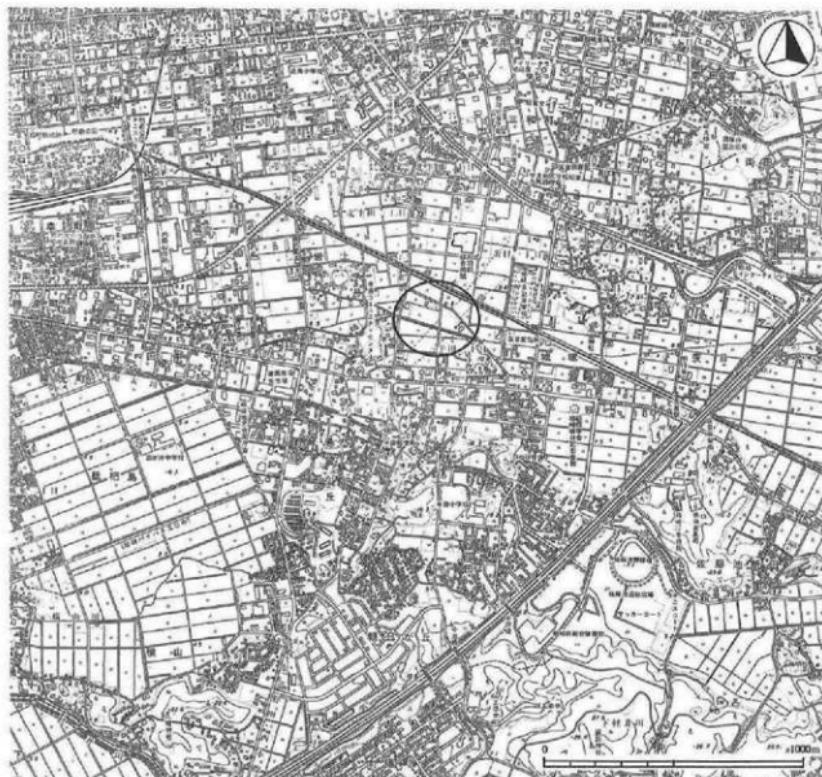
1) 確認調査区概観

今回、確認調査対象とされた市道柏崎7-120号線新設拡幅用地は、柏崎市半田三丁目1843-1地先にあり、小字名は「拾枚」である。地理的には、柏崎平野のはば中央に位置し、周囲には中位段丘の残骸とも言える小丘が、沖積地の広がりの中に点在している。小峯遺跡は、このような中位段丘が浸食された小丘の尾根筋から、周囲の沖積地へ広がりを見せる遺跡である。平成10・11年度に（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団により、柏崎バイパス本線内の発掘調査が実施されたが、確認調査対象となった市道建設用地は、西側に隣接した位置にあった。

平成11年6月10日付けで提出された文化財保護法第57条の3に基づく、土木工事等の通知では、西側を南北に走る市道柏崎7-9号線から柏崎バイパスに至る延長120m、全幅10.5m、面積1,260m²とされていた。しかし、法線内的一部分は、東西に走る用水路とその土手兼農道を含むものであり、今回の確認調査では、これらを除外し、大半を占める水田部を調査の対象として発掘した。そのため、対象面積はおよそ960m²となった。発掘した試掘坑は合計7カ所、発掘面積の合計は約47.4m²となり、調査対象面積との比率は4.94%と少ない結果となったが、市道法線内における状況は概ね把握することができた。

2) 調査の経過

平成11年10月21日の朝、現地へは調査員3名で赴く。現地には、重機のオペレータと事業主体となる市建設部都市計画課の職員が待機しており、早速発掘作業に着手した。試掘坑（略号：TP）の位置は任意



第23図 小峯遺跡の位置と周辺の地形 (1:20,000)

とした。しかし、調査対象となる水田内にはかなりの雨水が溜まっていたため、水田内への重機乗り入れを避け、水路の土手上から重機のアームが届く範囲で掘削することとした。

発掘作業は、西側から始め、順次東へ進むこととした。その事由として、小峯遺跡とは別遺跡が西側の丘陵沿いに存在する可能性が指摘されていたことから、まずはその判断をするためであった。試掘坑は、西側のTP-1から東側のTP-7まで、合計7カ所設定した。午前中は3カ所を発掘して調査したが、昼食時の中断に際し転落等の事故防止のため、埋め戻しを行った。午後は4カ所を調査した段階で、およそ予定の延長を終了した。夕方前には全ての試掘坑の埋め戻しを完了し、調査を終了した。

3) 試掘坑の概要

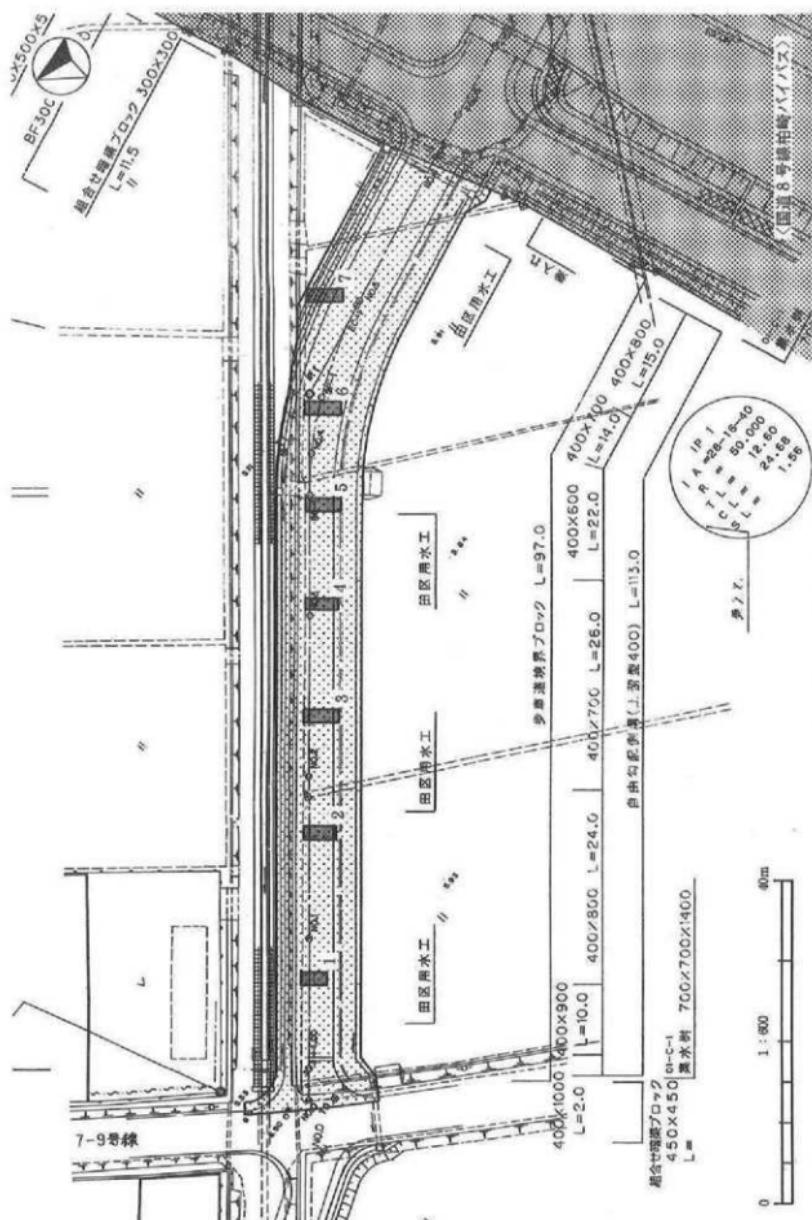
TP-1 試掘坑 最初に設定したTP-1は、危険防止を意図し西側にある市道の近接点を避け、およそ15mのところとした。市教委では本遺跡のデータがほとんど無いことから、遺物包含層の深度及び色調などがまったく不明であったため、掘削に際しては、耕作土下を少しづつ慎重に掘り下げていくこととした。その結果、深度が30cmを超えるところから遺物が出土し始め、粘土層の色調も暗色を強めたものとなつた。粘土層は粘性が極めて強く、また締まりがあるので、湧水もあることから、ジョレン等による精査は困難と判断し、重機により遺構確認面をできる限りきれいに仕上げることとした。遺構確認面は深度50cmほどで検出された明灰色粘土層とした。当該粘土層はほとんど酸化しておらず、還元化の強いものであった。確実に遺構とすることのできる落ち込みはなかったが、確認面とした第IV層に炭化物が混じる浅い溝状の落ち込みを検出した。しかし、遺物は特にとまっておらず、シミ状のものと断定した。しかし、遺跡に隣接した低湿地でもあり、水田等に関連したものである可能性は否定できない。遺物は、包含層から古代の土師器細片が10点ほど出土した。

TP-2 試掘坑 TP-1から東へ17mのところに設定した。田面下およそ40cmで遺物包含層とした第III層に達し、その直上あたりから土器類の出土が見られた。層序及び遺構確認面はTP-1とほぼ同じである。遺構などの落ち込みは一切無かったが、出土遺物の量は増加し、須恵器瓶底1点のほか土師器が50点あまりとなった。

TP-3 試掘坑 TP-2の東13mの位置で掘削した。層序及び遺構確認面の状況はTP-2とほぼ同じである。遺構は検出されなかった。遺物は、TP-2より若干少なくなるが、土器類を中心として30点ほどが出土した。内訳は、土師器24点、須恵器4点のほか、灰釉陶器の細片1点が特筆される。

TP-4 試掘坑 TP-3の東13mに設定した。基本層序や確認面の状況等は、これまで3カ所で実施した試掘坑と同じであるが、遺構確認面の深度が田面下40cmとなりかなり浅くなっている。遺構は特に検出されなかったが、遺物としては須恵器3点のほか、土師器が20点近く出土している。

TP-5 試掘坑 TP-4の東12mに設定した。遺構確認面の深度は、TP-4より若干浅くなり、遺物包含層とした第III層が厚みを増し、上下2層に細分できるようになった。遺物は、下層部をなす第III b層から中心的に出土した。遺物出土量はかなり増加し、須恵器が比較的大きな壊破片を中心に20点あまり、土師器は細片を中心に50点あまりとなった。特筆されるのは、灰釉陶器の底部破片1点であり、さらに黒色土器（内黒）も1点が確認できる。遺構は、やや大型となる黒色粘土の落ち込みを検出した（SK1）。深度はおおよそ30cmほど、サブトレーナー発掘では土師器の細片1点を確認している。平面形は一部トレーナー外へ出るため確認できなかったが、概ね隅丸長方形形状を呈し、長辺180cm、短辺110cmほどである。本土墳の長軸に沿った南西側にも連続する可能性のある落ち込み（SK2）があり、場合によっては底面



第24図 小学通路調査区と試験区の位置

に凹凸のある溝状の遺構となるかもしれないが、今回の試掘では確認に至らなかった。

TP-6 試掘坑 TP-5 の東側12mに位置する。遺物包含層はさらに厚みを増し、上下2層の区分も明瞭となる。遺構としては、柱穴と考えられるピット1基をトレンチ中央で検出した。覆土は黒色粘土、直径35cmを計る。遺物は、土師器を中心に140点ほどと、今回の試掘坑では最も多かった。

TP-7 試掘坑 TP-6 の東側14mのところとした。遺物は、土師器を中心に70点あまりである。遺構としては柱穴と考えられる黒色粘土の落ち込みが2基検出された。半蔵等の補足調査を実施していないが、隅丸長方形を呈した1基は、長辺54cm、短辺40cmを計る。

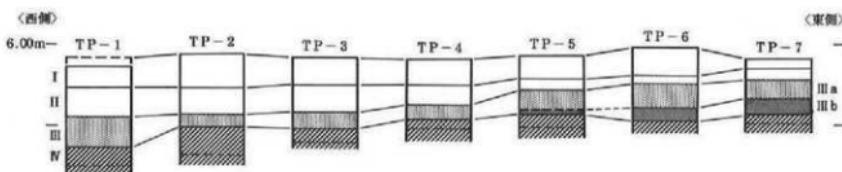
4) 基本層序と微地形

今回の確認調査で調査した7カ所の試掘坑は、基本層序ではほぼ同じ層位で理解できる。層序は大きく4層に大別される。第I層は、現在の水田耕作土であり、軟弱な粘土層で構成される。色調は淡灰褐色を呈する。第II層は、水田の床土をなす灰色粘土層である。遺物はほとんど含まれない。第III層が遺物包含層と認定した黒灰色粘土層である。TP-5～7試掘坑では上下2枚に分かれる。上層の第IIIa層は暗灰色粘土層で、下層の第IIIb層は黒灰色粘土層である。TP-1～4ではやや明色を呈し、暗灰色にちかい。遺物は下層のb層からの出土が多くなる。

第IV層は、明灰色粘土層であり、全体的には白みが強い粘土層である。本遺跡の粘土層は概して粘性が強いが、第IV層は特に粘性が強く、固く縮まっていた。色調は、7カ所の試掘坑全てで同じであり、陸地化等によって、空気に触れるなどの結果、酸化したというような状況は一切看取できない。このため、居住域には適さなかった可能性も想定できるが、しかし、わずかながらでも検出された遺構と、遺物の出土量を考えれば、酸化・還元化の差異は無視せざるを得ない。

遺構確認面の標高を見ると、最も西側に位置するTP-1が標高5.36mと最も低く、TP-5～7では若干の高低はあるが、概ね5.57mと20cmほど高くなる。つまり、今回の調査区域内で判断する限り、西側は深い湿地をなし、バイパス建設に伴い本発掘調査された東側へ徐々に高度を上げることが明かとなつた。また、遺構確認面の高まり区域は、TP-4以東で顕著となるが、遺物出土量が多く、遺構が検出された範囲と一致することになる。

また、第III層の堆積状況を見ると、TP-1～3までの第III層上面の標高はほぼ同じであり、遺構確認面とした第IV層が低くなるTP-1では第III層の層厚が相対的に厚くなる。このことは、西側に位置する中位段丘の延長は東側へ拡張せず、むしろ西側の丘陵裾に沿って湿地状の環境にあったものと理解することができる。



5.00m— 第I層：淡灰褐色粘土(耕土) 第II層：灰色粘土 第III層：黒灰色粘土(遺物包含層) 第IV層：明灰色粘土(遺構確認面)

第25図 小峯遺跡確認調査土層柱状図 (1:30)

3 遺構と遺物

1) 検出された遺構

確認調査によって検出された遺構は合計5基である。内訳は、土壌状の大型落ち込み2基、柱穴と考えられるピット3基であり、遺構の分布密度は低い。これは、遺構確認面の色調が淡灰色と、酸化が不充分な還元層であったことと無関係ではなく、集落内にあっても居住空間の縁辺に相当していた可能性が高いことを示している。

土壌とした2基は、ともにTP-5から検出された。両者は重機による掘り下げに際し、当初黒色粘土が連続し帯状に観察されたことから、性格は不詳ながら凹凸のある溝状遺構の可能性も考慮する必要がある。SK1に対しては、一部サブトレーナで発掘を試み、30cmほどの深度と壁、および小片ながら土師器1点を確認したことにより遺構と判断したものである。

柱穴と考えられるピット3基は、TP-6から1基(SKP-3)、TP-7から2基(SKp-4・5)が検出されている。比較的プランが明確であること、当該試掘坑からの遺物出土量が多かったことから、半截等は試みなかった。規模およびプランは2種あり、円形で小規模なもの(SKP-3・5)と長方形を呈しやや大型のもの(SKp-4)がある。発掘面積が小さく、これら柱穴の並びや建物の復元はできなかった。

2) 出土遺物

今回の確認調査で出土した遺物のはほとんどは、土師器・須恵器の土器類であり、このほかでは板状の木製品や礎等が、土師器・須恵器と同じ包含層内から出土している。出土遺物の時期は、大半が古代であり、わずかに中世とされる青磁破片1点が確認されている。

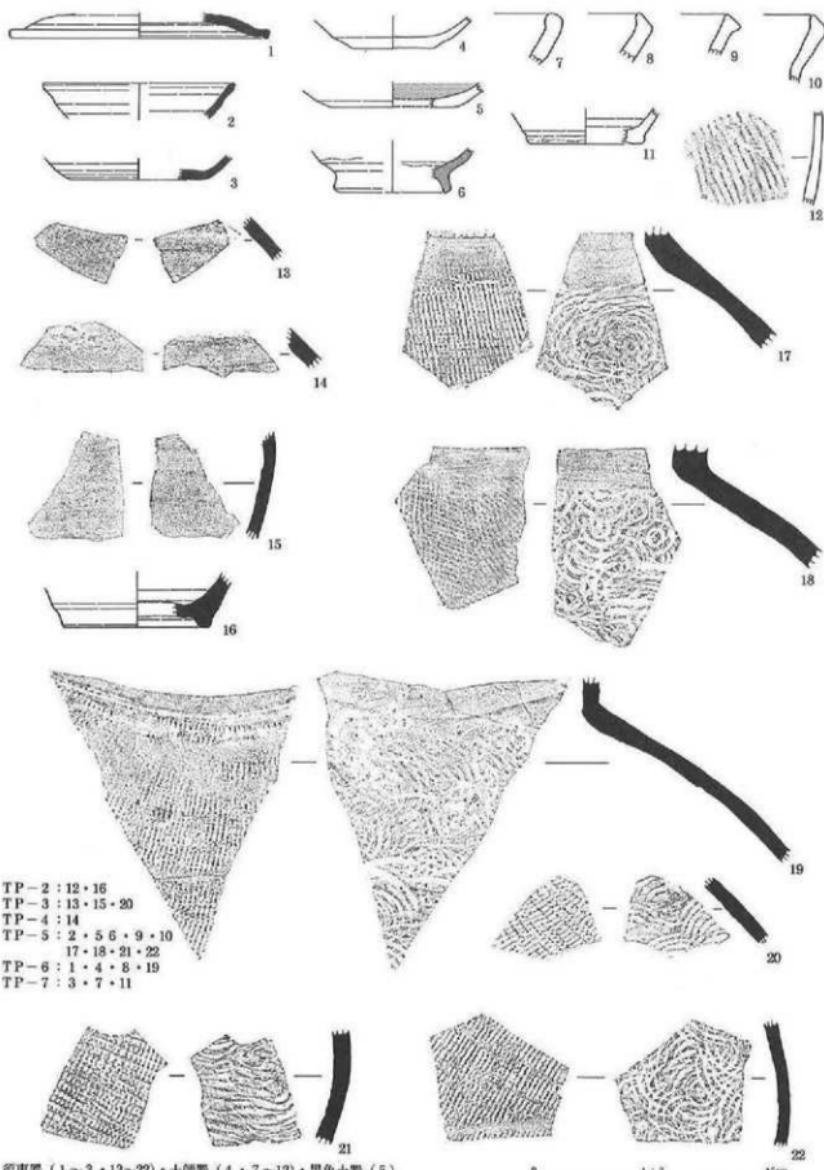
出土した土器類の総数は、細小破片を案分した概数で計算すれば、およそ400点(約3.6kg)となるが、発掘を重機によって行っているため、減失分を含めればもう少し多くなることが見込まれる。各試掘坑の出土量はすでに述べたが、TP-5～7の3カ所からの出土量は、総数の7割を占めるおよそ280点、重量ではおよそ8割となる2.9kgと多くなっている。

土器類の種別は、土師器・須恵器・黒色土器(内黒)・灰釉陶器・青磁である。その内訳は、土師器がおよそ9割、須恵器は約8%ほどを占め、その他には黒色土器が数点、灰釉陶器が2点、青磁が1点となる。これら出土遺物から見た当該地点の主体は、平安時代中期(9世紀末～10世紀前半頃)とすることができる。以下では、古代の土器類について概略を述べたい。

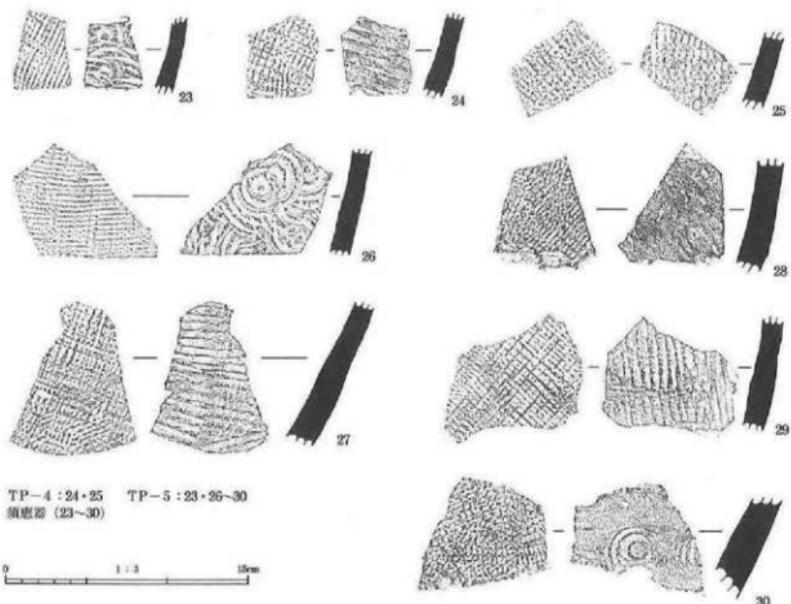
須恵器(第26図1～3・13～22、第27図23～30)

出土量は土師器より少ないが遺存状況が良好なため、國化資料の大半を占めることとなった。器種は、食膳具の杯蓋(1)・無台杯(2・3)、貯藏具では瓶類(13～16)と甕類(17～30)がある。ほとんどが佐渡小泊窯系の製品である。

1の杯蓋は、推定口径約16.0cm、天井部は低く、口縁端部はやや潰れた状況を呈する。天井部外面はヘラによる切り離し後、前面にわたってナデ調整が施されている。2の無台杯は口縁部の細片のため、正確な口径の計測は難しい。器厚は薄く、口縁部内面がややくぼむ。焼成は不良。3は、底面付近のロクロナデは細かいが、焼成は甘い。底径はおよそ8.0cm。概して薄手である。



第26図 小峩遺跡確認調査出土土器 (1)



第27図 小峯遺跡確認調査出土土器（2）

瓶類は底部破片の16を含め細片で占められ、全体の器形をうかがえるものはない。出土位置にもばらつきがあるが、出土量はこの4点でかなり少ないとなる。16の底径は約9.1cm。甕類は、大半が大甕と考えられる。大型品で占められるため破片数は多くなっている。頸部から胴部下半までの破片が出土しているが、口縁部はない。

土師器（第26図4・7～12）

土師器の出土量は須恵器よりはるかに多い。しかし、ほとんどが小片で、摩滅度が著しく、図化に至らなかった。主体は、椀と甕類である。4は椀の底部、底径は約5cm。7～10は長甕の口縁部である。11は小甕の底部で、底径7.3cmを計る。12は長甕の胴部破片である。外面にタタキ痕が残るが、内面のアテ具痕は摩滅により不明である。

黒色土器（第26図5）

焼成及び遺存が良好な個体は、図示した1点である。5は、いわゆる内黒土器である。推定底径はおよそ7.5cmであり、やや大型の部類と見られる。

灰釉陶器（第26図6）

數片の出土を見たが、全て細片であり、図化に至ったのは1点である。6は、定型化した三日月高台を持つ椀で、灰釉はハケ塗りと見られる。黒釉90号窯式に対比が可能であり〔斎藤1989〕、時期的には9世紀後半でも中段階から後半頃が考えられる〔前川1989〕。

4 調査のまとめ

今回の確認調査は、わずか一日間というあわただしい日程の中で実施され、実際の発掘面積も、開発区域全体からすれば、わずか数%と極めて狭いものとなった。このような数値で、遺跡全体の状況を推し量ることは難しいが、今回対象とした工事区域内の状況を中心に検討し、まとめを試みたい。

調査で得られた土器類は、そのほとんどが平安時代の須恵器・土師器であり、中世以降の遺物はほとんど確認できなかった。このことから、当該事業区域内に所在する遺跡の時代は、平安時代にはば限定して捉えることができる。また、遺跡の性格としては、発掘範囲が狭いため具体的に示すことはできないが、柱穴と考えられるピットが数基検出されたことから、建物跡などによって構成される集落跡とすることが可能である。そこで、各試掘坑における遺構確認面（第Ⅳ層）の標高をうかがうと、TP-4以東において周囲より高くなっている。遺構が検出され、遺物出土量が多かったTP-4以東こそが、集落内の居住域に該当するエリアと見なすことができる。これに対し相対的に低くなるTP-4以西については、遺物出土量が概して多かったことを考慮すれば、居住域と低湿地の境界付近に相当するものと考えられ、県埋文事業団調査区内で検出された古代の水田跡の存在からすれば、一部において水田等が造成されていた可能性が高いとみられるのである。

ところで、これまで認識してきた小峯遺跡の範囲は、「小峯」と称されるような中位段丘の名残りをとどめる小丘を中心とした広がりが想定され、その周間に設定されていた。しかし、今回の調査結果を見ると、それぞれの試掘坑から出土した遺物量は意外に多く、小丘付近からさらに西側の沖積地へ大きく広がっていたことを示している。また、50片以上の土器片が出土した試掘坑は4カ所に上り、最も多かったTP-6では100片をはるかに超え、最も少ないTP-1でも10片あまりが得られている。この事実は、遺物の包含状況が比較的濃密であることを示すとともに、これら土器類が炊事道具である壺や鍋、食膳具の杯碗類であることは、当該事業用地のはば全域が日常的な居住生活の範囲、あるいは主体となるエリアに隣接していたことを物語っている。

県埋文事業団が調査したバイパス本線内の調査結果を見ると、丘陵部はすでに削平されており、遺構の有無など詳細は不明とされる。しかし、沖積地でも水田や溝跡が確認されても、居住施設となる建物跡は確認されておらず、少なくともその分布は希薄である〔県埋文事業団1998〕。かつて実施されたバイパス法線内における遺跡の分布調査では、本遺跡発見の発端となった遺物散布地点は当該小丘の北西先端部であり、かなり多くの遺物が採集されていた。そして、今回の確認調査で得られた遺物量が意外に多かったことは、本遺跡の規模を推察させるものであり、それは小規模な集落ではない。遺物量に相当する小峯遺跡の本体とは、小峯丘陵の西側、そして今回の確認調査区の北側を占める水田内に想定することが妥当と判断したい。

さて、今回の調査区内で検出された遺構確認面（第Ⅳ層）は、すべて還元層であった。この事実は、湿地的環境が長かったことを物語っている。確認調査の出土遺物をみると、ほぼ古代に限定される。県埋文事業団調査区内でも、中世の遺物は出土した。しかし、遺構の主体は古代にあり、中世以降の遺構はほとんど検出されていない〔県埋文事業団前掲〕。中世以降の居住可能区域は、削平された丘陵などに移行し、沖積地内では、古代集落が湿地化などの環境の変化とともに廃絶した後、水田化はなされても再び居住に適することはなく、結果的に還元化が促進されたことが、今回の調査結果からうかがえるのである。

第25図 小堀道路周辺の地形と道路指定範囲



VI 総 括

平成11年度に実施した柏崎市内遺跡（第IX期）発掘調査事業は、あわせて4件3遺跡となった。調査原因別に見ると、県道・市道の改良工事等が3件（柏崎町遺跡第3次・藤井城跡・小峯遺跡）、行政主導型の民間開発でもある市街地再開発事業に伴うものが1件（柏崎町遺跡第2次）となった。近年の動向として、民間開発に伴う確認調査等は減少傾向にあるが、それでも例年1件程度は実施してきた。しかし、本年度は民間単独事業によるものではなく、公共・準公共の事業で占められた。

柏崎町遺跡については、第2次調査で実施した市街地再開発関連の試掘・確認調査が平成10年度末の第VIII期調査から平成11年度初期に至る第IX期調査にまたがり、特に平成10年度未実施分については、報告書の作成が間に合わなかったことから、本年度にあわせて報告することとしたものである。第2次調査で初めて中世包含層と遺構群を検出し、平成11年度において7月から12月までの長期間にわたる本発掘調査が実施された。第3次調査は、県道の改良事業にともない第2次調査区域の東側を対象としたもので、遺跡範囲について検討を加えることのできる成果が挙げられている。

藤井城跡は、市道改良工事に伴うもので、前後2回の試掘確認調査を実施した。第1次調査では、近世以降近現代の遺物が主体で、わずかに古代の遺物を包含する遺構が検出されたことから、第2次調査を実施し、古代・中世の遺構等を確認することとしたものである。しかし、結果的には近世中・後期以降が主体であり、本発掘調査には至らなかった。しかし、藤井城跡に対する初めての考古学的な調査であり、藤井城築城とその後の展開を示唆する遺構群が検出されたことは、地域史の観点からすれば大きな意味を持つものとなった。

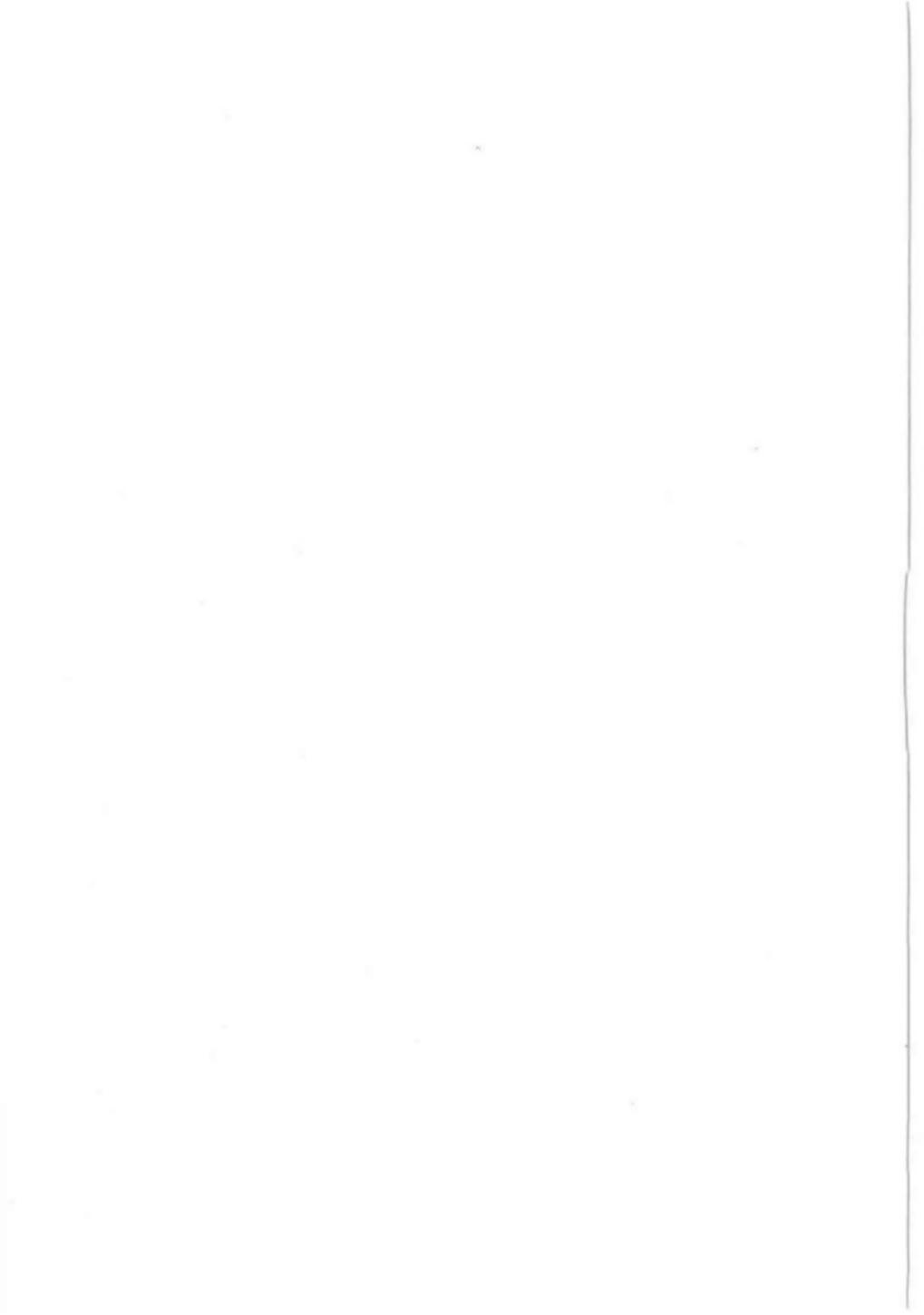
小峯遺跡は、国道8号線柏崎バイパス建設にともなう調査がすでに終了しているが、今回の調査区域はこの隣接区域を対象とした。遺構確認面そのものは還元状態にあり、長く湿地状況にあって居住環境としては不向きといえる結果であった。しかし、散漫ながら柱穴と考えられる遺構が検出され、比較的多くの古代土器群が出土した。これらの調査成果から、平成12年度には本発掘調査の実施が予定されている。

以上のように、調査を実施した3遺跡でさまざまな成果が挙げられ、柏崎町遺跡と小峯遺跡では本調査の実施に結びつくものとなった。当該地域史解明に大きく寄与する成果があり、今後も当該事業を有効に活用していくこととしたい。

《引用・参考文献》

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
大橋康二 1983 「『北前陶磁』(考古学ライブラリー-55) ニュー・サイエンス社
小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
柏崎市教育委員会 1998 『柏崎市の遺跡Ⅸ』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第29集)
斎藤孝正 1969 「灰釉陶器の研究」『名古屋大学文学部研究論集』104 史学35』
新宿区四谷三丁目遺跡調査団・東京消防庁 1991 『江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)』(『四谷三丁目遺跡』別冊)
新潟県埋蔵文化財調査事業団 1998 「新潟県柏崎市小峯遺跡現地説明会資料」
前川 要 1989 「平安時代における旅宿陶磁器の模式論的研究(下)」『古代文化』第41巻10号
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

図 版



柏崎町遺跡（第2次） 1



柏崎町遺跡周辺航空写真（1947年 約1:20,000 左が北）

柏崎町遺跡（第2次）2



a. 下町側（C～F地点）調査区近景

（西から）



b. 上町側（G・H地点）調査区近景

（北西から）

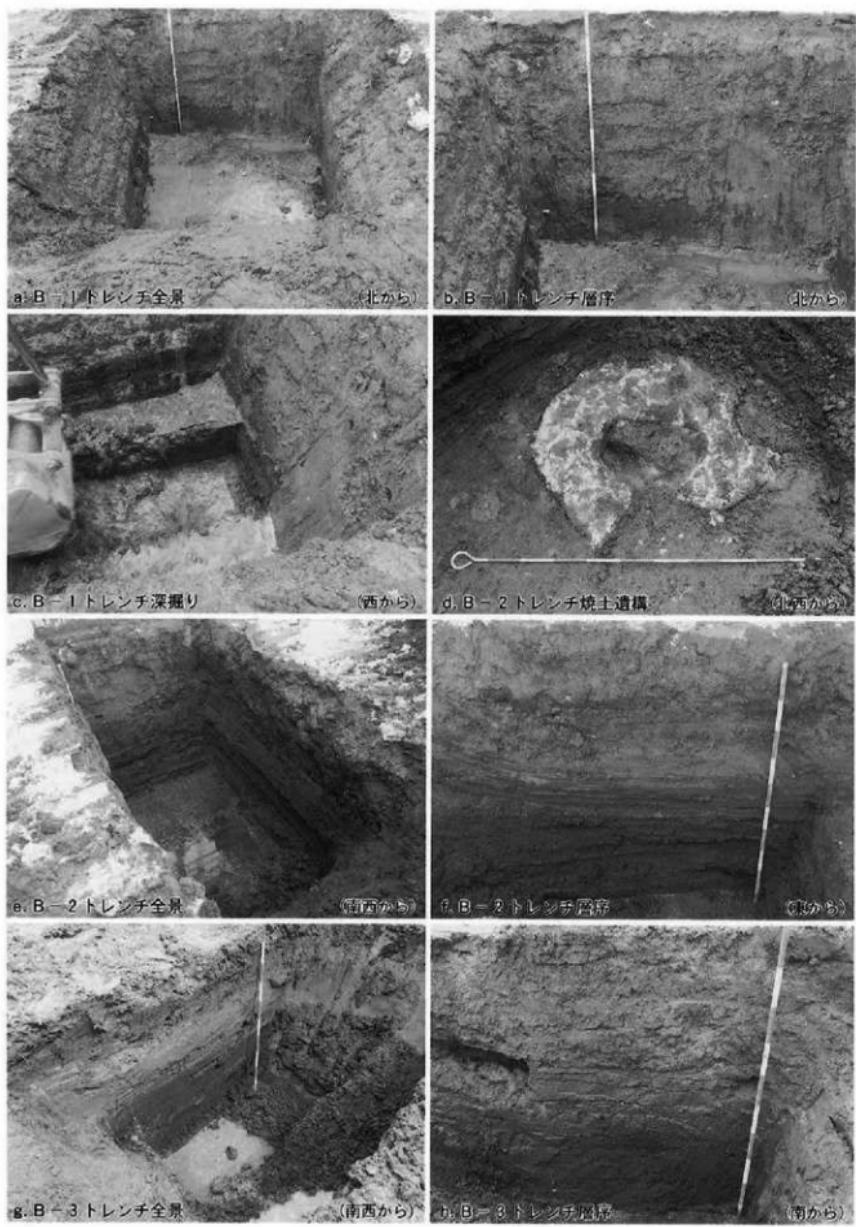
柏崎町遺跡（第2次）3



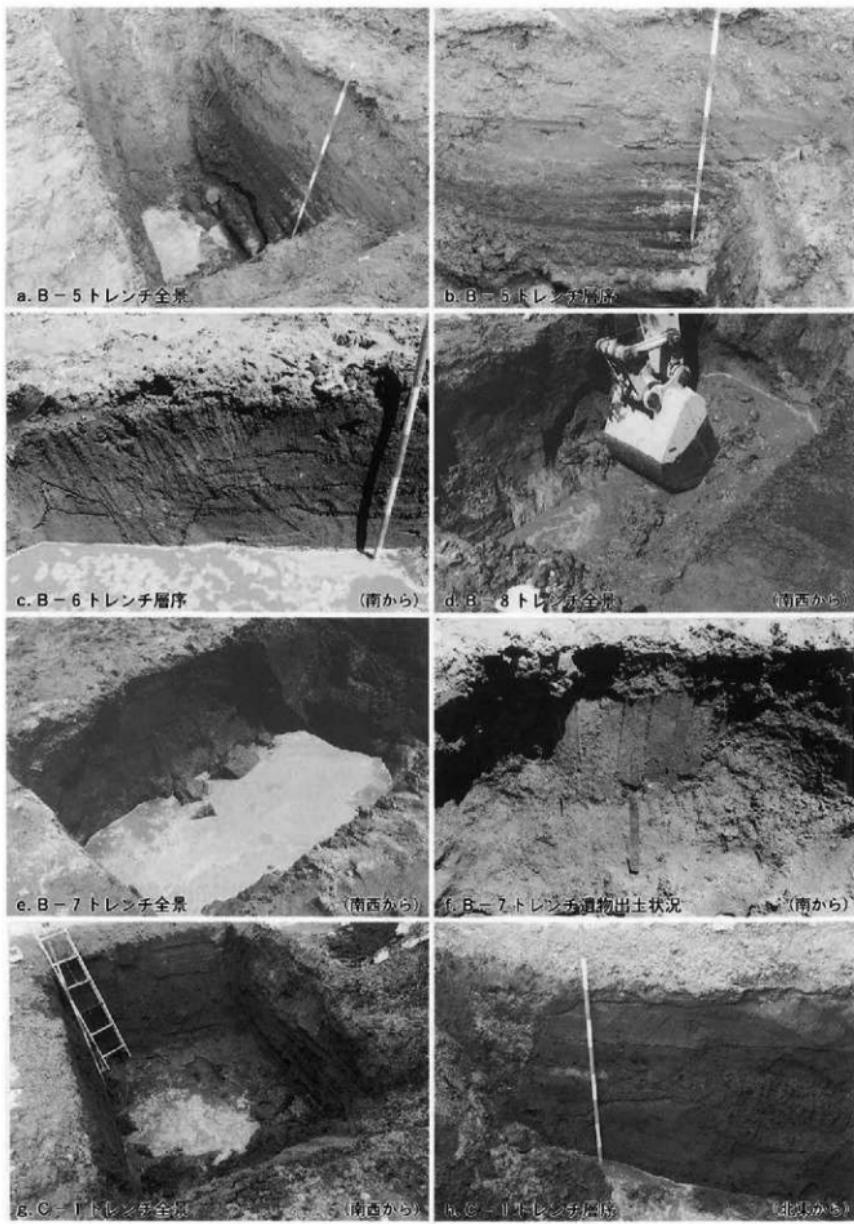
柏崎町遺跡（第2次）4



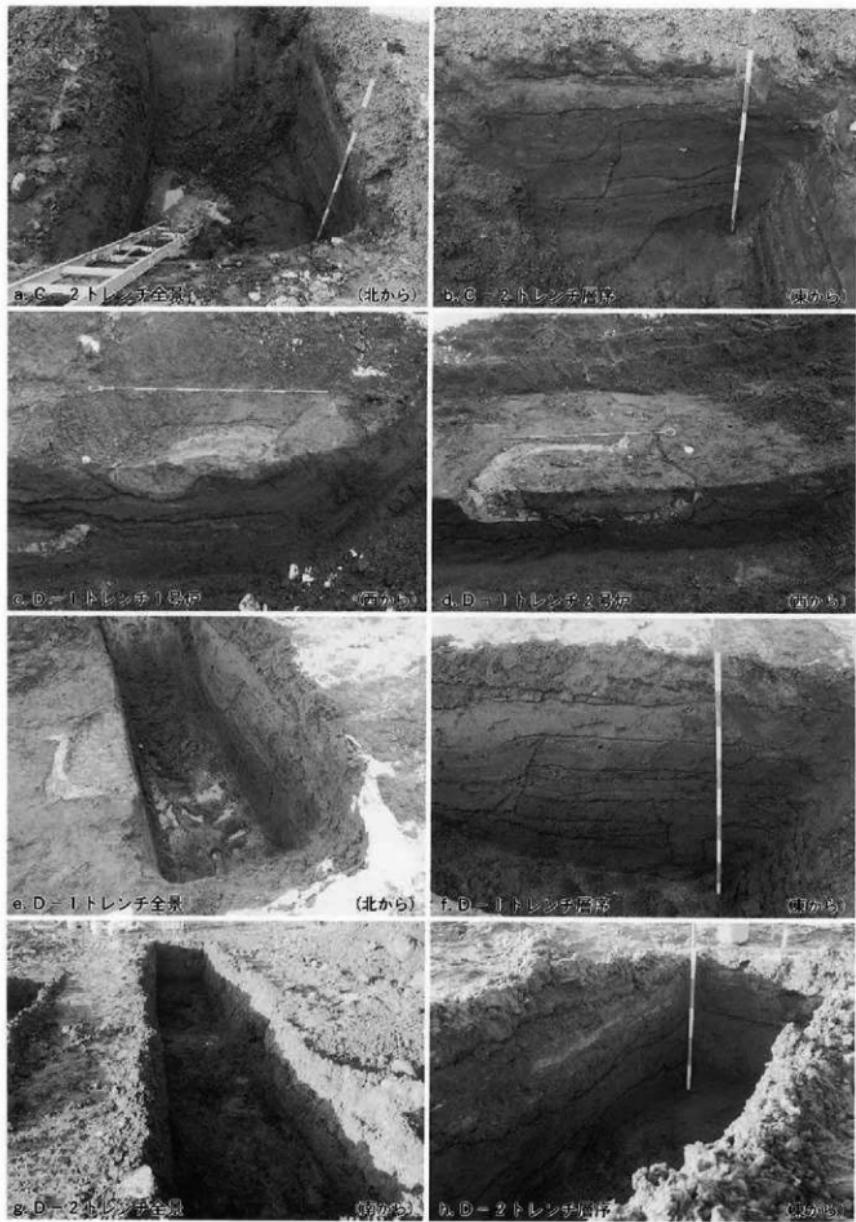
柏崎町遺跡（第2次）5



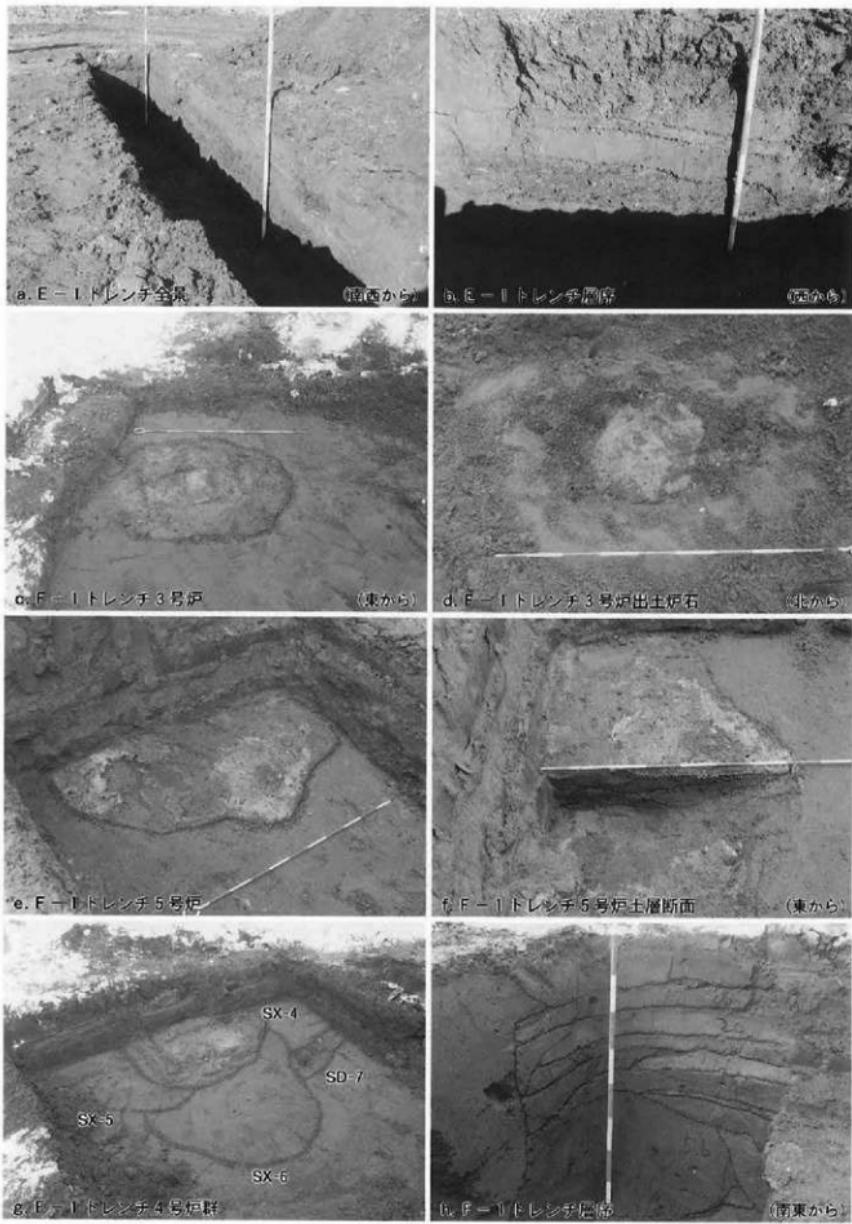
柏崎町遺跡（第2次） 6



柏崎町遺跡（第2次）7



柏崎町遺跡（第2次） 8



柏崎町遺跡（第2次）9



柏崎町遺跡（第2次）10



a. G-3 トレンチ検出遺構 (南から)



b. G-4 トレンチ検出遺構 (南から)



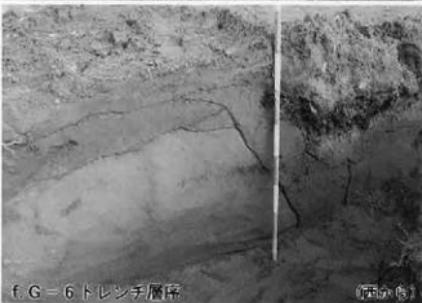
c. G-5 トレンチ全景 (南西から)



d. G-5 トレンチ東壁層序 (西から)



e. G-6 トレンチ全景 (南から)



f. G-6 トレンチ層序 (西北から)

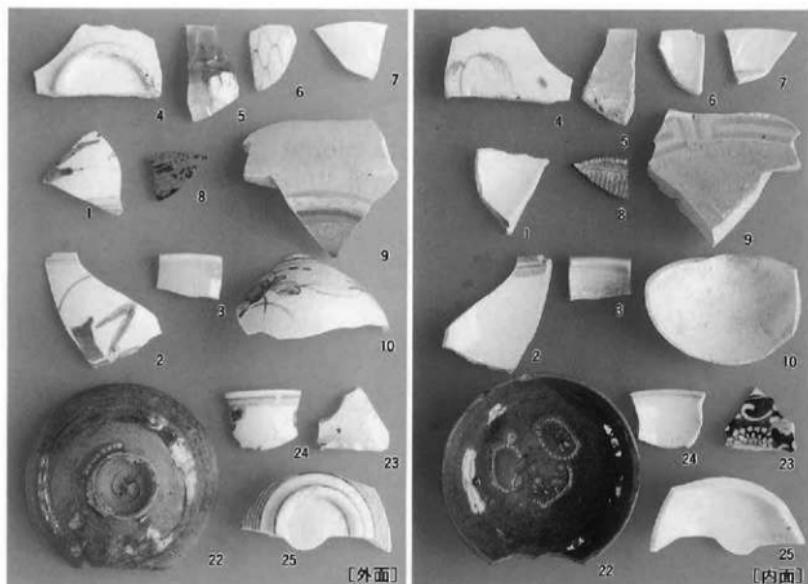


g. H-1 トレンチ全景 (北西から)

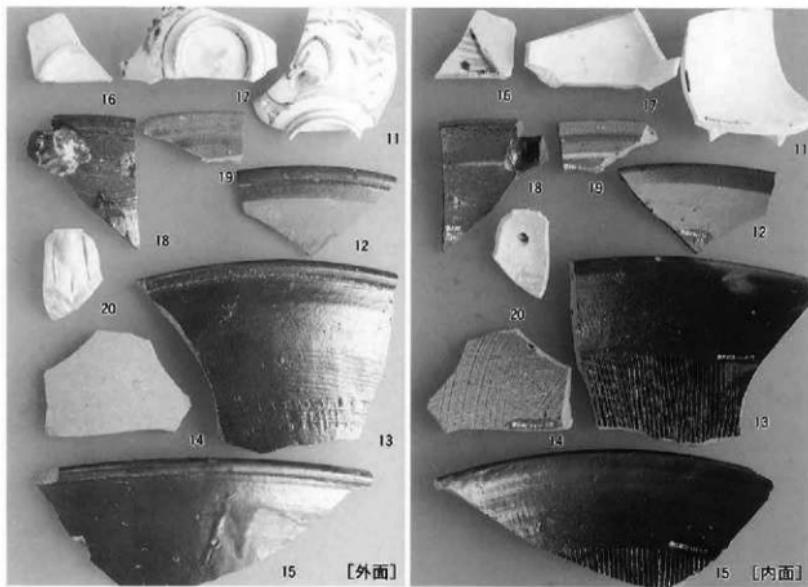


h. H-1 トレンチ層序 (北から)

柏崎町遺跡（第2次）11



a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-1 トレンチ） (約1:3)

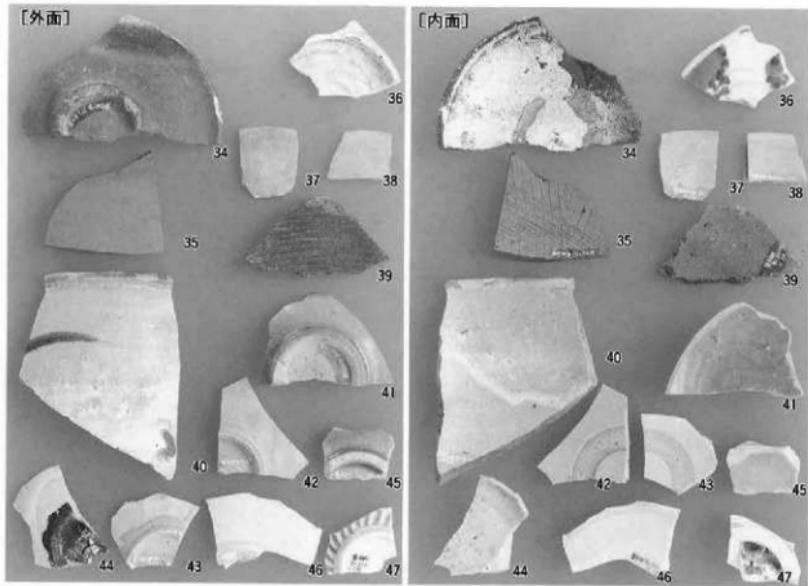


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-1 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）12

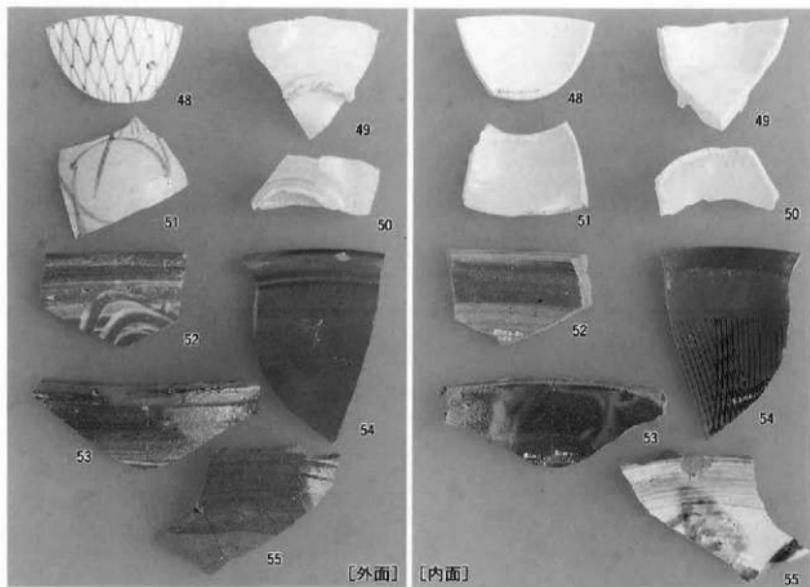


a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-3 トレンチ） (約1:3)

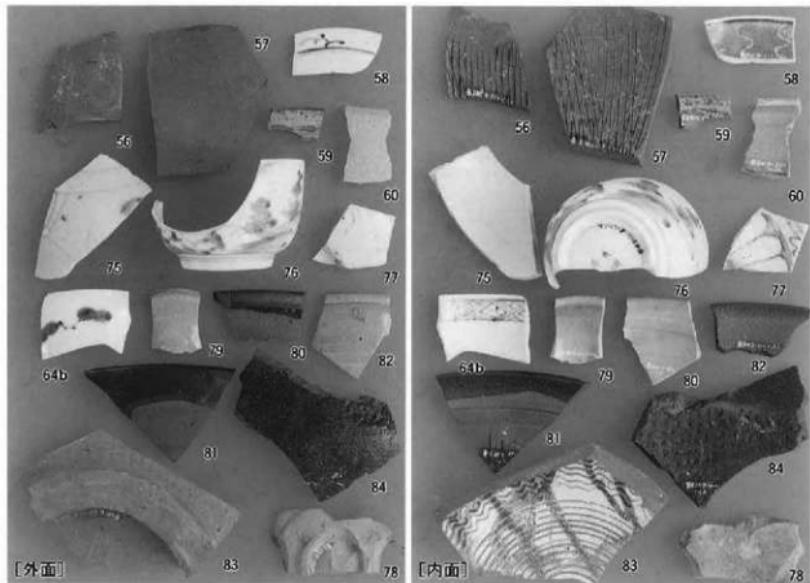


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-3 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）13

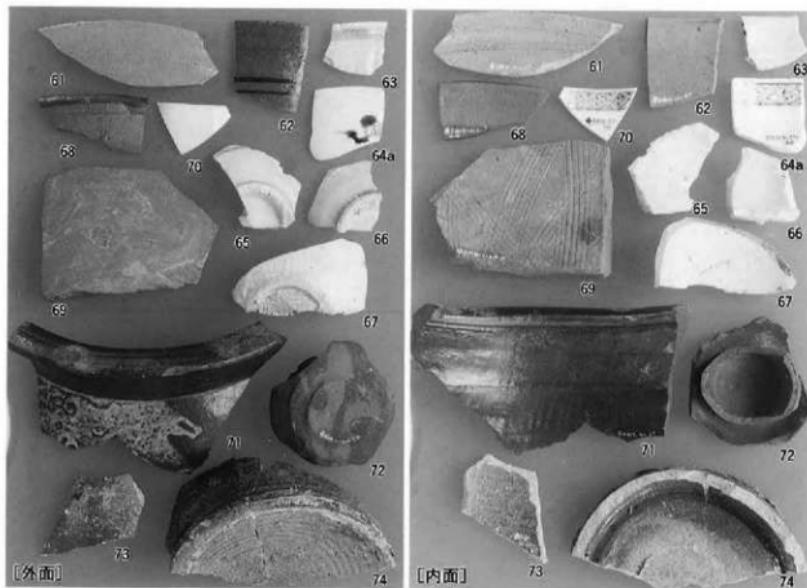


a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-3 トレンチ） (約1:3)

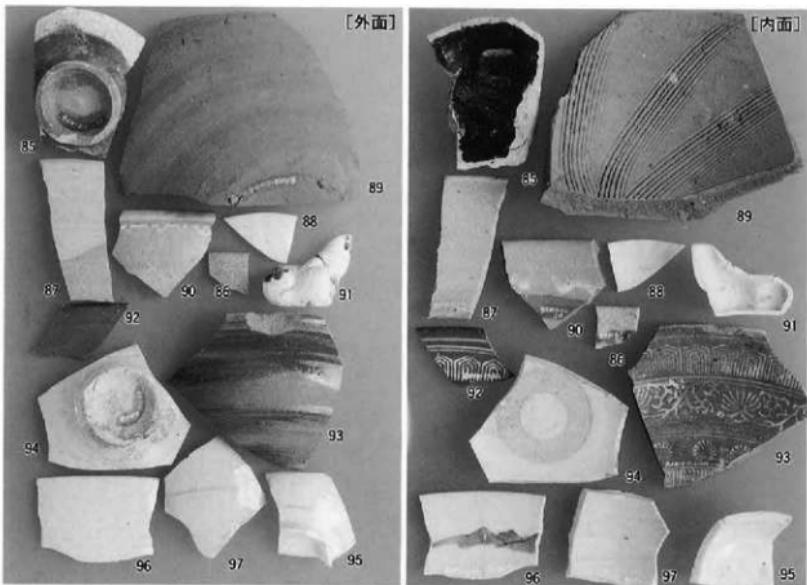


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-3 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）14

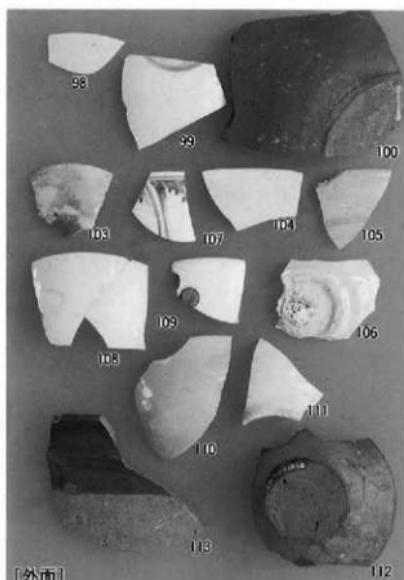


a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-4 トレンチ）(約1:3)

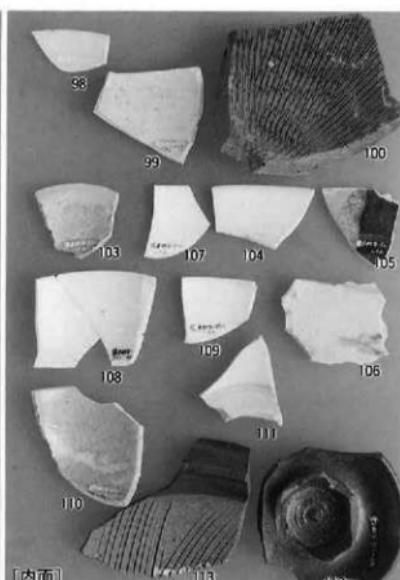


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-5 トレンチ）(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）15



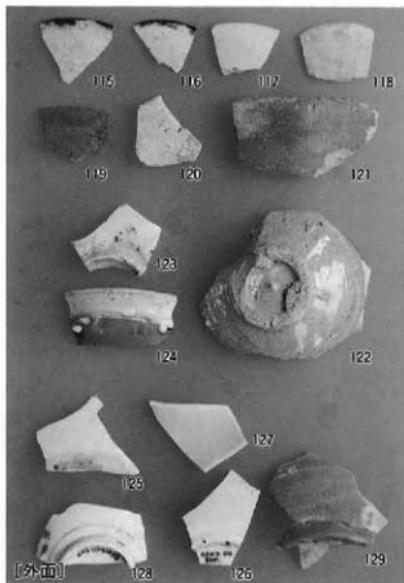
[外面]



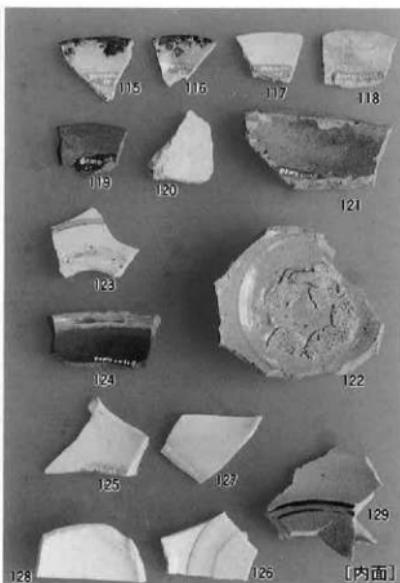
[内面]

a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-5 トレンチ）

(約1:3)



[外面]



[内面]

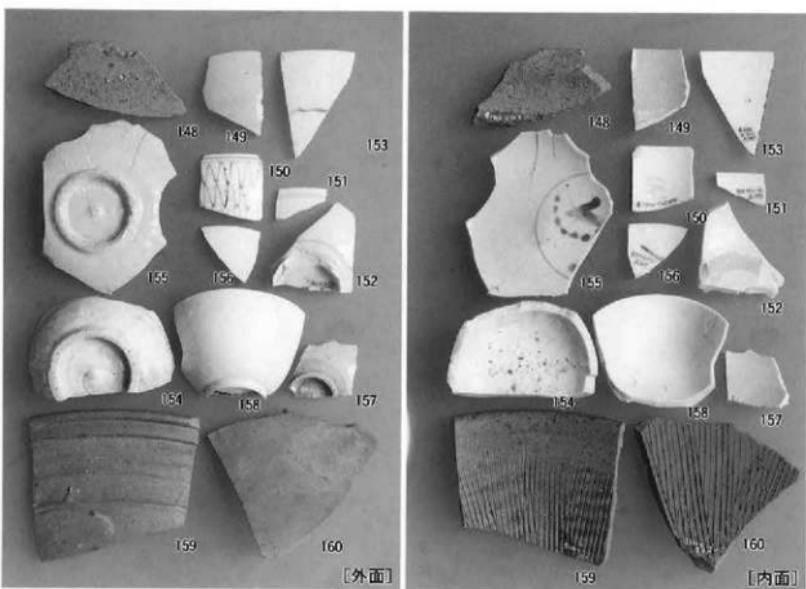
b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-6 トレンチ）

(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）16



a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-6 トレンチ） (約1:3)

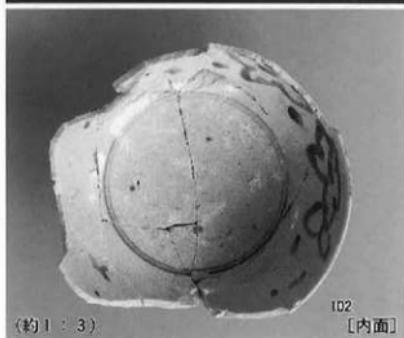


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-7 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）17

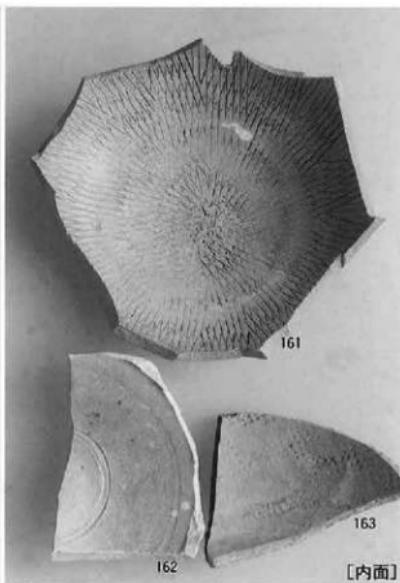
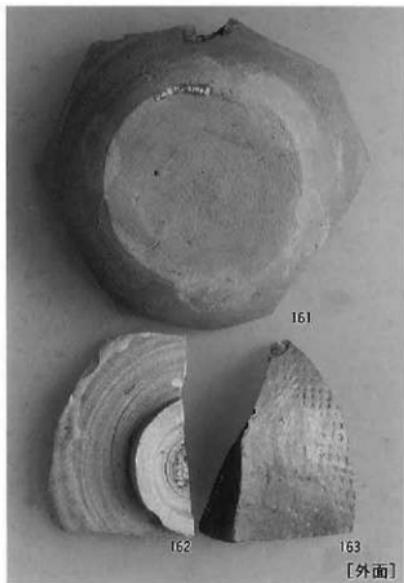


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B-5 トレンチ）



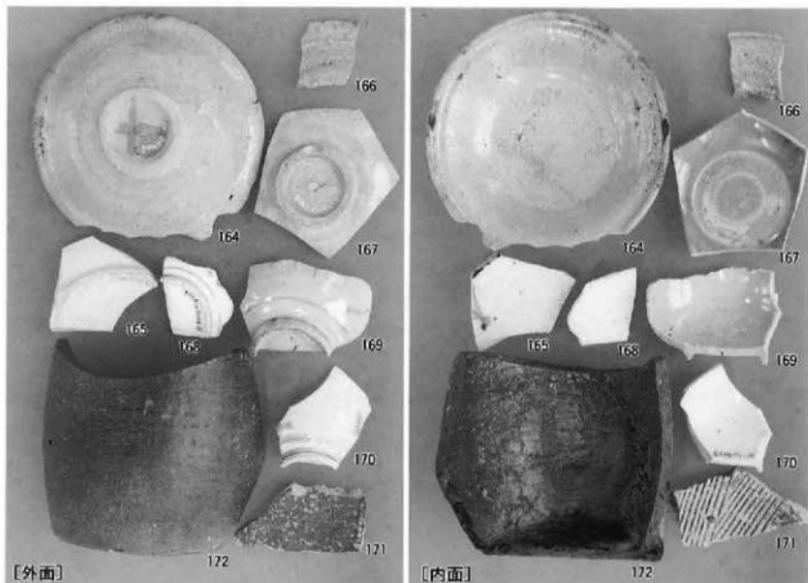
a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-5 トレンチ）

c. 出土遺物（土器・陶磁器 B-1 トレンチ）

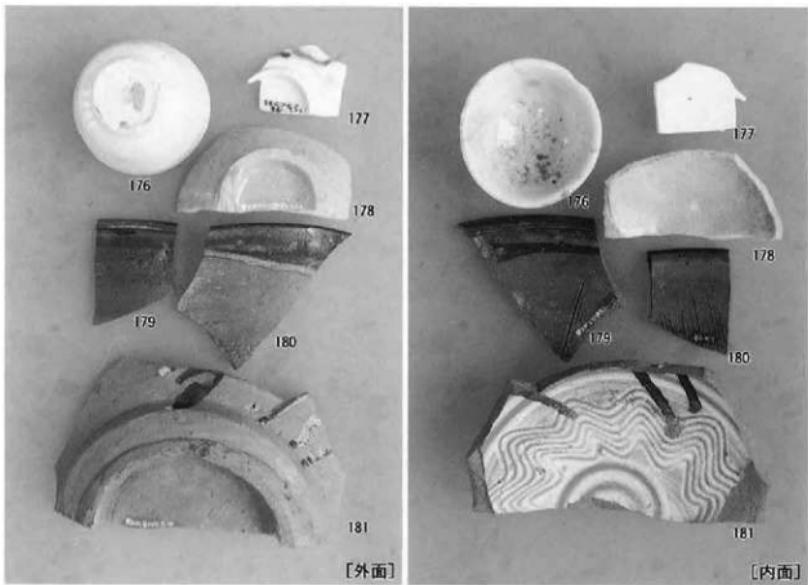


d. 出土遺物（土器・陶磁器 B-7 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）18

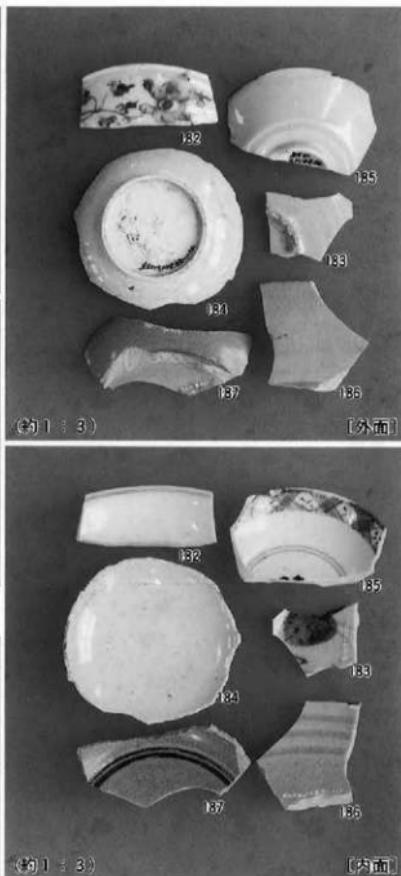
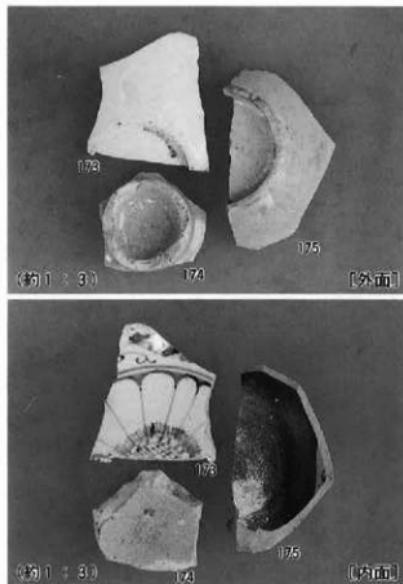


a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-7 トレンチ） (約1:3)

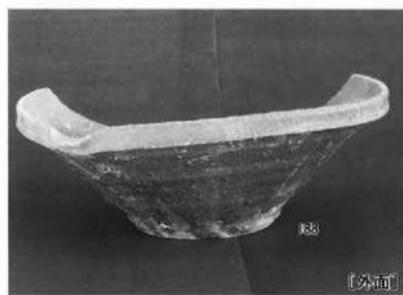


b. 出土遺物（土器・陶磁器 B 地点） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）19



a. 出土遺物（土器・陶磁器 B-9 トレンチ）



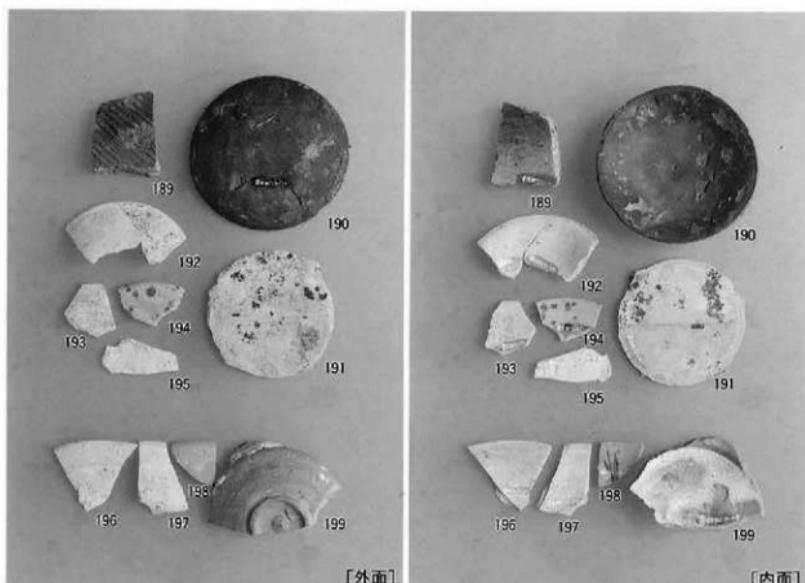
b. 出土遺物（土器・陶磁器 B 地点）



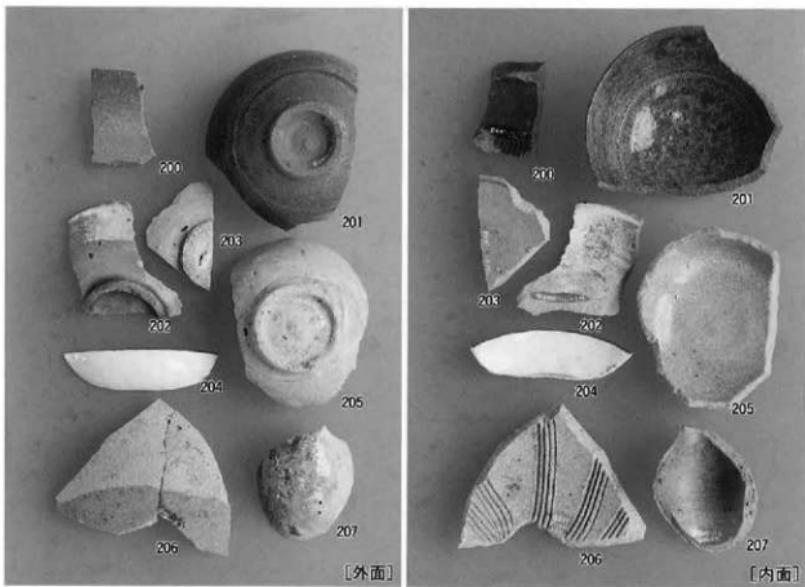
(約1:4)

c. 出土遺物（土器・陶磁器 B 地点）

柏崎町遺跡（第2次）20

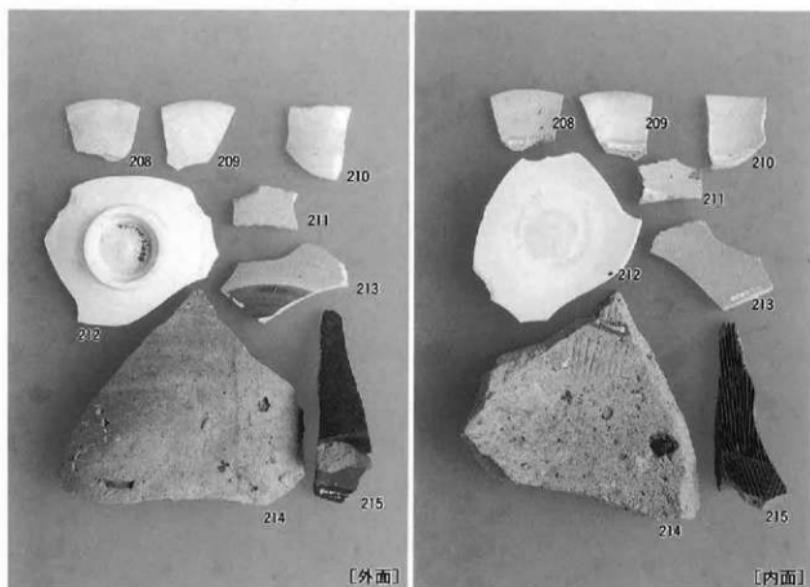


a. 出土遺物（土器・陶磁器 C-1 トレンチ）(約1:3)

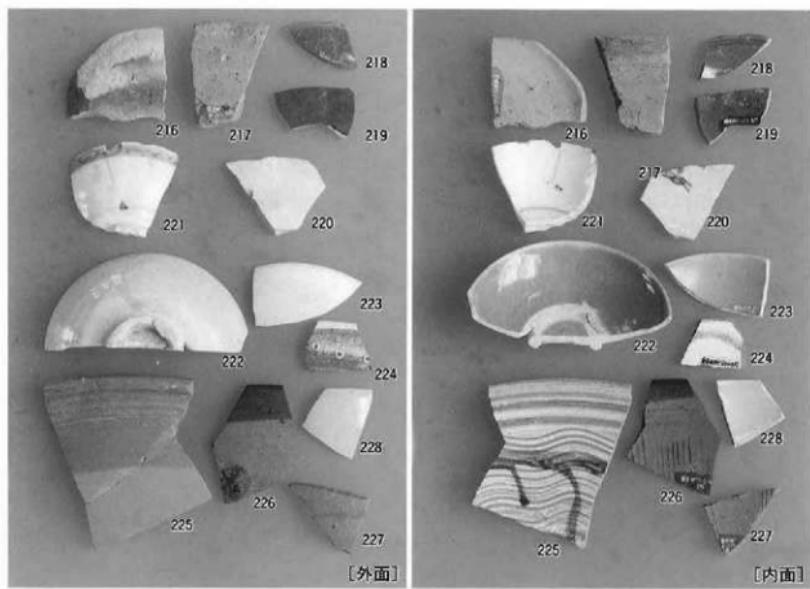


b. 出土遺物（土器・陶磁器 C-1 トレンチ）(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）21

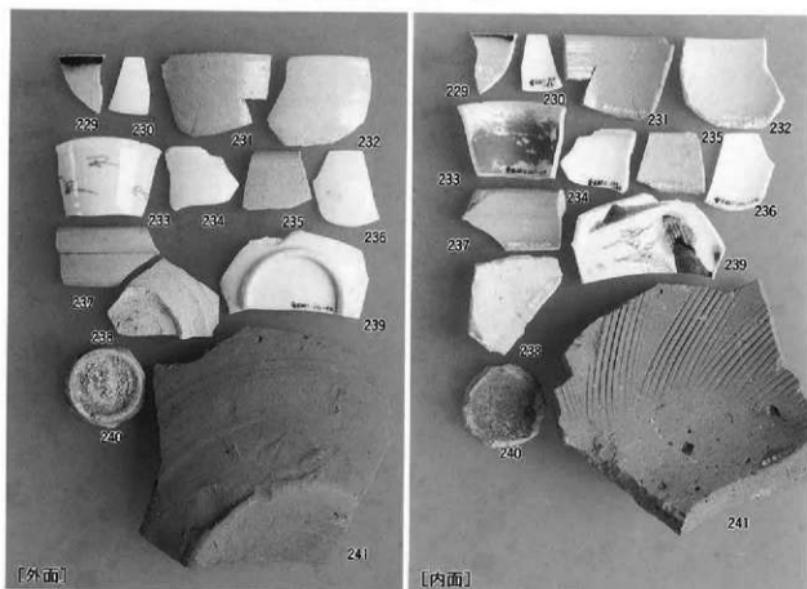


a. 出土遺物（土器・陶磁器 C-1 トレンチ） (約1:3)

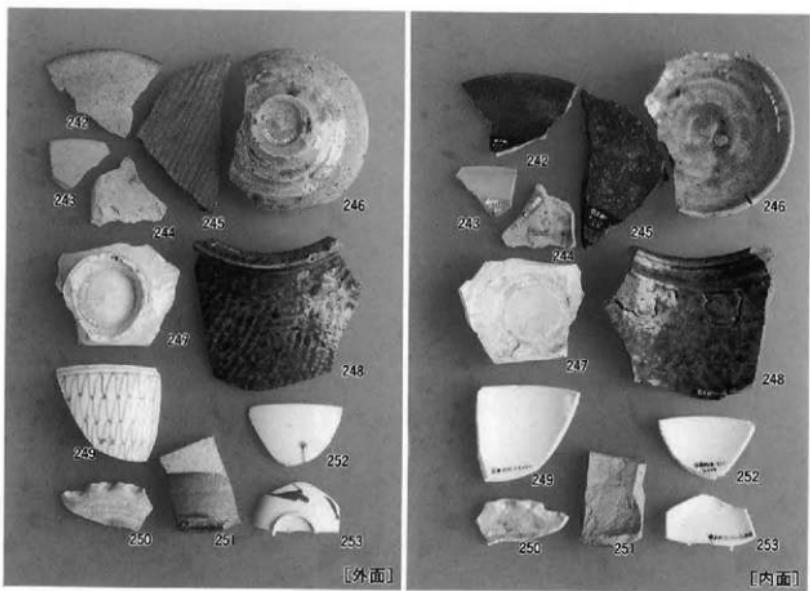


b. 出土遺物（土器・陶磁器 C-2 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）22



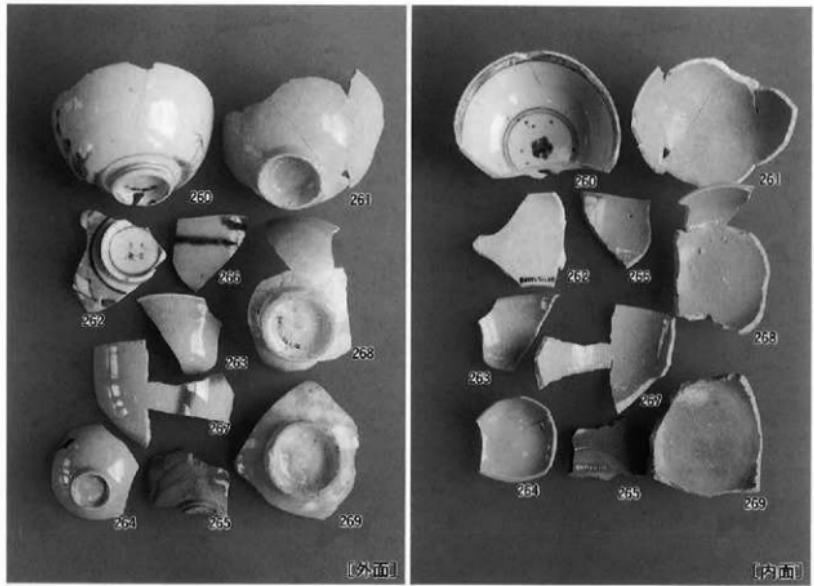
a. 出土遺物（土器・陶磁器 C-2 トレンチ）(約1:3)



b. 出土遺物（土器・陶磁器 D-1 トレンチ）(約1:3)

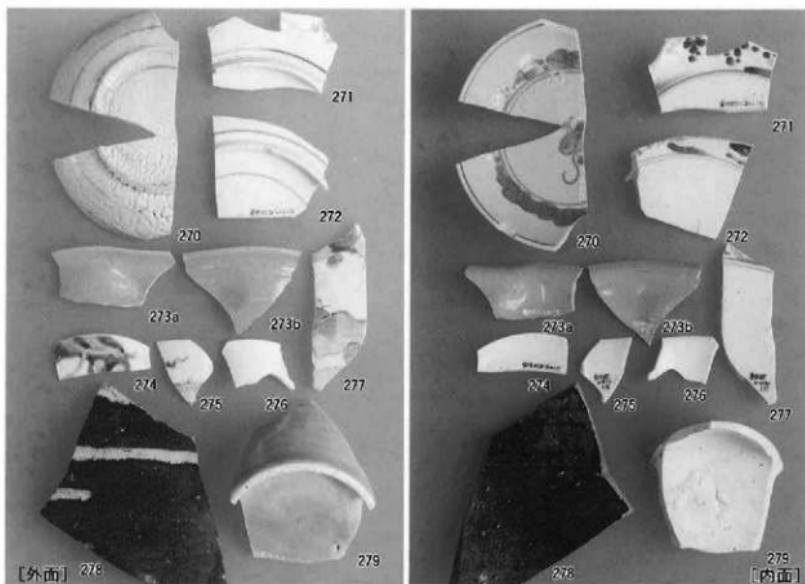


a. 出土遺物（土器・陶磁器 D-1 トレンチ）（約1:3）

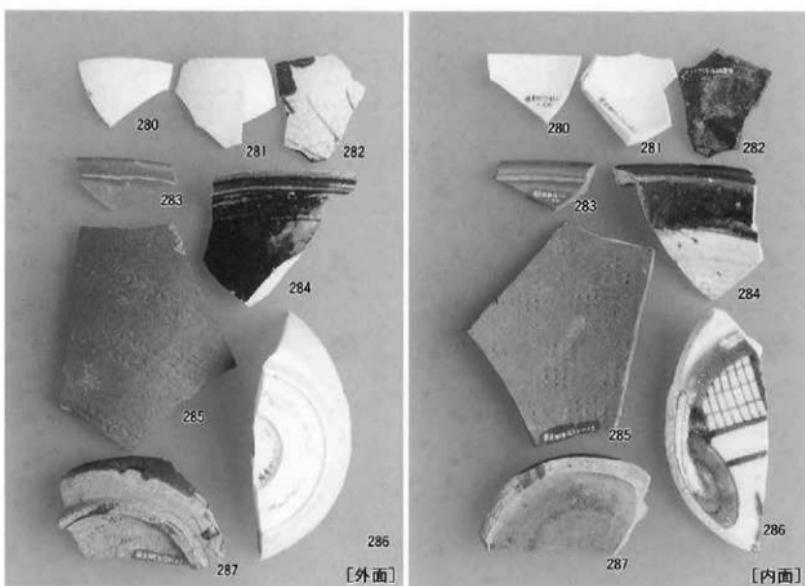


b. 出土遺物（土器・陶磁器 D-2 トレンチ）（約1：3）

柏崎町遺跡（第2次）24

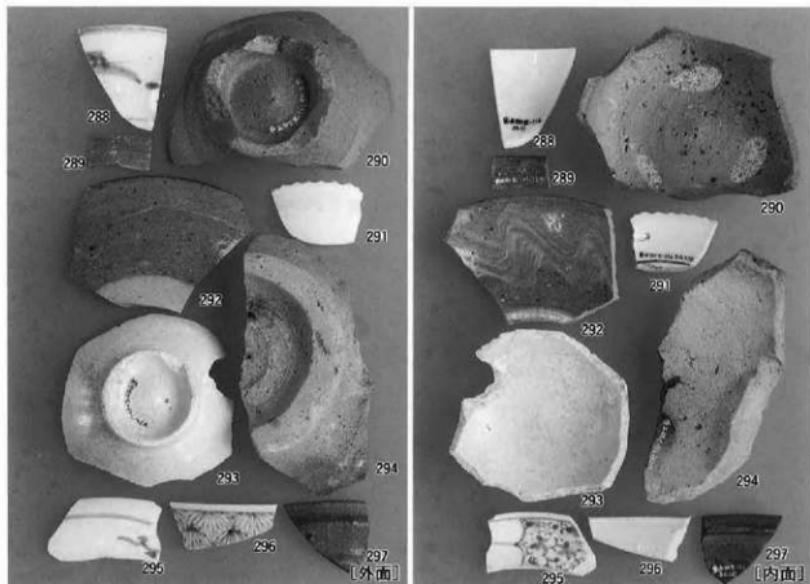


a. 出土遺物（土器・陶磁器 D-2 トレンチ） (約1:3)

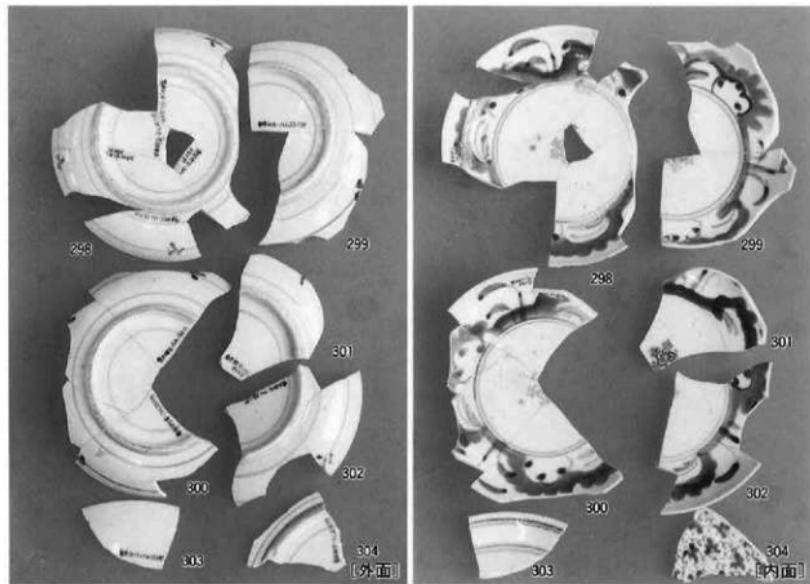


b. 出土遺物（土器・陶磁器 D-2 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）25

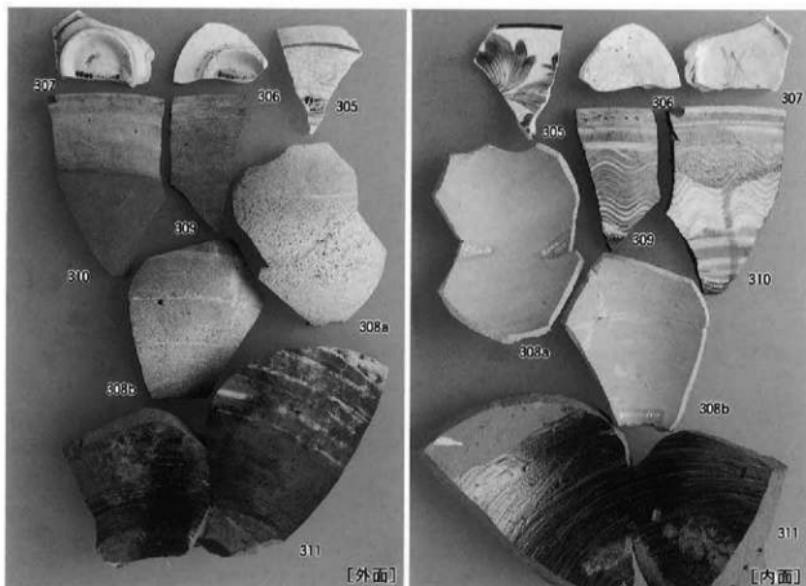


a. 出土遺物（土器・陶磁器 E-1 トレンチ）(約1:3)

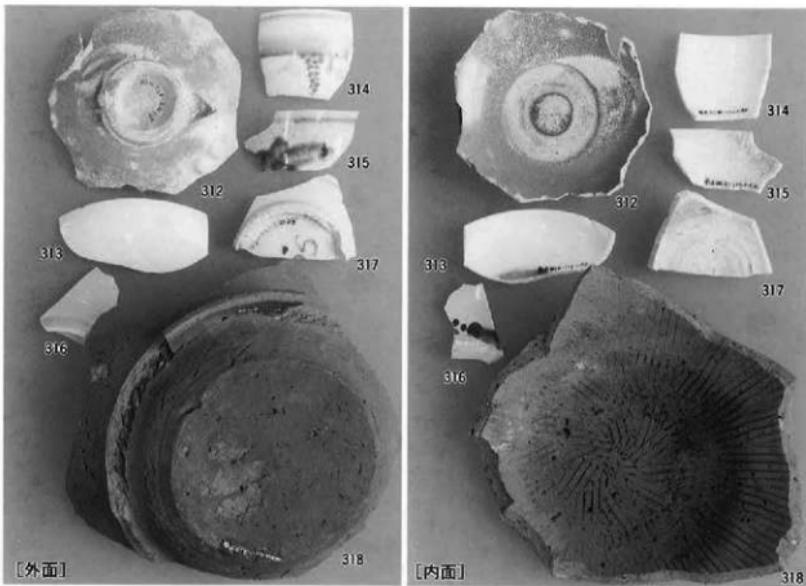


b. 出土遺物（土器・陶磁器 E-1 トレンチ）(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）26

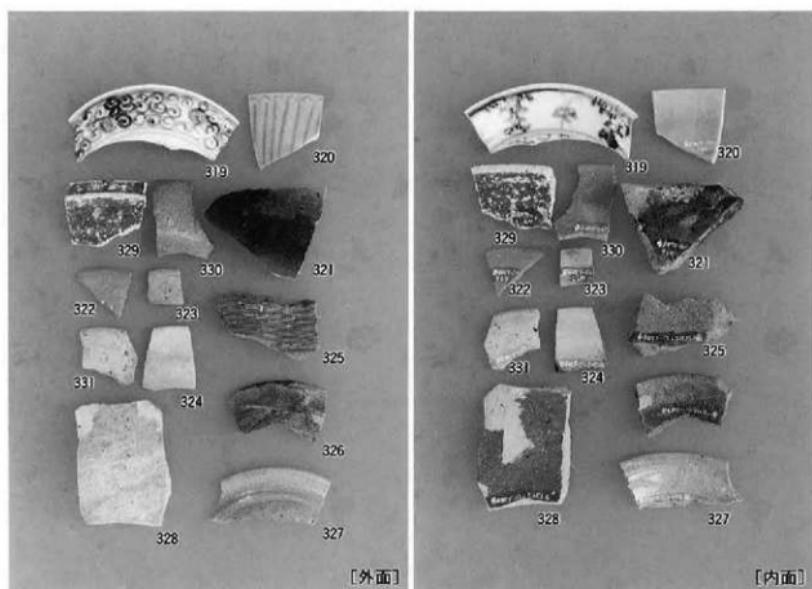


a. 出土遺物（土器・陶磁器 E-I トレンチ）(約1:3)

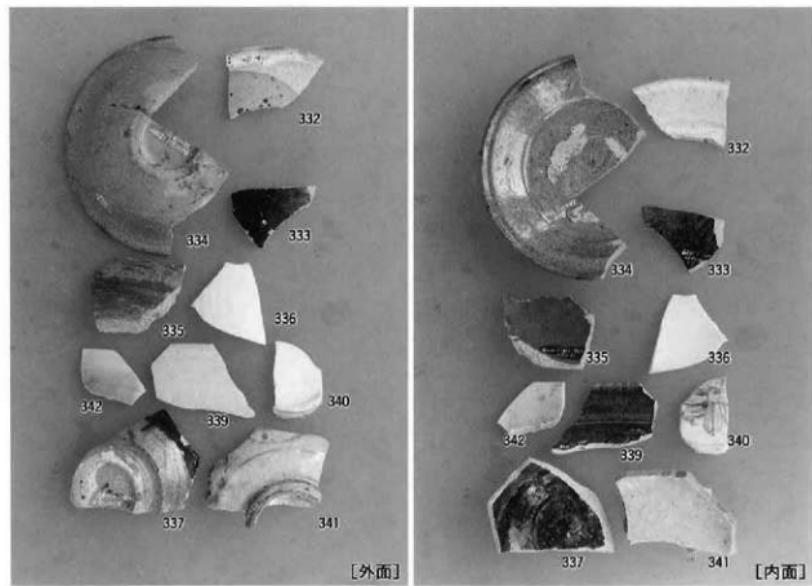


b. 出土遺物（土器・陶磁器 E-I トレンチ）(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）27

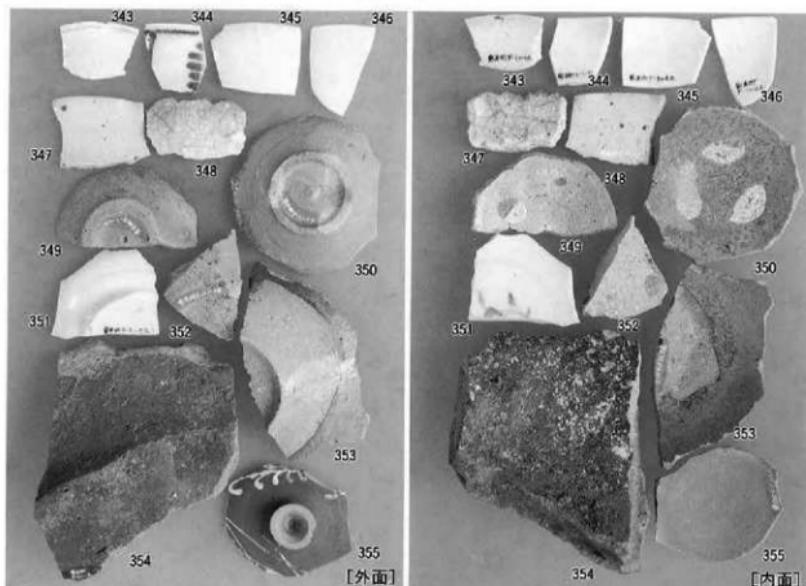


a. 出土遺物（土器・陶磁器 F-1 トレンチ） (約1:3)

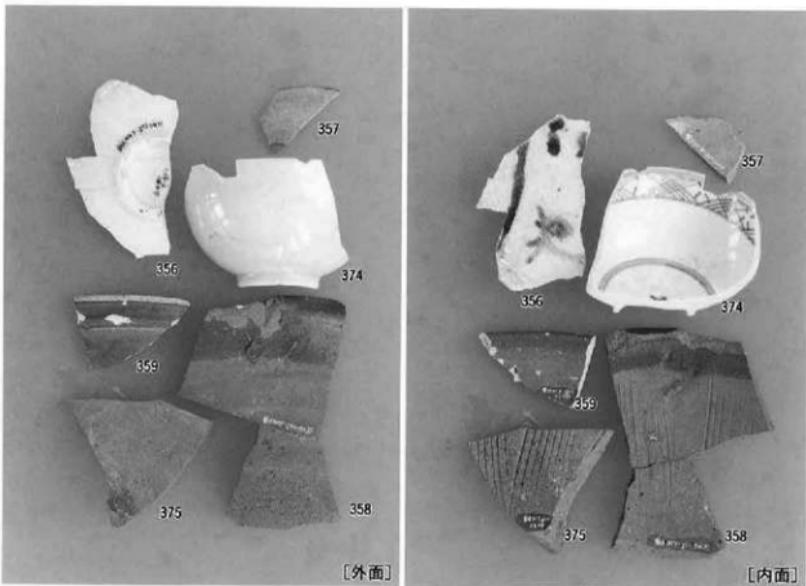


b. 出土遺物（土器・陶磁器 F-1 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）28

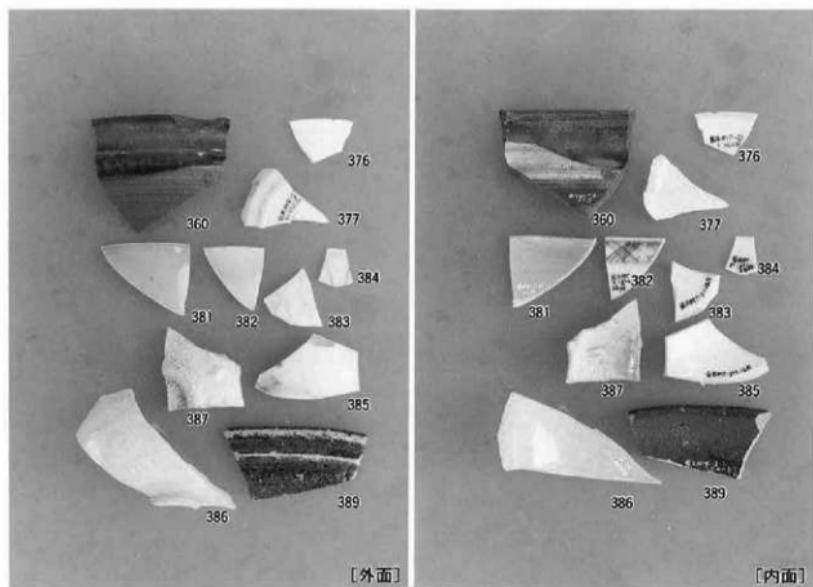


a. 出土遺物（土器・陶磁器 F-1 トレンチ）(約1:3)

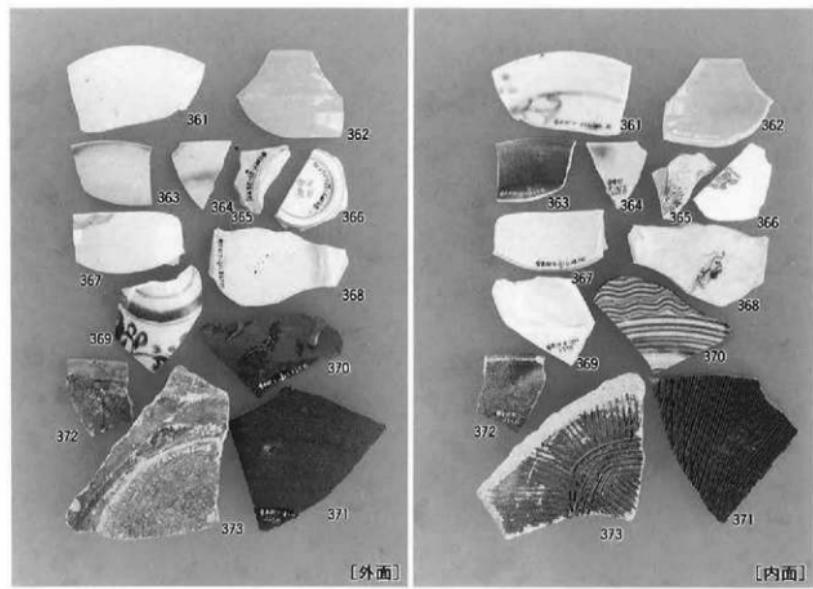


b. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2 トレンチ）(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）29

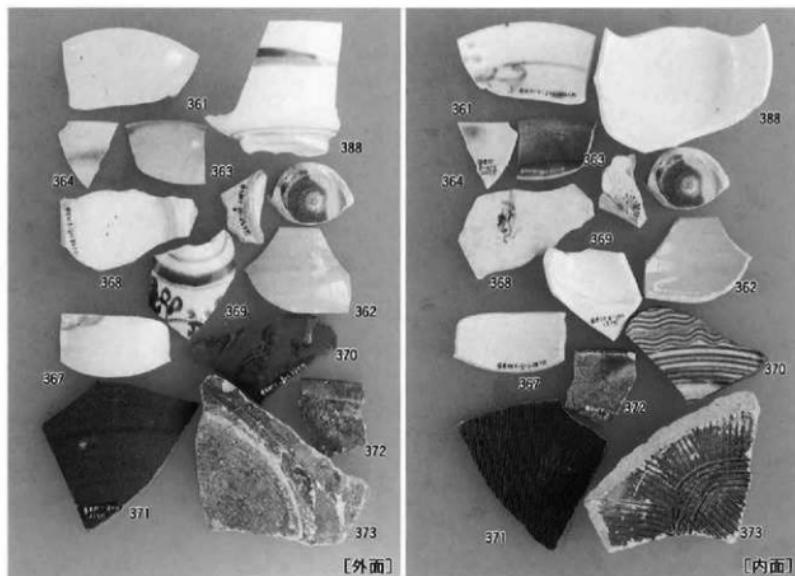


a. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2トレンチ） (約1:3)

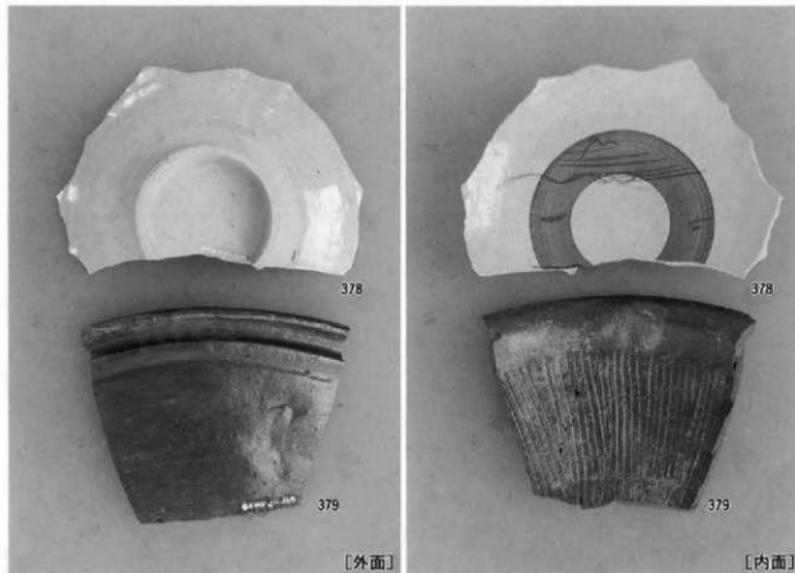


b. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）30

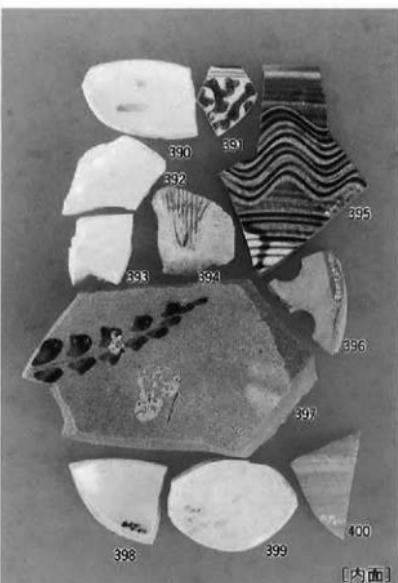
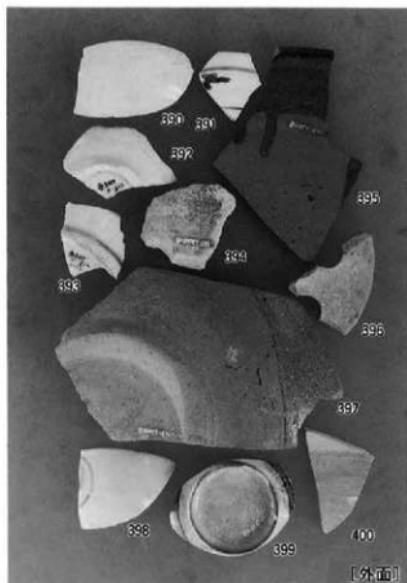


a. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2 トレンチ） (約1:3)



b. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）31



a. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2 トレンチ） (約1:3)



(約1:3)



(約1:3)

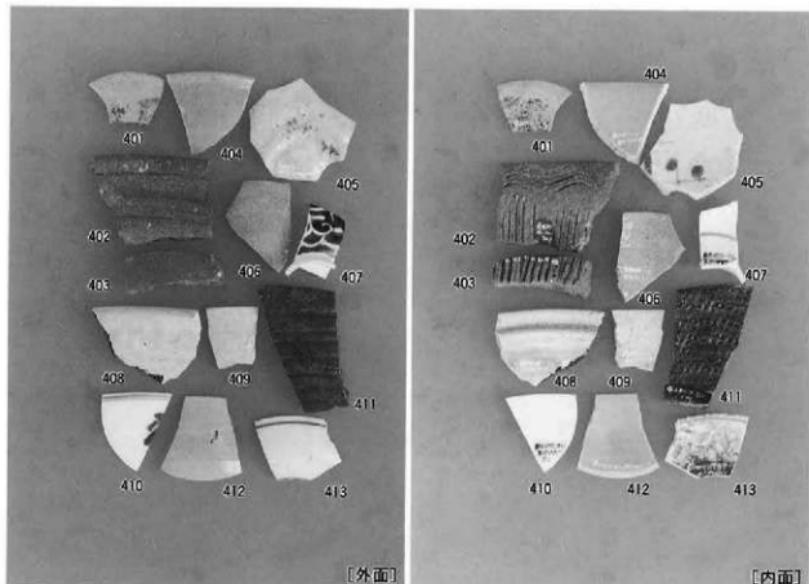


c. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2 トレンチ） (約1:3)

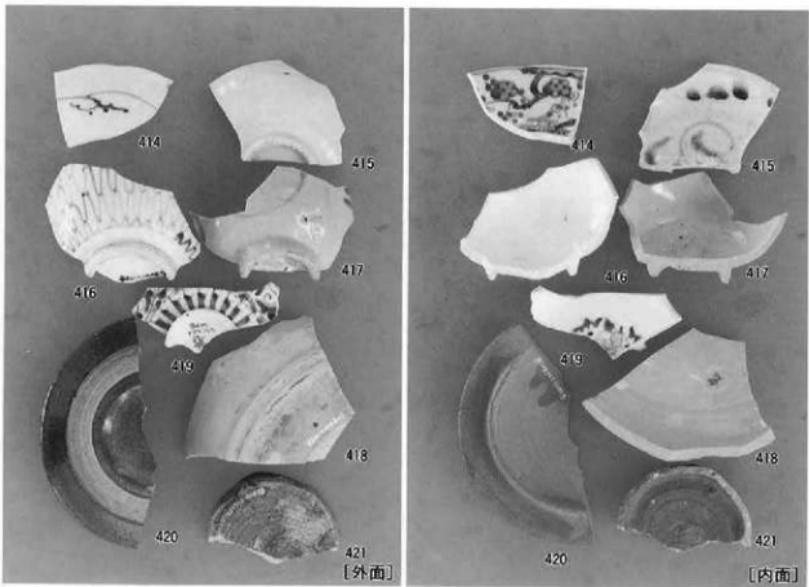


d. 出土遺物（土器・陶磁器 F-2 トレンチ） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）32

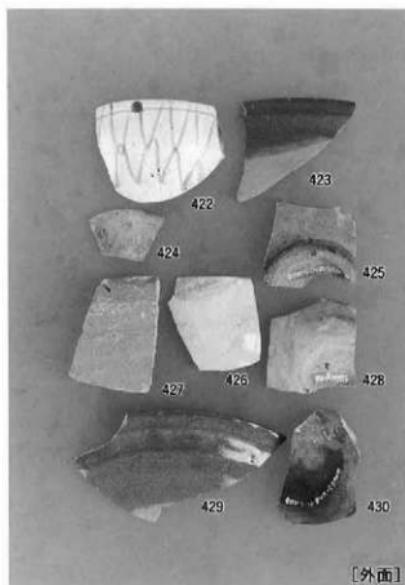


a. 出土遺物（土器・陶磁器 G 1～3 トレンチ） (約1:3)

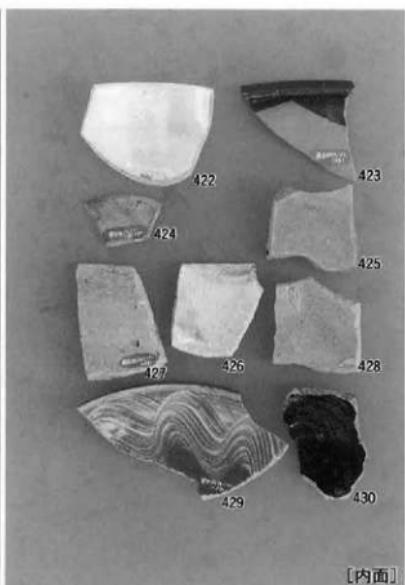


b. 出土遺物（土器・陶磁器 G-3 トレンチほか） (約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）33

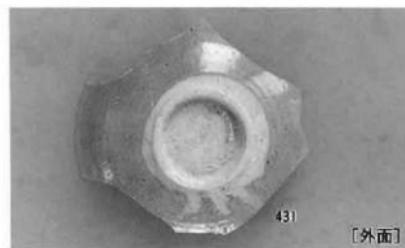


[外面]

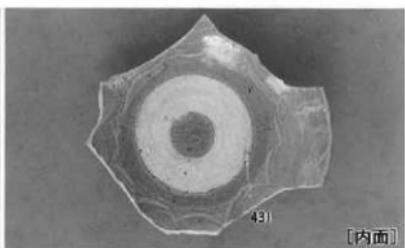


[内面]

a. 出土遺物（土器・陶磁器 H-1 トレンチ）(約1:3)



[外面]

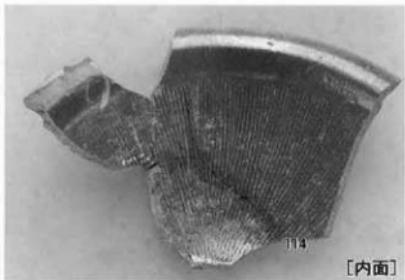


[内面]

b. 出土遺物（土器・陶磁器 H-1 トレンチ）(約1:3)



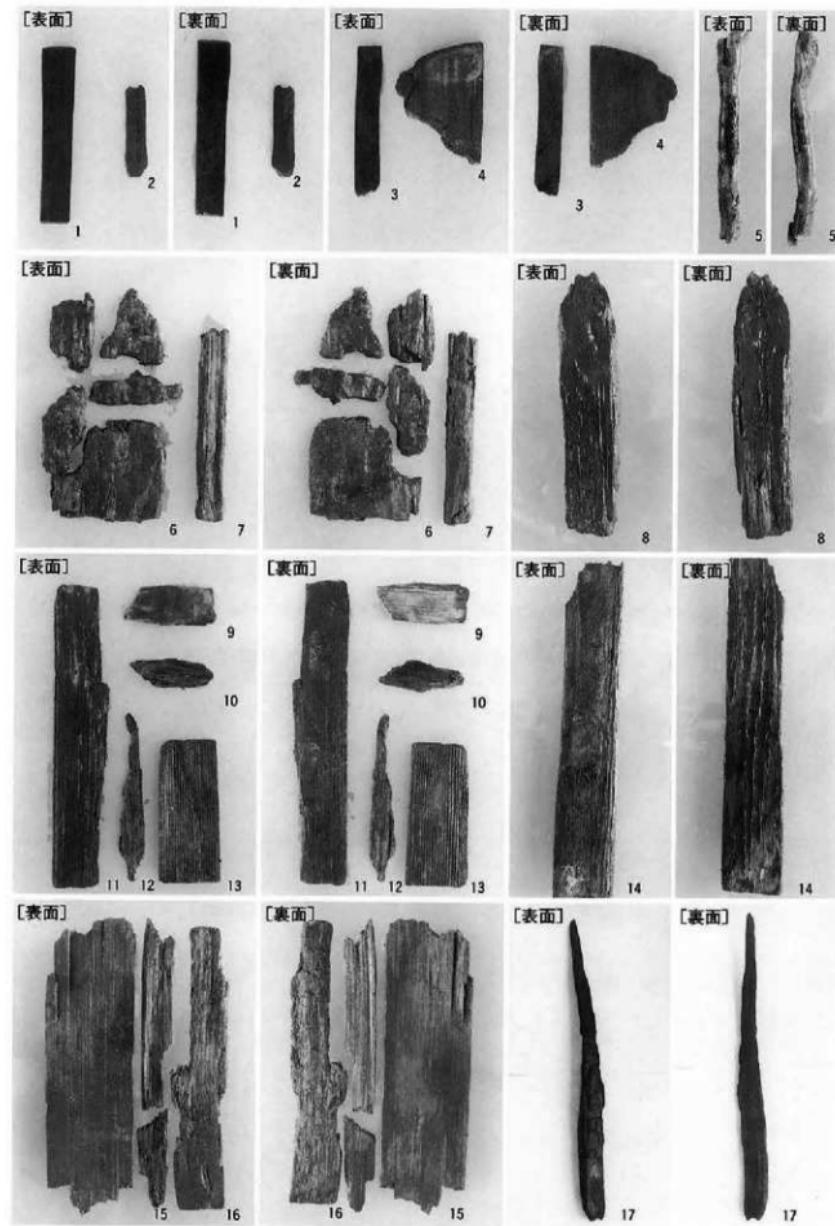
[外面]



[内面]

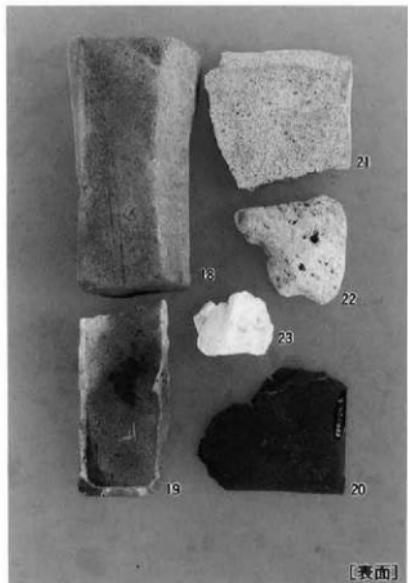
c. 出土遺物（土器・陶磁器 B-5 トレンチ）(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）34

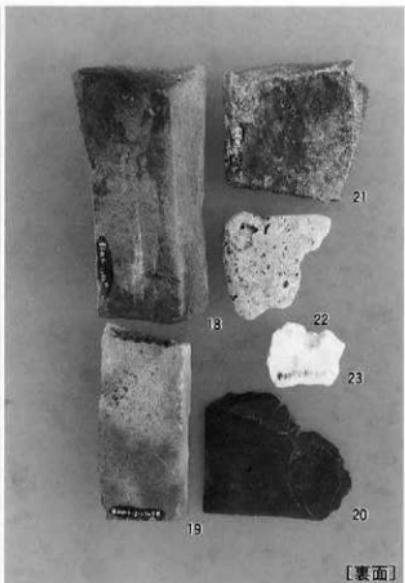


出土遺物（木製品）（1～16 約1：3，17 約1：4）

柏崎町遺跡（第2次）35



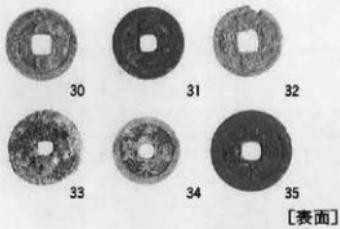
[表面]



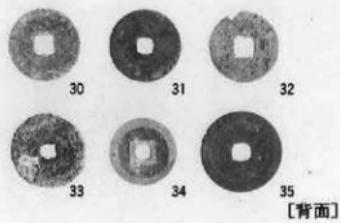
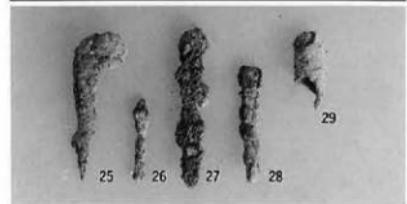
[裏面]

a. 出土遺物（石製品）

(約1:3)



[表面]



[背面]

b. 出土遺物（金属製品）(24 約1:2, 25~35 約1:3)

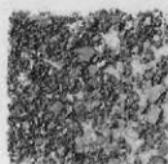
柏崎町遺跡（第2次）36



a-1 F-1 トレンチ SX-2



a-3 F-1 トレンチ SX-8 上層

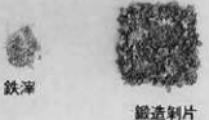


鋳造剝片



粒状滓

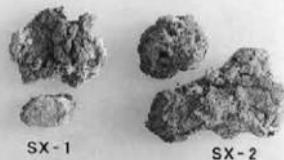
a-2 F-1 トレンチ SX-2



a-4 F-1 トレンチ SX-8 下層

a. 出土遺物（鍛冶関連）

(約1:3)



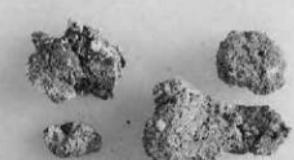
SX-1

SX-2



SX-4

b-1 炉壁（F-1 トレンチ）



SX-1

SX-2



SX-4

b-2 炉壁（F-1 トレンチ）

b. 出土遺物（鍛冶関連）

(約1:3)

柏崎町遺跡（第2次）37



a-1 炉壁 (F-1 トレンチ SX-2)

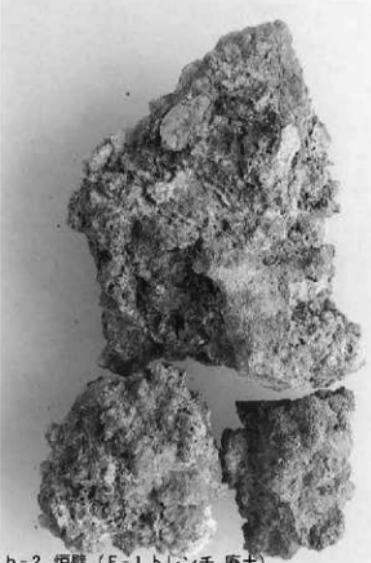


a-2 炉壁 (F-1 トレンチ SX-2)

a. 出土遺物 (鍛冶関連) (約1:3)



b-1 炉壁 (F-1 トレンチ 廃土)



b-2 炉壁 (F-1 トレンチ 廃土)

b. 出土遺物 (鍛冶関連) (約1:3)

柏崎町遺跡（第3次） 1



a. 遺跡遠景

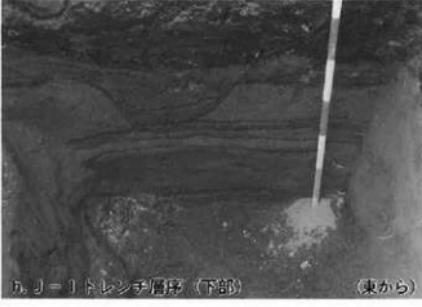
(北西から)



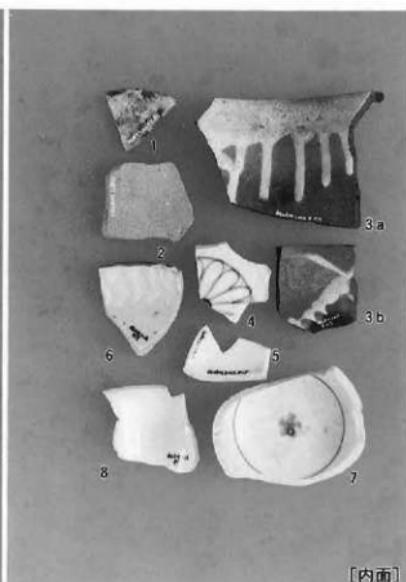
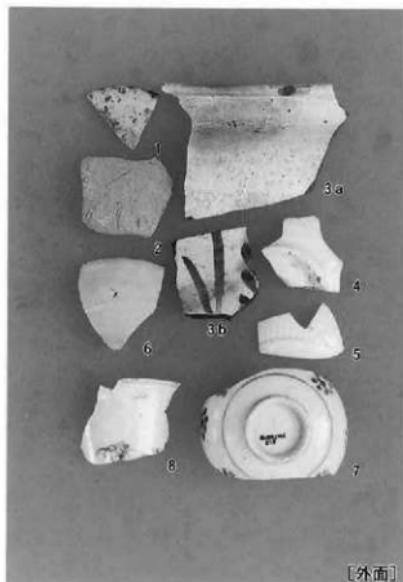
b. 調査区遠景

(東から)

柏崎町遺跡（第3次）2



柏崎町遺跡（第3次）3



e. 出土遺物

(約1:3)

藤井城跡 1



藤井城跡周辺航空写真（1955）

約1:15,000

藤井城跡 2



a. 藤井城跡（本丸）近景

(北西から)



b. 本丸近景

(南から)



c. 本丸西の内堀

(西から)



d. 本丸西の土塁断面



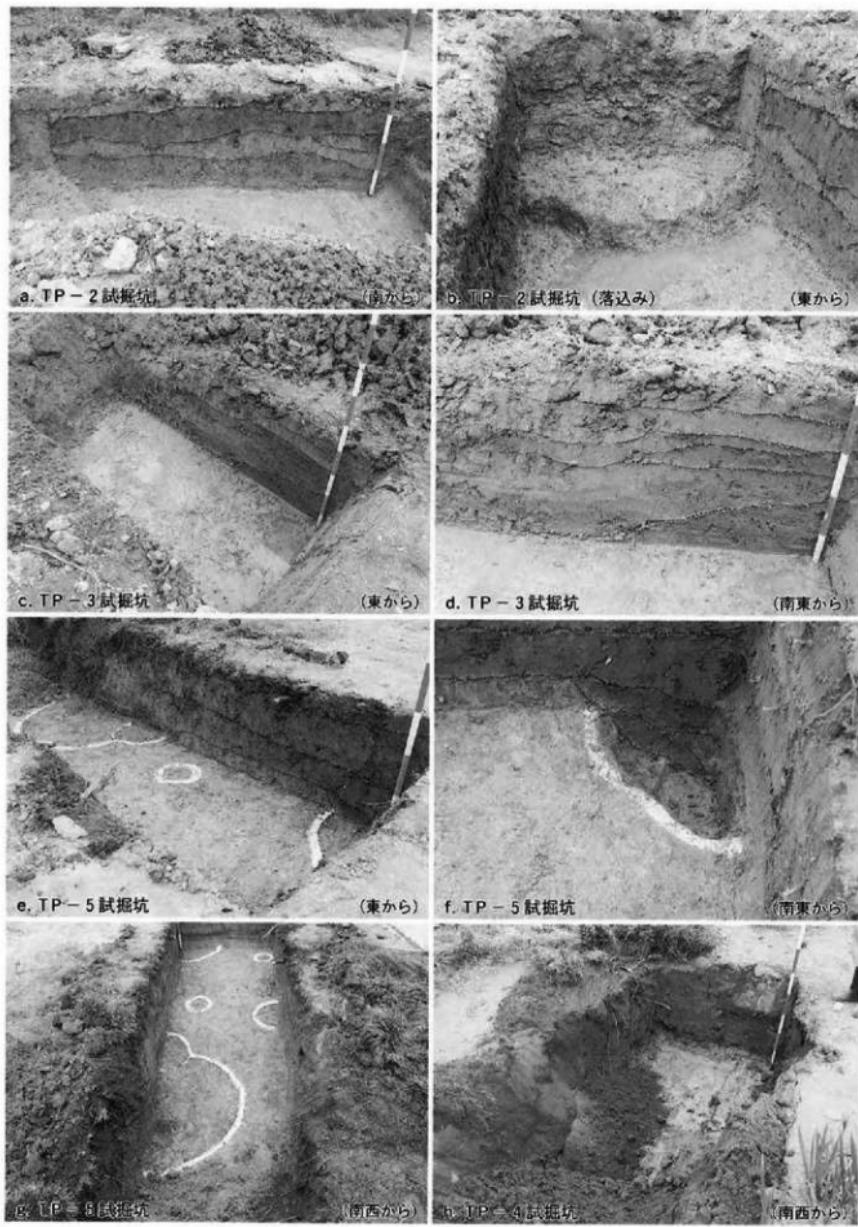
e. 本丸北辺の内堀

(西から)

藤井城跡 3



藤井城跡 4



藤井城跡 5



a. 遺構確認状況

(南西から)



b. 遺構確認状況

(南西から)

藤井城跡 6



a. 遺構発掘状況

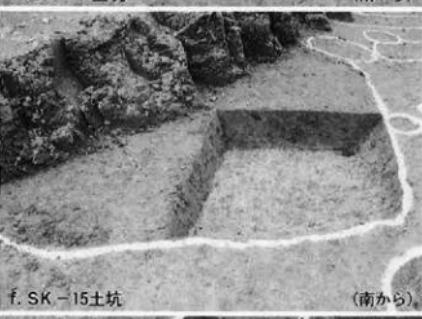
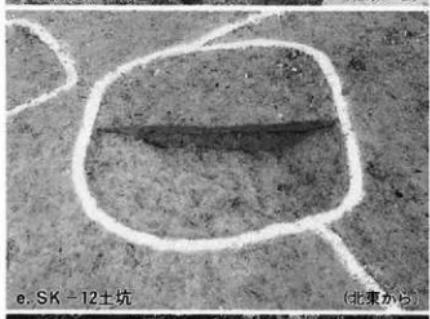
(南西から)



b. 遺構発掘状況

(北東から)

藤井城跡 7



藤井遺跡8



a. SD-23 堀状遺構と五輪塔（火輪）

(南から)



b. SX-26道路と側溝

(西から)



c. SD-19溝（側溝）

(西から)



d. SD-22・27溝（側溝）

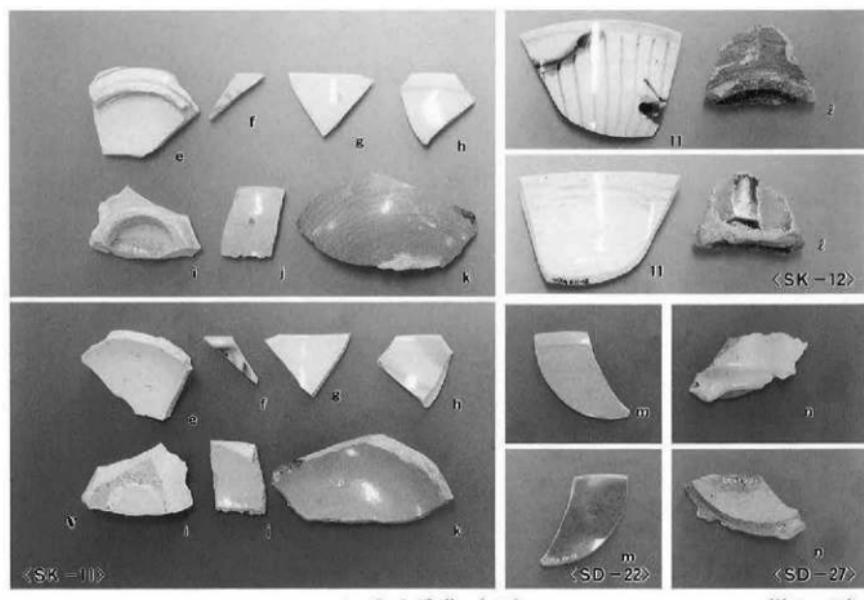
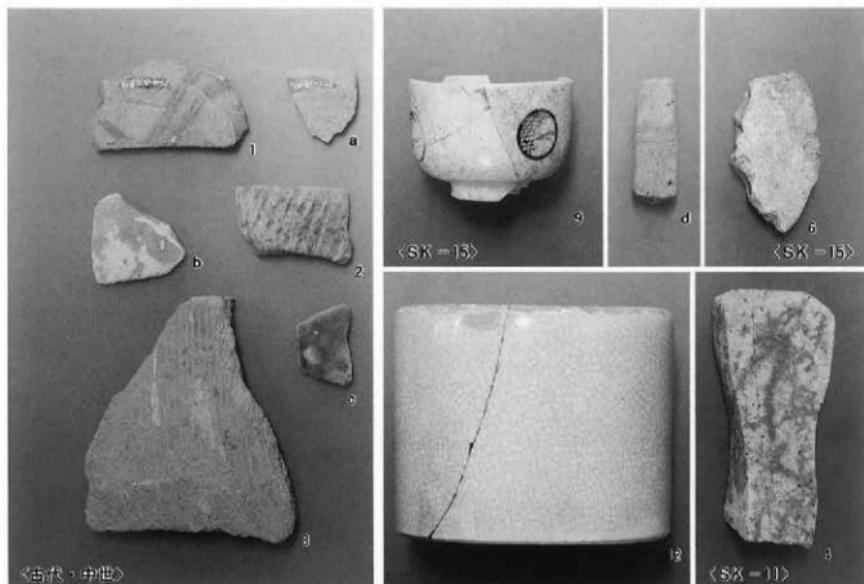
(西から)



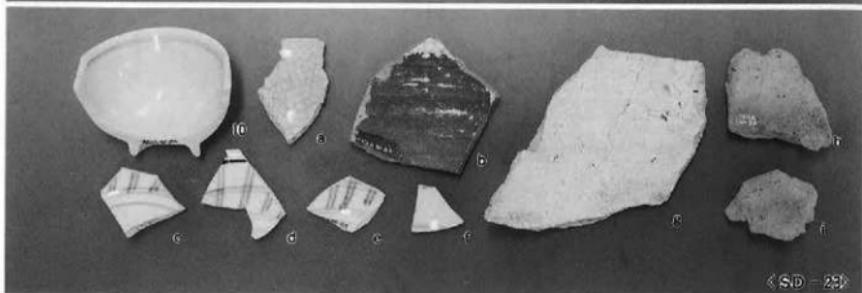
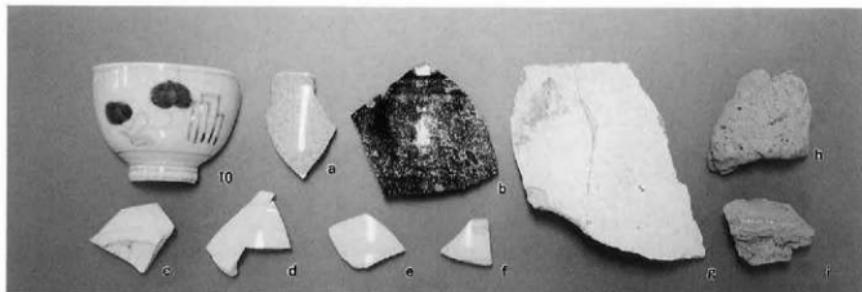
e. SD-23堀状遺構の落込み

(南西から)

藤井城跡 9

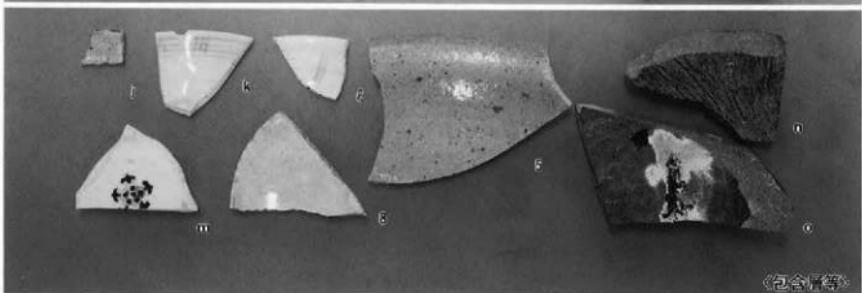
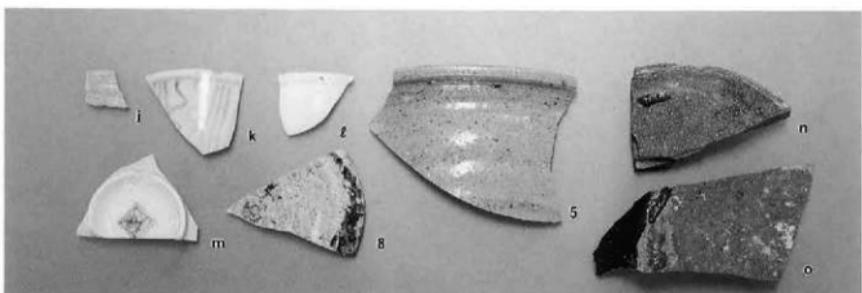


藤井城跡 10



a. 出土遺物 (3)

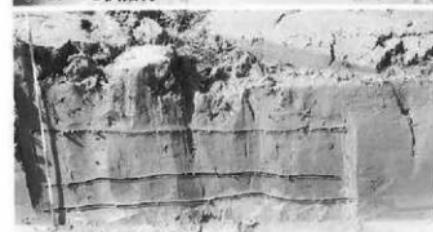
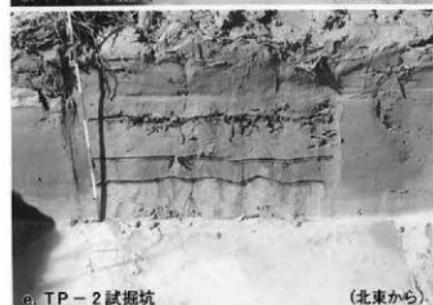
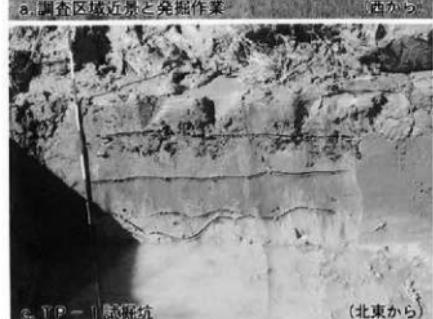
(約1:2)



b. 出土遺物 (4)

(約1:2)

小峯遺跡 I



小峯遺跡2



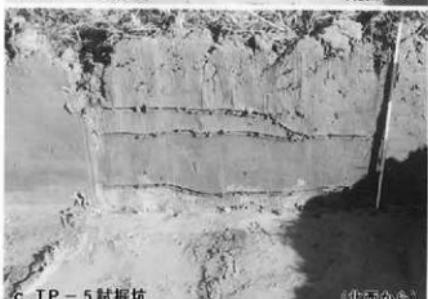
a. TP - 4 試掘坑

(北西から)



b. TP - 4 試掘坑

(南西から)



c. TP - 5 試掘坑

(北西から)



d. TP - 5 試掘坑

(南西から)



e. TP - 6 試掘坑

(北西から)



f. TP - 6 試掘坑

(南西から)



g. TP - 7 試掘坑

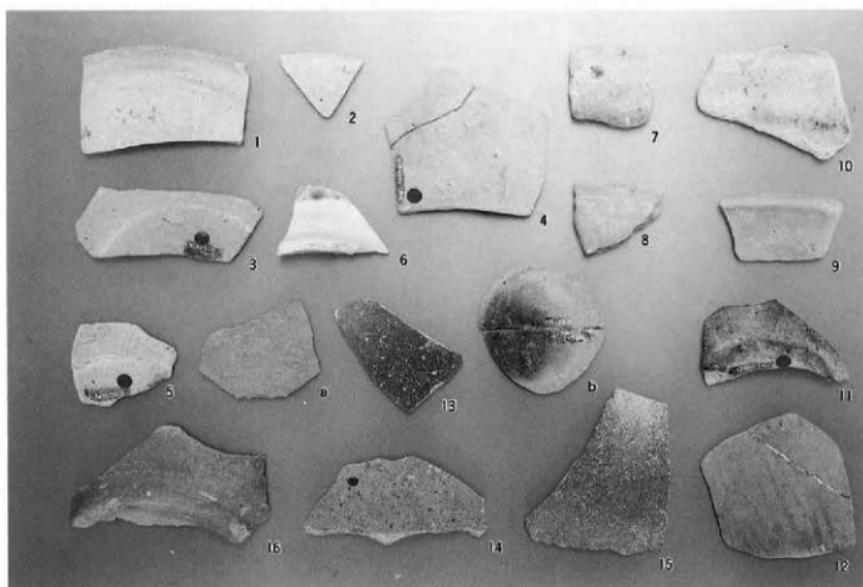
(北西から)



h. TP - 7 試掘坑

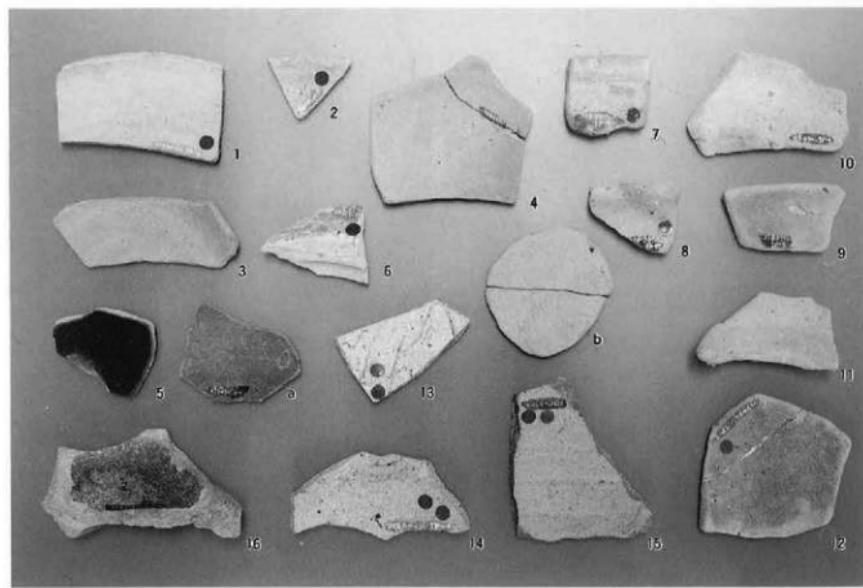
(南西から)

小峯遺跡3



a. 出土遺物 (1)

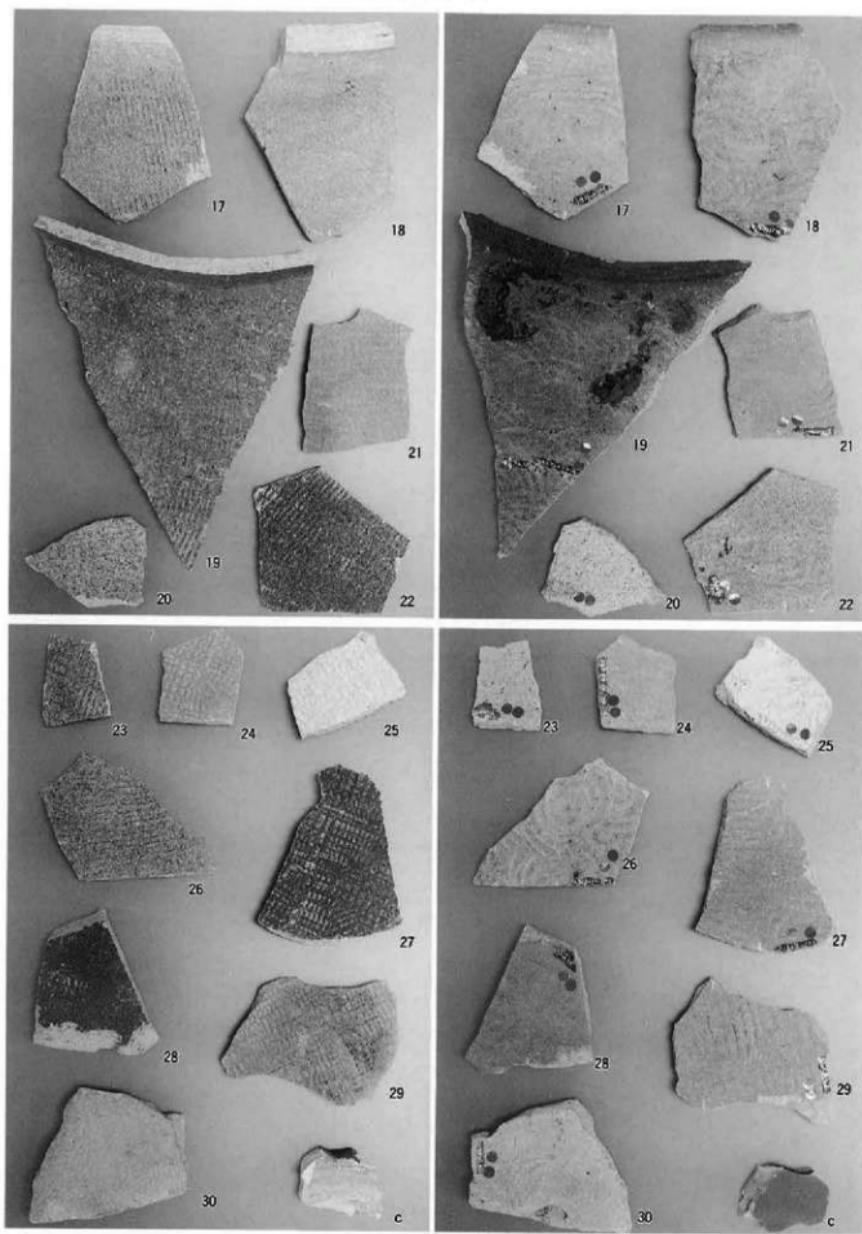
(表 約1:2)



b. 出土遺物 (2)

(裏 約1:2)

小峯遺跡 4



(表)

出土遺物 (3)

(裏 約1:3)

報告書抄録

ふりがな	かしわざきしのいせき IX						
書名	柏崎市の遺跡 IX						
副書名	柏崎市内遺跡第IX期発掘調査報告書						
巻次	IX						
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第33集						
編著者名	猪爪一郎・品田高志・中野純・伊藤啓雄						
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室						
発行者	柏崎市教育委員会						
所在地	〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-23-5111 内線365						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柏崎町遺跡 (第2次)	新潟県柏崎市 東本町1丁目	15205	697	37度 22分 00秒	138度 33分 25秒	19990112 ~19990408	170	市街地再開発事業に伴う試掘確認調査
柏崎町遺跡 (第3次)	新潟県柏崎市 東本町1丁目	15205	697	37度 22分 00秒	138度 33分 28秒	19990804	11.7	市街地再開発事業に係る電線共同溝工事に伴う確認調査
藤井城跡	新潟県柏崎市 藤井	15205	59	37度 21分 57秒	138度 36分 19秒	19980622~ 19991018 ~19991020	132	市道改良工事に伴う確認調査
小峯遺跡	新潟県柏崎市 半田3丁目	15205	680	37度 21分 29秒	138度 34分 43秒	19991021	47.4	市道新設拡幅工事に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
柏崎遺跡 (第2次)	集落跡	中世~近世	鍛冶炉跡	中国染付・青磁・中世土師器				
柏崎遺跡 (第3次)	集落跡	中世~近世		中世土師器・近世陶磁器				
藤井城跡	城館跡	近世	溝跡・土杭	近世陶磁器				
小峯遺跡	集落跡	古代	須恵器・土師器	須恵器・土師器・黒色土器				

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第33集

柏崎市の遺跡 IX

——柏崎市内遺跡第IX期発掘調査報告書——

平成12年3月31日 印刷

平成12年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 株式会社 柏崎インサツ